
デリート

和 貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デリート

【Nコード】

N2985C

【作者名】

和 貴

【あらすじ】

僕達は、病んだ「ある人物」が自らの身体を取り替える目的で行った違法実験から造り出されたうちの双子だった。特殊能力を持っていた病弱な僕は、その身体を維持する為に双子のニアの身体を移植して命を繋がれていた。そんな事を知らない僕達は、「ある人物」の所有している宇宙船に偶然とはいえ密航してしまい、ニアは銃弾を受けて船外へと放り出され、残った僕も「身体」を失ってしまう。

第1話 化粧品

「止めろ……止めて！」

僕の声が震えた。

遅くなった学校の帰り、僕は初めて目にする奇妙な「ヒト」達に呼び止められた。

彼等は外見上、ヒトの身体を模してはいるが異星人と人間とのミックスだ。

自然光（太陽光）を極端に嫌う地下の都市社会に棲む住人で、肌は僕よりも青白く、堅く絡まった頭髮はそのまま。凡そ身嗜みといった衛生上にはお構い無し。彼等は「エレメンタル」（突然変異種）と呼ばれていて、時には僕達の言う「超能力」なんかを持ち合わせている「ヒト」も居るらしい。

雑居ビルに囲まれた人気の無い狭い路地に僕は連れて行かれ、いきなり乱暴された。薄暗い暗闇に反響する複数の靴音が入り乱れ、僕の悲鳴が混じる。

僕の両腕は左右とも奇妙な方向へと折れ曲がっていた。全身の感覚が麻痺している。呼吸する度に胸からは不快な音がして、鼻の奥がキナ臭くなっていた。

僕は彼等の一人に胸倉を掴み上げられる。彼等の狂気を帯びた黄色い眼が、闇の中で爛々と光った。

「助けて……」

僕は固く眼を瞑って祈るように何度も口走っていた。その間にも、何人ものエレメンタルに突き飛ばされ、蹴飛ばされる。

どうしてこんな街中に彼等が居るんだ？ 移民局は何を管理しているんだ？

無惨に殴られ、暴行されているのに、僕の頭のはそんなコトを冷静に考えていた。

自分の感覚を遮断して麻痺させているもう一人の僕が居る。物凄く不自然で奇妙な感覚がしている。

集中力がある一定の基準値を超越すれば、その五感意識と分裂する――

詰まり、痛覚等の感覚が無くなると何処かで読み齧ったのを思い出していた。但し、その域に到達するのにはかなりの熟練が必要だとも記載されていたみたいだったけど……？

変だ。こんな事初めてだ……

僕の頭とは別に、感覚を切り離された身体から荒々しい息遣いが漏れる。

「ぐっ！」

投げ出された胸の上を足蹴にされた。

身体が大きく「く」の字に曲がり、嫌な鈍い音がした。堪らずに戻した物は、大量の血液だった。目の前の真っ赤な血の色に、僕の分離していた意識は一瞬で引き戻されてしまう。

苦痛に歪めた顔を、ほんの少し持ち上げた。

僕のすぐ傍で、一緒に居た双子の「もう一人」が同じ目に遭っている。

僕達は何をしたって？ 言い掛りを付けて来たのは彼等だ。造りが同じでも僕達は別々だ。双子で何が悪いんだよ？

ナニモシテナイノニ……

「誰か……誰か助けて！」

路地からは本道に続いており、そこから沢山の人を通り過ぎて行く。でも、誰もが僕達から眼を逸らせ、見ない振りをして立ち去って行く。

どうして？

「馬鹿め、俺達エレメンタルに齒向う奴が何処に居る！」

彼等の嘲る声あざわらひが、僕達の恐怖心を一層掻き立てた。

（誰も助けてはくれない。このままだと二人共殺される……）

「嫌だ！ ……死にたくないッ！」

恐怖と絶望の中、僕は双子のもう一人の意識と同調してパニックに陥った。

全身が燃えるように熱い。

目の前が真赤に染まり、続いて辺りの物が真っ白に溶け込んだ。眩いばかりの光は総てを覆い尽くし、そして……

＊ ＊

ガラスの罅割れる鋭い音と、自分の叫び声にはっと目を覚ました。上半身がベッドから摺り落ちていた。

全身汗でびっしょりになって喉の奥がカラ々だ。

（キモチガワルイ……）

僕は両腕を掻き寄せて、ぶるっと身震いすると、軽く咳き込んだ。

（……風邪？）

その時僕はこの異常にまだ気が付いていなかった。本当に単なる風邪だと思っていたんだ。

「マック、なあに？ 今の」

ドアの外で聞き慣れた声がした。

夢？ そうか……そうか、夢だったんだ……良かった……

緊張が一瞬で萎えた。

なんとか落ち着こうとして、額に張り付いた前髪を掻き上げる。

「……」

僕はテーブルに置いていたメガネのレンズが割れている事に気付いた。

肩で息をしながら、汗でじっとりと濡れた右の掌を見詰める。

（……また壊しちゃった）

今度は全身が震え出した。

夢だと判っても、言い表しようの無い焦燥感は消えてない。それは僕にとっては余りにもリアル過ぎた。

だって……また見たんだ……同じ夢を。

人口の増加に伴い、人々は安住の地を宇宙へと求めて行った。
何世代にも亘って第二の地球を探す旅。

そしてもう一方の道を選択した僕たちの祖先は、地球の傍に月と同様の巨大衛星を創り出した。

「エア」と名付けられた第二のコロニーは、その総てが人工的に創り出された物だった。地表と呼ばれる大陸の周りには空気が満たされ、地球と同じく自然が造り出されていた。

自然が人工的に創られた物で在ること以外は、何ら地球と変わらない。むしろ地球よりずっと浄化されていて綺麗なのかも知れない。そして、一時は安息を得られたかのように見えた……けれど、過去から積み重ねられて来た戦争兵器汚染や食物への過剰な遺伝子操作等様々な人為的要因から、世代交代が何世紀と続かぬうちにいつの間にか人々のDNAは汚染され、傷付けられていた。

勿論、地球外生物との交流もあって、いつしか人間とエレメンタル（突然変異の知的生命身体）、サイバノイド（^{ノーマル}人造人間）との確執。加えて旧世紀から続いている、人間間での人種差別問題も未だに根強く残っており、深刻化の様相を呈^{てい}していた。

「入るよお？」

軽い電子音がして、ドアが開いた。

肩に掛かるさらさらの栗色の髪。

ツリ眼気味のくりっとした大きな瞳は、まるで猫の瞳のように光の加減で濃い金色にも真紅にも見える。

体型は小柄で華奢な……どっちかと言うと痩せた小学生に見える女の子が立っていた。

しかも、彼女は僕と全く同じ顔、同じ背格好なんだ。

その彼女が仏頂面をして、しきりに右の利き手を振っている。

うわっ、すごく不機嫌。

「何？　また静電気？」

彼女は僕の問い掛けに軽く頷いた。うなずそして、のろ々と起き上がり、ベッドに据わり直す。

「な……何？」

肩を竦めて身構える。

努めて平静を装うけれど、僕の眼は既に怯えて腰が完全に退けているのが自分でも解った。

「あんたねえ」

彼女はぐっと顎を引き、上目遣いで睨み付けた。

その瞳が紅く光って、自分と同じ顔なのに、何故だか彼女が怖い。

「ゴミは収集日が決まってるの。って何度言ったら分かるのよお。

しかも、全然分別出来て無いしい」

「……はあ？」

拍子抜けする。何かと思ったらこれだもの。

「……煩いな。後で分けようと思って取敢えず出しておいたの。別にニアに頼んだ覚えは無いよ。迷惑かけてないし。それにあのゴミだって……」

「そお言う問題じゃないの。玄関に置いてたら邪魔でしょ？　邪魔。それに、この前（授業を）休んだ時、ノート貸してくれた子にちゃんと返してお礼言ったの？」

言い掛けた言葉を偉そうに遮られてムツとする。そりゃあノートはまだ返していないし、当然何もしていないけど……

「ucciち、煩いよ。どうだっていいじゃないか。貸してくれて僕が頼んだ訳じゃないし。第一、ファラが勝手に持って来たんだ。礼を言う必要なんかな……」

最後まで言わせて貰えなかった。

ニアはつかつかと歩み寄り、いきなり僕の鼻を摘んだ。

「イデデデッ！」

「あゝに言っつてンのよ。マックってば、人に感謝するって気持ちと

か、礼儀とかったのは持ってナイの？」

「相手のお節介にまで礼言う必要なんかないっつーの。ったたたっ」
「まだ言う！」

今度は両耳を握って乱暴に揺さぶった。

「いいゝってえええゝ！そーだよッ！」

「バカッ！」

ニアはやっと手を放した。

僕は呻きながら、両耳を押さえてうずくま蹲る。

この恐ろしく乱暴なのが、僕のもう一人であるニア・ロディナル。
十二歳。

ドクターが言うには、一卵性双子で性別が違っているのは珍しい
そうなんだ。

背格好では、元々二人共標準よりも成長が遅れているせいもあつ
て、髪の長さと僕が掛けている眼鏡でしか二人の区別が殆どつか
ない。

ただ、決定的に違うのは、病弱で通院生活を余儀無く強いられて
いる僕と違って、陸上部で走り回って真っ黒になっている彼女とは
明らかに肌の色が違っている。今は紫外線が一番強い時期だからな
おの事だ。

それで初対面の人からは、よく僕が女の子で彼女が男の子だと勘
違いされてしまう。双子で造りが同じなんだから、仕方無いけど。

尤も、常に医師の手が必要な病弱の僕に、元気が服着て歩いてる
ようなニアを比べるってのも、根本的に間違っているような気がす
る。

僕達は別々の環境で育っていた。ニアと会ったのはつい半年前の
事だ。

ニアは僕の存在をずっと前から知っていたそうだけど、僕は彼女
と出会う寸前まで自分が双子だって事知らずにいた。

だけど、僕達が出会う前には、時々行った事も無いような所へ行った夢をお互いが見ていた。この事は後で分かったのだけど、どうやら僕達はお互いの体験を共有出来て、心だけで会話出来る精神共鳴の能力があるようだ。

そして、お互いの共有した情報は眠っている時に見る「夢」として記憶され、蓄積されている。一緒に生活し始めると、ニアからの共有情報は多くなり、僕はベッドに居ながら、頻繁に彼女からの情報を得ていた。だけど、それはみんな彼女の体験情報であって、僕の体験じゃない。

以来、学校へ行けるようにまで回復した僕は、半年経った今でもしばしば自分の置かれている状況に順応出来ないで居る。でも、もっと混乱していたのは僕達を取り巻く周囲の人達だった。眼鏡の有無や肌の色で判断出来るけれど、それ以外では二人の微妙な違いに気付かなければ、僕達の区別は無理。

それだけ僕達はそっくりだったんだ。

ニアは、窓のブラインドを全開にした。

溢れんばかりの光が射して、思わず片腕で眼を覆う。

ニアに苛められたせいかも知れないけど、何だか身体がだるくて気分が悪い。

「さっさと着替えなよ？ ニアはもう行くからね」

ニアはリモコンで透明ガラスに白いフィルターを掛けた。

突き刺すような光は、穏やかな程好い明るさになる。

「行くって？」

キョトンとして聞き返した。

「そ、時間。早く行かないと知らないよ？」

ニアの指差す方を見る。

時計は八時を過ぎていた。

「うわっ？」

寝過ごした！

思わず腰を浮かす。

「その寝癖、ちゃんと直してから行きなよね」

ニアは僕の頭を指差すと、リモコンを無造作に投げて遣した。

そしてふふんと鼻で笑って部屋を出て行く。

ついでにテーブルに置いてあった手付かずの板チョコを掠め取って。

「あっ！」

最後に残しておいた理紗りさからのバレンタインチョコを……って、もういない。

「ちえっ」

まあ、義理ってヤツだろうけど、折角大事に残してたのに……起こすなら、もっと早く起こしてくれればいいのに。それに、さっき僕に礼儀とか何とか言わなかったっけ？ よく言うよ人のモノ盗って行って……第一、あのゴミだってニアの部屋のゴミじゃないか？ 僕に自分の部屋の掃除まで押し付けるなっつーの。

僕は赤くなってジンジンしている鼻と耳を交互に擦り、軽く咳き込みながら恨めしそうにニアの出で行ったドアを睨み付けた。

＊ ＊

「それってさあ、『予知夢』ってんじゃないの？ マックってミヨーにカンが良い時あるし」

僕はタケルとケインの三人で、ジュースを片手に教室移動をしていた。

ケインの言葉に、思い当たるフシがあってドキツとする。

「そっ、そう……かなあ？」

「でもよ、エレメンタルにはマジで気つけておかねーとヤバイぜ？ Fクラスの榎田まきたって奴、今日休んでるのどーしてだか知ってるか？ 夕べ行ったゲーセンでエレメンタルの奴等にインネンつけられ

て暴行されたって。マツクの夢と同じじゃん？　でさ、まだ意識不明なんだと。アイツのオヤジって議員じゃん？　もお激怒っちゃってさ、豪い勢いでサラのオヤジん所行って、言わなきゃ良かったのに「エレメンタル狩りだ！」とか何とか口走っちゃって、マスコミにスクープされたんだ」

「エレメンタルが？　地下居住区でしかあいつ等活動出来ないし？」
「だら、夕べだって言ってるだよ。昼間の自然光（太陽光）が駄目なんだろう？」

タケルがケインに知ったかぶりを披露する。

「移民運営局が管理してるのに？」

「奴等だっていつまでも、そう馬鹿じゃないだろう？　昼間は無理でも夜間なら……何処からか抜け道一つかそんなもん見付けたとか、誰かに手引きでもされて出て来たんじゃないの？」

僕の質問に、タケルが尤もらしい理由を付ける。

だからだ……この所、やけに夜間のパトロールが嚴重になったなと感じていたのは。

僕達三人は黙って視線を足元へと落した。この地下数百メートルの先には彼等「エレメンタル」だけの社会が存在している。

僕は悪夢を思い出して鳥肌が立ち、身震いした。

「なるほどね……でも、榎田のオヤジがどうしてサラのオヤジの処に行くんだし？」

ケインがタケルに訊ねた。

「知らねーのかよ？　あのオヤジ陸自の上官だぞ」

「うえっ。じゃあさ、サラと結婚する奴って命懸けだし」

「言うねえ。ケインも。オヤジの気に入らなきゃ迫撃砲ブツ放すってか？」

タケルが茶化す。

「コンコン……うっ！　ゴホッ！」

始業時間からずっと意識して咳き込まないようにしていたのに、気が緩んで思わず咳をした。

「んあ？ マック風邪か？」

「大丈夫かよ？ おい？」

二人が敏感に反応するのは、きっと来週から実力診断テストが控えているからだと思った。

「う……ん。ちょっと寝冷え」

僕は軽く笑ってごまかす。胸が少し熱い……でも、このぐらいどうって事ないさ……多分。

この症状を僕は軽く考えていた。

「寝冷えって……お前ってばお子様だし」

ケインが呆れる。

「うつすなよ？ 俺、今週の実テに賭けてるんだからな。ま、大事を取ってお前がリタイヤすれば俺が今度こそトップに返り咲くけどな？」

タケルが不敵な面構えで僕を軽く睨んだ。

タケルはいつでも僕にリベンジだとか言って挑戦して来る。

「う、うん。でさ、槇田君のお父さんの事だけど……」

僕は曖昧に返事をする、慌てて話を元に戻した。

僕のひ弱な身体に難癖付けられるのは御免だったし、友達であっても勉強のライバルだと公言するタケルの嫌味も聞きたくなかった。

「あのおじさん、確か選挙の時にエレメンタルと友好をとかマニフエストに謳^{かた}っていたいなかった？」

僕は温厚そうな選挙当時のポスターの顔しか頭に浮かばない。

「誰だっさ、いざ身内が被害を被ると、そんなもんだろ？ あいつ長男の一人っ子だから余計だな」

タケルが冷静に分析する。

「ふーん。いざとなったら議員の地位だって捨てちゃうのかな？」

「馬鹿。それはそれ。これはこれだし」

ケインが僕の額を指で小突いた。

「???」

「あんな事言ったって議員は辞めないと思うぜ？ 自分達から仕掛

けて行ったんじゃないし、第一、被害者だからな。ちゃんとした理由があるもんな。他のクラスにも被害に遭ってる奴等、結構いるぜ。親父から聞いたんだけど、ここだけの話、レイプに遭ったってゆー奴もいる」

「レ？ ……はあ？」

聞き慣れない言葉に僕は首を傾げる。

「だあーっ、もおいいって。マックには判んなくって」

「???」

「やだねえ。マックってばお子様だし」

ケインがタケルの言葉を続けた。そして大袈裟に首を振る。

「お子様……って……?」

僕は何の事だか解からない。

「マックさあ、ニアそっくりだし、間違って襲われたりしてな？」

ハハ……」

「ははは、まさか」

声が浮付いて、顔が引き攣る。

笑えないジョークだ。こっちはそんな夢ばかり何度も見て悩んでるのに……タケル達に話したのが間違이었다。

「いいや、実際お前達二人が半年前に転校して来てからとゆーもの、皆の視線が気になってしょーがないだろ？ 女子なら話は解かるけど、一部の男子のお前を見る眼ってちょっとヤバくない？ お前、上級生の男子から「カワイー」とかって言われてんだぜ？ どうよそれ？」

「ええっ?」

再び全身が鳥肌立ち、髪が逆立った。

僕は思いつ切り退いてしまう。

(知らなかった……)

確かに、皆や先生達の視線が気になっていたのは事実だ。

けど、それは僕が病弱で学校を休みがちなのに、ずっと首席でいるからじゃないのかなと勝手に思い込んでいた。

学校を休んでいるのは病気のせいじゃなくて塾に行ってるからなのかと訊かれた事もあった。尋ねるだけならまだしも、実際に塾に行ってズルイ事していると決め付けられ、僕は何度も中傷された。半年前の転校して来た頃には、タケルですら例外じゃなかった。尤も、僕が来る前まではタケルが学年トップだったから猶更だ。元々病弱な僕には自分を表現出来る範囲が限定されていた。何もしないよりはマシだったし、病院の先生達も何かに夢中になれるものを探せば良いと僕に勧めた。

それがたま々勉強だっただけの事だ。
でも……違うの？

「大袈裟なんだし。マックってバリアクションが」

「知らぬは本人ばかりなり……ってか？」

タケルがまたしても茶化す。

「ま、まさか、二人までそう思っているんじゃないよね？」

「ったり前だ！ 俺はそんなアブナイ奴じゃない」

偉そうに腕組みをして勿体をつけながらタケルが断言する。

「まあ、ニアなら別だけどよ。あと四、五年して胸なんかもこう……出てくりや言う事無しだ」

そう付足して、両手を胸の前で抱えるように拡げて見せた。表情が緩んで鼻の下が伸びちゃっている。

「うっわぁー、タケル今相当エロイ顔してるし！」

ケインがタケルを見てにや々する。

「……はぁ、あのニアがねえ……ムリだと思っけどな」

僕の頭の中で、ウエストだけが括れたスリムなニアの身体が浮かんだ。

彼女は家では僕が居てもお構い無しで、お風呂から出てバスタオル一枚でウロウロしている。僕に背を向けて、エアコンに向かってそのバスタオルを拡げた事だって何度もある。きつと、恥ずかしいとか言う羞恥心はニアには無いんだ。

それとも僕の事を男子だと全く意識していないからかな？

本当にこっちが恥ずかしくなっちゃうよ……胸だって本当にささやかで……って言うよりも真っ平らだし、ニアが懂れているブラとかって言う物のお世話には縁遠い。

ケインの予言している様にはきつとならないと思った。

「なあーんちゃって。気にすんなよ？ 大丈夫だって。トリガラのお子様を襲う物好きなんてそうザラには居ないって。でもブツチャケお前この頃顔色良くないぜ？」

神妙な面持ちで黙り込んでしまった僕の頭を、タケルがふざけてヨシヨシと撫でた。

「つて、気にしろって言ってる！ それに、トリガラは止めろよ」僕には却って気にしろと言われたようにとれて口を尖らせる。やっぱ、これだけ小さけりゃそう言われても仕方ないのかな？

お世辞でも僕の身長は標準以下だし、体重だって軽く四十を切っている。背の順に並んでも、僕とニアが学年で一番。ダントツに低くて小柄だ。

参観日に来ていた父兄から小学生がクラスに居ると勘違いされたことだって一度や二度じゃ無かった。

タケルが言った「トリガラ」は初めて会った時から言われている。彼に言わせると、肉は無いが良いダシが採れるからであって、決して侮辱しているのでは無いそうだ。

本当かな？ とは思うけど……

「お、噂をすれば、ニアだし」

ケインがカップを持った手で指差した。

ジュースを飲んでいたタケルが思わず吹く。

指先を目で追うと、ニアがクラスの瞳とフェイの三人で話しながら僕たちの方へ遣って来た。

「……え？」

軽く咳き込みながら、何かを感じて僕は立ち止まった。

ニアも僕達に気が付いたみたいだ。

「あれえマック達、これからカヤジ（梶谷先生）の授業？」

右手に、濃い緑色の小さなガラス小瓶を大事そうに持っている。化粧品を試供品みたいだけど、精巧な飾り細工が施されていて、素人目にも中々の値打ち品だと判った。

「ハァーイ、お嬢さん方。今日は随分とまた凄そうな物を持っているし」

「ケッ、まあーた始まった。ケインのお調子者があ
タケルが毒づく。」

彼の厭味が聞えたのか聞えなかったのか、ケインはニア達女の子と勝手に盛り上がっている。

「あ、判る？」

「うん、うん。それって、ミュージズのVIPだし」

ケインは大きく頷いた。

「へえー、ケイン知ってたんだ？」

「うっそー？ マジで？」

彼女達が眼を輝かせた。

「知らないでか。有名な化粧品だもんな？ 俺ン家姉ちゃん居るから毎朝、毎晩使ってるし。けど、ミュージズ社の化粧品はどれを取っても品切れ続出で、中々手に入らないって姉ちゃん言ってたし」

「そおーなのよ。これ、ゲットすンの凄ンごく大変だったんだからあ」

つぶらな瞳をキラキラさせて、瞳が豊かな胸を張った。

中学生とは思えないプロポーションだ。

グラマラスな彼女の胸はもはや胸では無く、胸部にお尻があるみたいだった。

僕達三人は、彼女の必要以上に大きく開いた胸元に視線を奪われる。

「凄。なあ、瞳の方がこの前のエロ本よりも凄くない？ 顔はイマイチだけだよ？」

小鼻を膨らませながら、こそっとタケルが僕に小声で囁いた。

僕は彼女の胸に視線を奪われたまま、顔を赤らめて、素直に肯定する。

「胸がデカイと馬鹿っぽいって言うけど、ホントだな？」

「し！ 聞こえるよ？」

僕は慌ててタケルの袖口を引いて、注意を逸らせようとする。

「なあゝに。本当の事だから、聞こえたって構うもん……」

そこまだった。

僕達の様子に勘付いた瞳がゲンコツをお見舞して来た。

「痛ってえゝな！」

「なあゝんか、タケルの目、やあゝらしい」

「うう……何で僕まで……？」

僕もタケルと同じく頭を抱えた。

目の前に星がちらつく。

「瞳、フェロモン振り撒き過ぎー」

ニアが言った。

「本当、遣り過ぎだってーの」

ニアと同じ陸上部のフェイが意地悪っぽく言う。

彼女もニア程ではないけれど、余分な皮下脂肪が無く、かなり痩せてスレンダー身体型だ。

二人共、身体脂肪なんて殆ど無いのじゃないかな……僕もだけど。

「うっさい」

口ではそう言ったが、瞳は余裕をかましている。

「悔しかったらアタシみたくやってみなさいよ」とでも言いたげだ。

二人共その所はいつものお約束の突っ込みで、ケロリとしている。

仲、良いよな？ 何だか彼女達が羨ましい。

僕は眼を細めて彼女達を見詰めた。

勿論、僕だってタケルやケイン達が居る。けど、何か違うんだ。

楽しそうに話していても、時々心の何処かで一步退いている自分に気が付く。

(どうしてだろう……？　僕が皆と同じ条件で無いから……？)

(そうやって勝手に自分を差別して納得してるんだ。良いのかな？
それで……)

頭の中でもう一人の声が囁いた。

「誰？」

僕は思わず頭の中のもう一人の声に問い掛けていた。

「はあ？　どうしたんだよ？」

まだ自分の頭を撫でながら、タケルが僕を見て訝る。

「な……何でも無い」

僕は曖昧にごまかしてタケルの疑いの視線から逃れるようにケイン達を見た。

「試供品と言えども入手困難。しかもコレは生産数限定の激レア物
よお？」

「これ一つで奪い合いが起こるって言うものねー」
得意になってフェイとニアが続ける。

何でも、使用すれば肌の状態が超短期間で劇的に良くなるとか、
ニキビや皮膚病の特効薬だとか他の商品には飲用出来るのもあると
かって、イロイロとウンチクを聞かされた。

彼女達は待たされている僕達の事にはまるでお構い無しだ。

「オイ、まあ〜た始まったよ。効能だの何だのって、よく覚えて
るよなあ？　授業の中身はまるで覚えてない癖によお」

「本当」

ケインは彼女達の記憶力の凄さに呆れ返った。僕もゲンナリしながら相槌を打つ。

(……何だろう……？)

不思議な感覚はまだそのまま続いている。

「盛り上がっているトコ悪いけど、それ、ちょっと見せてくれる？」

「あらァ、マックも知ってるんだ」

「いや……」

僕は、瞳の言葉を否定しながらも、小壇を受け取った。

「！……え？」

瞬間、すうっと身体中の血の気が引いて耳鳴りがした。

全身に寒気が奔る。

小壇は蓋を開けてもいないのに反応している。

中で何かが蠢いていた。

それは、蛇が頭を擡もたげた時と似ていた。

怪しげな煙とも、炎とも思えないもやもやとした黒いモノが壇の蓋を内側から押し開けて溢れ出す。

それが僕の掌の上でゆっくりと手首に纏まとわり、近付いて来る。

蛇なんて、動物園のガラスの檻でしか見た事が無かった。

檻の中で、じっとして動かないロープみたいな生き物――

今までそれが気味悪いとは思ったけれど、怖いと思った事は無かった。

なのに今の僕は身体が竦すくんで身動きさえ出来ずに震えてる。

（怖い）

ニア達が悲鳴を上げ、辺あたりが騒然そうぜんとなった。

皆の顔色が真っ青だ。見えてるんだコレが。

僕は金縛りに遭い、総ての時間が静止する。

そして、纏まとわりつかれた手首から、どんだん力を抜き取られていくような感覚――

脱力感が増して来る。

（動け……ない？）

「は、早く放して！」

ニアが僕の右腕に縋すがって激しく揺さぶった。

手から滑り落ちた小壇からは、既に煙のような妖しいモノは消失していた。

僕の視界から皆が消えて、廊下の天井が映った。

ニアが何か僕に呼掛けているみたいだけど、僕の意識はそこまで

だった。

眼の前がブラックアウトする。

時々思うんだ。

この弱く不自由な身体が無くなれば、僕は自由になれるのかな？
身体が無くなるって事は、死ぬってコト。

だからそうなるって事は、僕は消えるしかないのかな？
ココロだけ残って生きて行くななんて事は無いのかな？

そんなの在り得ないハズなのに、何でこんな事考えてしまうんだ
ろう。

＊ ＊

「発症したのか？」

「はい。陽性反応＋＋＋（スリープラス）です。半年前のあの件以来、処置後の経過が順調だったものですからもう大丈夫かと思いましたが……あ、意識が回復しました」

（……誰？ ドクター山崎と葵さんの声？）

眼が覚めると僕はいつもの病院のベッドに居た。そして見慣れた
白衣の先生と看護師。

「マック、気分はどうかね？」

「あ、はい……もう、大丈夫です」

つい条件反射で返事をした。

倒れるのはいつもの事だと勘違いをしてしまったんだ。

「本当？」

葵さんあおいがぐっと身を乗り出して僕の顔を覗き込んだ。

自然、白衣から白い胸の谷間が覗く。

どきっ！

僕の視線が彼女の胸元に吸い寄せられ、顔が火照って自分が真っ赤になっているのが分かる。

「葵君。からかつちゃ困る。正確なデータが取れないじゃないかね」
ドクター山崎は彼女のちょっとした悪戯に軽く眉を寄せる。

「はぁーい」

葵さんがクスクス笑った。

（葵さん……何なんだよ……）

ムツとする。

ドクターの言う通り僕はからかわれたんだ。

「処置しよう。マック、好き嫌いも程々にしておかないとダメだぞ？」

「はーい」

まただ。

またお説教。

僕の周りの大人達は、どうしてこうお説教ばかり言うんだろう。

元々、僕はひどい偏食だ。

言われなくたって解ってる。

だけど、嫌いな物はどうしても好きになれないんだ。ただ、嫌いで苦手なものが他の子と違って少し多いだけなんだよ。ほんの少し……ね。

僕は猶も続くドクターのお説教を聞き流しながら、葵さんの指示で腕を伸ばした。

今月はこれでもう五度目だ。段々と回数が増えている。

きちんと食事しないだけでこんなにも頻繁に輸血しないといけないのかな？

ドクターや葵さんに聞いても大丈夫だとしか言ってくれない。それに、この血。最近気付いたんだけど、これってニアのモノらしいんだ。

僕が病院に行った日は決まって事前にニアも葵さんに呼ばれている。

この前なんか、偉そうに「献血しちゃったあ」とか言ってたけど。大身体、成長期でまだ身体の出来ていないニアが何で献血をしなき

やいけないのさ？

おかしいよ？

「ドクター」

「うん？」

「僕、どうしたんだろう。ニア達が学校で化粧品の小壘を持って来ていて、その壘を持ったら中身が生き物に見えたんだ。」

「ほお？」

興味深げにドクター山崎は首を傾げると、傍にあった椅子を引いて座った。

（あれ？ ドクター何だか顔色が良くないや）

その時僕はドクター山崎が身体調を崩しているように見えた。

（でも、聴いてくれるのかな？ 僕の話）

「ニア達が持っても何ともなかったのに、僕だけに……反応した」
まだ頭がぼうつとしている。

「どうしちゃったんだろう。僕……」

僕はまた何度か軽く咳き込んだ。

第2話 スター・ミューズ

夜の闇に紛れて、僕達六人の人影が空港の倉庫で蠢うごめいていた。

すぐ目の前には、青白いライトに照らし出された大型宇宙船が繋けい留りゅうされている。

船名は『スター・ミューズ』。外観は旧世紀の地球に実在していた『タイタニック号』を模して造られたそうだけど、大きさは優にその船の倍以上もあるらしい。この船は、昼間に僕達を騒がせたあの化粧品を取り扱っている業界最大手のミューズ株式会社の所有船だ。

「でかつ」

『スター・ミューズ』を見上げたケインが、圧倒的な大きさに目を丸くして短く口笛を吹く。

「さっすが。近くで見るとスゴイよね？」

「うん？ マック、どうした？ ずっと黙って」

タケルが僕の様子に気付いて声を掛ける。

「……帰ろうよ。やっぱ、ヤバイって」

僕は、湧き上がって来る嫌な予感に耐え切れなくなって、遂に本音を漏らしてしまった。

「っせーな。言い出しっぺはお前だし。もう、嫌ならお前一人で帰れば？」

ここまで来て今更何言ってるんだとばかり、ケインが冷たく言い放った。

「んな事言ったって……」

僕は口を尖らせる。

一人で帰れと言われても、どこをどうやってここまで来たのか覚

えていない。

転校して来てこの半年間、学校と病院と家。そして図書館。この四箇所しか知らない僕にとって、そこから先は真っ白で、未だに地図が頭の中に出来上がっていないんだ。

確実に迷子になって恥を搔くのは読めている。情けないけれど僕一人じゃ帰れない。

『今日は、ゆっくり休むのだよ』そう言ってくれた、ドクター山崎の優しい声が頭の中で何度も聞こえる。

あーあ……来るのじゃなかったな。

ニアもタケルも一緒だし、昼間のアレが何だったのかを知りたかったっていう興味もあった。ケインから化粧品メーカーの船が来ていると教えられて、行ってみようかと言った首謀者はこの僕だ。

だけど……

「怖い？ でも、気になるじゃない」

ニアが僕の気持ちを察して代弁してくれた。

今日のニアは、僕がビビッてる事くらいとくに伝わっているハズなのに様子が変だ。いつもなら僕の事をヘタレだの、腰抜けだのって真っ先に野次って馬鹿にするのに。

ひょっとして、ニアも怖いのかな？

「てっ！」

すぐ目の前で僕に背中を向けていたニアの右手が、僕の頭を鋭く叩いた。^{はた}

直撃させずにワザと掠^{かす}める叩き方だ。

「バカ言わないのっ！ ニアをマックと一緒にしないでよね」

「言っていないし！」

思っただけだよ。

僕達はお互いにムッとして口を尖らせる。

「はあ？ ……お前等何やってんだよ？」

僕達の遣り取りを目の前で見ていたタケルが、不思議そうに首を捻る。

そうか。タケルは僕達が一緒にいる時をあまり見た事が無かったのかな？ いつも僕がお世話になっている病院のスタッフでも、ほんの一握りの人達しか知らない僕達の特長能力。

通常の会話は勿論だけど、心に思い浮かんだ事を相手に伝えることが出来る精神感應。『テレパシー』とか言う人もいるみたいだ。

「でもお、ミュージズの船がキャンペーンで来ていたのはラッキーよね？」

「誰だっ？」

浮かれた瞳の言葉を、警備員の鋭い声が制した。

僕達はライトを当てられ、眩しくて皆一斉に腕や手で顔を隠した。

「やば！」

「逃げろ！」

皆は、思い々の方向へ散った。

「待て！」

警備員は撃って来た。

でも、立体映像のダミーを撃っても無駄さ。絶対に捕まりっこない。各自で船内のセキュリティ・カメラに映らないように、カードタイプの映像妨害を張ってある。これで人工知能機器には引っ掛らない。

本物の僕達は、警備員がダミーに気を取られている間に、まんまとミュージズに乗船した。

「ひゃあー、つぶねーな。あの警備員、マジで撃って来やがったぜ？」

実弾？ ……まさかね？

船内に潜り込んだ皆は、お互いの顔を見合わせて安堵していたけれど、僕は警備員の発砲にもの凄く嫌な予感を抱いてしまった。威嚇にしてもちよつと嚴重過ぎる警備だ。幾ら各界のVIPを招いているからと言っても、いきなり発砲するだなんて変だ。

この船に何かあるんだと思った。……けど、本当、お気楽な連中

だよ。

警備員の過敏な反応でも全く意に介さずに、密航の成功を喜び合
って騒いでいる彼等の後ろで、僕は彼等に呆れながら、船内のシス
テムや扉の開閉に必要なパスワードを、持って来た携帯にキーボー
ドを接続させて読み取らせる。

僕は慣れた手付きでキーを叩き、監視モニタと隔壁の履歴データ
に介入すれば、ウイルスが発生するように細工をする。

万が一って事も考えて、少しでも脱出の時に時間が稼げると思っ
たからだ。

＊ ＊

その晩、医療センターの葵が、マックの忘れ物を届けに自宅のマ
ンションを訪ねて来た。

何度もインターフォンを押すが返事が無い。

不審に思った葵は、すんなりとした細い人差し指の先を画面に押
し当てて、暗証番号を入力した。

彼女はマックの担当医であるドクター山崎の助手で、医療面だけ
でなく生活面でのサポートも担当しており、緊急時対応の時の為に
指紋登録をしている。

「ニア？ マック？ 居ないの？ 入るわよ？」

葵が室内に入ると、センサが感知して自動的に照明が点いた。

今まで部屋には明かりが灯っていなかった事に気付いて、葵はた
だならぬ胸のざわめきを感じた。

もどかしい手つきでバッグから携帯を取り出し、急いでドクター
山崎に連絡を取る。

―「どうしたのかね？」

「ドクター、マックとニアが……」

ドクター山崎に指示を仰ぎながら、葵は携帯から引き出したコー
ドを部屋のセキュリティにアクセスした。時間を遡り、ここへ一旦

はマック達が戻って来ていたのを確認する。

そして今度は、市街の至る所に設置されている防犯カメラのデータからマックの居所をフィルタを掛けて検索する。

「……居た」

五、六人の子供達と一緒にだ。

葵はニアとマック以外の子供達を調べる。

画面に彼等のプロフィールが表示された。

「四人ともクラスメイト。特に問題は……無さそうね」
ほっとした。

真っ先に誘拐が頭に浮かんでいたからだ。しかし、安堵している場合では無い事に葵はすぐ気付いた。

シーバ宇宙港。マック達の話はそこで消えている。

彼等はジャミングシールドを使用したらしく、追跡不可能になった。画面に赤字でロストの表示が出る。

付近に停泊しているのはスター・ミューズだ。

「ミューズ社の船だわ。ドクター山崎！」

「了解した。君はもう帰るたまえ。連邦局に依頼して、身柄を確保して貰う」

「そんな大袈裟な。所轄の警察に頼めば……」

「民間人ならそれで事足りるが、二人は別だ」

そう言ってドクター山崎ははっと我に返り、気不味そうな表情を見せた。

「なぜですか？ 二人は民間人ではないのですか？」

「きつ、君が詮索する事ではない」

珍しくドクター山崎が取り乱している。

「でも……はい」

葵は言いかけた言葉をぐっと呑み込んだ。

そして暫らくの間、接続が切れた画面に疑いの眼差しを向ける。

＊ ＊

船へ潜り込んで間もなく、その異変に気付いたのはニアだった。

「ねえ、この船動いてるよお？」

「え？ ……そうかあ？」

ニアの言葉が意外だったようだ。皆はそれぞれ互いの顔を見合わせる。

「予定じゃ、明日の九時に出港するようになってるけど」

「ここへは新製品のキャンペーンと、次の予定地へ行く為の補給だろ？」

「今夜は、業界のVIP招いてのパーティがあるハズよ？ ネットで調べたもの……にしては静かよね」

「他のフロアなんじゃないか？ この船デカイし」
皆、ニアの言葉に耳を貸そうとはしない。

「だあーって……動いてるんだもん。判んないの？」

独り言のように呟いて、ニアは口を尖らせた。

皆、それぞれが首を横に振って、もう一度互いの顔を見合わせ肩を竦める。

「確か、27F？ この六つ上のフロアじゃなかったっけ？ VI
Pの控室」

「RINちゃん達来てるかな？」

瞳の言葉に、ケインが嬉しそうに声を弾ませた。

「うわ、あんな中身の無いユニットのファンなの？」

フェイが白い眼で見る。

「っせーな。おまいと違って、かわいけりゃ何でも許されんだよ」

「あんたってえ？」

フェイがドスの効いた声で凄み、ケインが思いつきり退く。

「しっ！」

先頭を歩いていたニアが慌てて皆を制した。

突然、目の前の部屋の扉が開き、銃を持った女性が出て来て皆の前に立ち塞がる。

「誰？ 貴方達、何処から入って来たの？」

凜とした声に、全員の足が竦んだ。

一瞬、女性は人形かと思った。歳は僕達より四、五歳くらい上。腰の辺りまで波打って流れる金髪に、碧い瞳の色白美人。何処かの専属モデル並みの容姿に僕達は目を奪われた。とても船のセキユリティには見えないけれど、彼女は銃を手に行っている。

あれ？ この人何処かで……？

僕は咳き込みながらじっと彼女の顔を凝視した。もしかしたら人違い。タダの思い過ごしじゃないのかと思ったからだ。

僕が人違いだと思った彼女は、何年か前にデビュー半年足らずで不慮の事故で亡くなったモデルのティファ・フィニに良く似ている。ティファのファンだった僕の心臓は高鳴った。だって、彼女は本当によく似ているんだ。

僕は僕達の置かれている状況が理解出来ないくらいに舞い上がった。頭の中総ての機能が麻痺しているみたいに。

「両手を挙げて頭の後ろで組んで。壁に向かいなさい！ ゆっくりとね」

ジャミング・シールドは人工知能には有効だが、肉眼では全く効果は無い。

「あっちゃー、早くもタイホかよぉ」

「VIPのお兄様とお友達になりたかったのにい」

「あつ、なんならお姉さんでも良いですけど？」

ケインとフェイが軽口を叩くが、彼女は表情一つ変えようとはしない。

タケルが彼女の様子を窺いながら、ゆっくりと両手を挙げる。

「おい、ニア」

小声でタケルが囁き、ニアは黙って頷く。

彼女はニアに対してやや背を向けて立っていて、丁度死角に入っている。

「小……いえ、中学生かしら？」

彼女から「小（学生）」と言われて、僕とニアがムツとなった。
今更だけど、やっぱり爛に障る。

僕達を見て、彼女は呆れた様子だった。

その隙を衝いてニアが動く。

ニアは銃を持っていて彼女の手首を蹴り上げた。素早くその片腕を逆手に捕りながら彼女の足を引っ掛け、弧を描くように廻り込む。一瞬のうちに銃が飛び、彼女はバランスを崩して倒れ込んだ。

「今だ！」

タケルが叫び声を合図に、再び僕達は散り々になった。

ニアは僕の手を引いて走る。

「ま……待ちなさい！」

彼女は慌てて銃を拾い、僕達二人の足元を撃って来た。
勿論威嚇で。

僕達は停止していた清掃ロボットの物陰に潜んだ。

「皆は？ フェイ達無事かなあ？」

「はあ、はあ、……分かん……ないよ」

身体が重くて息苦しい。

ホンの少しの距離を走っただけなのに、僕は自分の事で精一杯だった。とても皆を気遣ってあげられる余裕なんて無い。

へたり込んで座っている僕の隣で、ニアは慣れない手つきをして携帯で船内の状況を調べていた。

「やっぱり！ 動いてるよお。閉じ込められちゃった。それに……やだ、通話出来ない」

ニアの携帯には通話圏外の表示が出ていた。確認する余裕が無いけど、きつと僕のもそうなる筈だ。

「うっ！」

僕は、激しく咳込んだ。胸が燃える様にもの凄く熱くなる。

何度か咳込むと、強い吐き気を催して慌てて口を塞ぐけど、指の隙間から生温かい液状の物が溢れて、僕の膝と床を汚した。

「あ、あ……?」

僕自身驚いていた。

赤黒い色をしているけど……何? コレ……

驚いたニアの視線が、落ちた赤黒い物に注がれる。二人共、それが何なのかを理解するには数秒の時間を要した。

これ……血だ。不気味なくらい黒いけど、確かに僕の血だ。

「ちよつとマツク、どうし……」

「見付けた!」

ニアの言葉を遮って、頭上から声が降った。

「他の子達はすぐに見つかったわ。貴方達で最後よ」

すぐ後ろに、さっきの彼女が居た。

僕の吐いた血を見て彼女は一瞬怯んだが、ニアを確認して気が逸れる。

そして、忌々しそうにニアを睨み付けた。

「こわい」

止めておけば良いのに、からかっているとしか思えない仕草で肩を竦め、ニアは彼女を挑発した。

通路の照明でニアの瞳が金色に光った。

その眼は言葉とは逆に、彼女に挑み掛かるように見える。

「ニア……止め……」

声に……ならない……

サツと彼女の手が伸びて、素早く弧を描いた。が、ニアは余裕でその手をかわす。

学内でもニアの反射神経は異常な程鋭い。ドクター山崎も一目置いていくくらいだ。そう簡単には大人しく殴られたりはしない。

「ふうん……なら、こうしましょうか?」

彼女は口元に笑みを浮かべて、静かに銃口を僕に向けた。

＊ ＊

「だから、止めとけば良かったんだよ。もおー」

僕は自分の事は棚に上げて、それ見ろと言わんばかりに言っていた。いくら並外れた反射神経持ってたって、アレは無いよ。

「ふんっ！」

両頬を真っ赤に腫らしてニアは腐った。

あれからニアは彼女にしこたま平手で殴られた後、電磁手錠を掛けられた。

まさかとは思うけど、他の皆が齒向ってボコボコにされていないことを祈るしか無い。

「うゝっ。さっきの女アゝ」

ダメだ。ニアは完全にきちゃってる。

携帯も押収されたから、もうこの部屋の電子扉を開ける事も出来ない。

どうしよう。

「どうなるんだろう……僕達」

膝を抱えてしんみりと呟いた。暗い天井を見上げて僕は観念する。タケル達はどうなったんだろう……？

僕達は暗い一室に閉じ込められていた。部屋は長い間使用されている気配は無く、中央にテーブルが一つあるだけの殺風景な所だった。

ニアが隣で何やらごそごそしている。

人がこんなに落ち込んでいるのに……こんな時でも落ち着き無いなあ。

僕は、自分とは真逆のニアの行動をじっと見守った。

どう言い訳をしても僕達が密航したって事実に変わりは無い。きつと警察に突き出されるんだ。

葵さんやドクター達の困っている顔が浮かんだ。今迄、こんな迷惑なんか掛けた事は無かったのに。

「あーあ……」

塞ぎ込んだ僕は何度目かの溜め息を吐き、何度も何度も後悔した。

こんな事なら行ってみようだなんて言い出さなかったら良かった……今更遅いけど。

傍にニアと一緒に居るのに何て心細いんだろう。僕は胸が一杯になってマジに泣き出しそうになった。

「マック、行くよ？ ほらあ、メソメソしない」

「だっ、誰が！ メソメソなんか……してないし！」
それが空元気だって事、ニアにはバレバレだった。

「はいはい。そういう事にしておいてあげるから」

面倒臭そうに言って、ニアが僕の腕を掴んだ。

「なっ、何だよその言い方っ！ 痛っ！」

目の前で星が散った。

どうやら暗がりのせいで、壁にぶつかったみたいだ。

「早く。このダクトから出るの」

「ダ、ダクトオ？」

僕はズレた眼鏡を指で押し上げながら訊き返した。

「そーよ。ほら、こっち」

電磁手錠が発している微かな明かりで、ニアは他の部屋へと通じているダクトを見付けてよじ登っていた。

全く、ニアは動物並みだね。

僕は呆れた。

＊ ＊

「社長、連邦から停船の要求が入っています。拘束している子供達の身柄も返還するように求めて来ておりますが、如何致しましょうか？」

秘書と思われる女性が、男の正面に立った。

男は贅沢な作りの椅子に座って、送られて来た報告のメールに目を通す。

「何の事かね？」

恰幅^{かつぶく}の良い男は、報告画面から目を離して彼女を上目遣いに見た。

「はい、密航者の子供……」

「だから、何の事かと聞いている」

社長は言い掛けた秘書の言葉を見殺して、徐に葉巻に手を伸ばした。その両指には、何十カラットもの宝石が光輝いている。

秘書がすかさず火を点した。

「子供達が私の船の近くで行方不明になったからと言って、乗船したという証拠はあるまい？ 失踪等、よくある事だ」

「ですが……」

秘書は口籠った。

「目障りだ。追走しておる連邦の奴等を追い返せ」

「しかし、つい先日我々は連邦からの密偵を……これでは尚怪しまれて……」

社長は唸った。

「已むを得ん。子供は四人だ。だが、あの双子は初めからこの船には乗ってはおらん」

椅子の広い背もたれに体を預け直し、そう云う事だと威圧的に目配せをした。

問答無用だ。

第3話 拘束

「ドクター山崎、連邦からの通信です」

通信室にいた葵が、安堵に似た溜め息を吐いて正面にある大型モニタを切り替えると、画面は四分割されて、密航していた中学生の男女一人ずつを映す。

―「こちら連邦宇宙軍第二公益部隊。センターより依頼があった四名を無事保護した」

連邦からの返答に、モニタに注がれていた一同の表情が曇った。

「四名？　こちらが依頼したのは二名だ。ニア・ロディナルとマック・ロディナル。中学生の双子だ」

ドクター山崎が葵にちらりと目配せをする。

葵は頷いて、二人の要望データを再度送信した。

―「……該当者なし。当方より保護した四名は、全員別人と確認。繰り返す……」

「ドクター……」

そこに居合わせた者達にざわめきが起こる。

「間もなく、スター・ミューズはエアの外へ出ますよ？」

「マズイぞ。それって業界最大手のミューズ・ケミカル社の事だろう？　相手が悪いよ」

スタッフの数人が絶望間を滲ませるが、ドクター山崎は努めて冷静を装った。

「引き続き、二人の搜索を依頼する」

―「了解」

連邦からの通信は切れた。

ドクター山崎をはじめ一同は口には出さなかったが、事の厄介さを確信する。

「……人払いを頼む。葵君、君もだ」ドクター山崎は、すぐ傍にいたサイバノイド一体を残して全員を室外へと追い遣った。「連邦の三島へ繋いでくれ。コードはF C I・5377・T・M813……」間もなく、モニタに白髪混じりの小柄な老紳士が現れた。連邦の関係者にしては妙に温和な顔つきだ。

―「どうした？ お前の所から依頼があった子供達は保護した筈だが？」

「嫌、別の子供を掴まされた。恐らく、彼等と一緒に居た子達だ」三島の表情が曇る。

―「何？ あの船はもう宇宙へ出るぞ……いや、待て」

三島は片手を軽く挙げた。別のモニタを見ている様だ。

何度かの遣り取りを終えて、彼はやっと正面へ向き直った。

―「……コロニー内は無理だったが、足止めには成功した」
「すまない。」

ドクター山崎は、モニタに向かって深々と頭を下げる。

―「止してくれ」

―「部長、何者かが回線に……」

所員の一人が三島の後ろで囁き、回線の侵入を示唆する。三島は黙って軽く頷いた。

―「……分かった。山崎、一つ貸しだな？」

そう言って、三島は年齢にはそぐわないほど悪戯っぽく笑って回線を切った。

切れた画面の前で、ドクター山崎は呆然と立ち尽くす。

三島は何も気付かなかったのだろうか？ 自分が担当医になっている患者の搜索に、何故連邦の助けが必要なのかを。

＊ ＊

男はデータに見入っていた。

年の頃なら二十歳前後か。背格好は細身の長身。日焼けした様な

赤銅色の肌に短い銀髪に蒼い眼を持っている。半世紀前までは奴隷難民として扱われていた「グレネイチャ」と呼ばれている人種だ。彼が見ていたのは、センターの葵が連邦に送信したニアとマックに関する暗号通信だった。

それを別の機材にセットして、スイッチを入れる。少し耳障りな音を立てながら、読取ったデータを3D映像に構築させて行く。

その間、彼はドクター山崎と三島部長との遣り取りを覗いている。

不意に画面が強制的に切れた。

男は『やはりな』という表情でモニタをデータ画像に切り替える。そして、構築された二人の姿と照らし合わせて比較するが、流石に一卵性の双子だけあって外見だけではどちらがニアで、どちらがマックか区別が困難だった。しかし、手元にある医療カルテは違っている。

「何だ？ この双子は。一卵性の男女の双子って事だけでも珍しいのに、人間ノーマルでもなければ、エレメンタルでもないし、ましてやサイバノイドでも無い……？」

男は暫くの間考え込んでいる様だった。上の空状態でデータをM・マイクロ・メモリMにダビングする。

―「居るか？ アーヴ！」

「うわ？」

モニタ画像がいきなり二つに分かれると、やたらテンションが高くて眼の細い東洋系の顔立ちをした男が割って入って来た。

「アーヴ」と呼ばれた男は、驚いた拍子に、手にしていたメモリを落としてしまう。

―「『うわ？』じゃねえよ。チャンネル五見てみる。人捜しの賞金だ！」

「ふーん。額は？」

落としたメモリを気にしながら、言われるままに画面を切り替える。

画面にはたった今自分が調べていたニアとマックの顔が映し出されていた。慌てて割込んで来た男の画面を右下隅に縮小して追い遣り、自分の身体で背後を遮って隠す。

「聞いて驚け！ 四千万ゼニヤ！」

「四千万ゼニアって、二千万ドルじゃないか。マジでか？」

「おうさ！ 俺達賞金稼ぎにゃあ、モッテコイの仕事さね」

「いや、俺は賞金稼ぎじゃねーんだけど……」

「なーに言ってんだか。オマエとは同じ穴のムジナ。俺達とどれだけ違うってーのよ」

迷惑そうなアーヴの様子をまるで無視して、モニタの男は興奮して捲し立てる。

法外な額面に、思わず乗ってしまいそうになる。彼等賞金稼ぎが浮足立ってしまうのも納得だ。けれど、今は自分の目的に集中する事にした。

「双子が二千万ねえ……まだ子供じゃないか。そんな価値が何処にあるのか判らないな」

彼は態と興味無さそうに鼻で笑った。

「どっちか片方でも良い。しかも今回は生死を問わずだ。案外こりゃ楽勝かもな？」

アーヴは、大きな欠伸をしながら両手を上げて伸びをする。

「へえー「生死を問わず」って……またそいつは穏やかじゃないな」

「依頼者の孫だってよ。結構な額面提示してるところを見ると、何処かの資産家だなこりゃあ。察するってえと、身代金の取引にでも失敗したのかねえ？ もう殺されているとでも思ってたんだろうよ」

「ふーん」

無関心な見た目の態度とは裏腹に、アーヴの口元が微かに綻ぶ。ほころ

「俺っち、もう行くからよ。じゃあな。ソッチも何かあったら知らせてくれや」

「ああ、そうする」

男は一気に捲し立てると、画面から消えた。

彼の姿が消えたのを確認したアーヴは、ほっと胸を撫で下ろす。少し、態とらしかったかとも思ったが、どうやら勘付かれずに済んだ様だ。内心、背後で構築していた双子の子供の3D映像に気付かれはしないかと焦っていたからだ。

「悪いな、ウオン」

彼はそう呟いてニヤリと笑うと、機器に囲まれている室内の天井部を振り仰いだ。

天井部には大型スクリーンがあり、宇宙空間を映し出している。その中央には、太陽光を反射して純白に輝いている、スター・ミューズの全貌が映し出されていた。

センター医局と連邦軍との遣り取りで、この船にセンター医局が必死になって捜している双子が居ると判った。しかもこの二人、別方面から高額な懸賞金が掛けられていると言うではないか。

Ⅱ「空間二歪ミ発生。ハイバードライプ H・D（光速航行）シテ来ル船ガアリマス」
船のA・Iが状況を伝える。

「こっちもH・Dに入ろうとしているぞ。見失うな」

Ⅱ「了解」
スター・ミューズの船体が揺らぎ始めた。強制的に宇宙空間を歪めるH・D特有の現象だ。

彼は息を詰めて画面に映っている船に見入った。

「?」

一瞬、スター・ミューズはH・Dを中止した様に見えた。揺らめいていた船体の映像が元に戻っているのだ。

「どう言う事だ?」

Ⅱ「残ッテイマス。H・Dハ実行サレタ形跡ガアリマス。コチラニH・Dシテ来タノモみゅーず杜ノ所有シテイル同型ノ船デス」

「こいつは囋か……あざとい真似を……本物を見失うな」

Ⅱ「了解……すたー・みゅーずノ出現空域ヲ特定」

「よし、追跡だ」

Ⅱ「了解」

＊ ＊

僕達は、ダクトの中を何時間もの長い間這い回っている気がする。二人共、ダクトの中で埃だらけだ。僕はその間、何度も咳き込んでニアから咎められた。ニアだって蜘蛛の巣だの虫だの見つけてはその度に悲鳴上げてる癖に。

「うーっ、ここじゃない……もお。皆、ニア達措いて何処に行っちゃったのよう」

船内を仕切る金属網から様子を窺い、その度にニアは苛立っている。

「もうこの船には乗っていない様だよ」

僕はそっぽを向いて聞こえるように呟くと、這って進んでいたニアの動きがぴたりと止まる。

「分かるの？ あ痛ッ！」

ニアは驚いて僕を振り返ったけど、狭いダクトの側面で頭を打ってしまう。

「う……ん。そのう……どう言ったら良いのかな？ 無いんだよ。

気配が」

少し、自信は無いけどね。

「まあっさかあ」

ニアは頭を押えながらせせら笑った。でも僕は至って真面目だ。

「笑い事じゃないかも知れないよ」

口を尖らせて言ってやった。動いている船から気配が消えたっていうコトの重大さにニアは全然気付いていない。僕は思い出したんだ。ミューズ社の悪い噂を。

今でこそ医薬品、化粧品品の製造販売業者ミューズ・ケミカル株式会社として確たる地位を築いてはいるけれど、大元は義手や義足、

サイバノイドといった人工機械製品を主に研究・開発していた会社だった。

経営方針が後に薬品へと切り替わり、そして化粧品取り扱いへと変わって行ったのが、前社長が引退して現在の社長に交代した頃。偶然かも知れないけれどその頃を境にして、移民目的の宇宙船が消息不明になる事件が多発した。会社との関連性を指摘した世論もあったし、一部じゃ、臓器売買にもミューズ社が深く関与していたという報道もあったくらいだ。ウソか本当か、連邦は多くの人材を投入したけれど結局何も出ては来なかった。

ただ、何十人かの行方不明者が出たという事実を除いては――
彼等の消息も、会社の搜索が終了した後の社外での出来事だったから、連邦もそれ以上は追及出来なかったんだ。

「ふうーん」

分ったのか分っていないんだか、ニアは僕の説明に興味無さそうな生返事をしただけだった。

「大切な事だよ？　これが本当なら、僕達ほとんどない所に居るって事に……？　ニア？」

再びニアの動きが止まった。僕は訝ってニアを覗き込む。

「よく知っているのね？　坊や。でも、そんな事よりもまずは自分達の心配をなさいな」

見付かった。さっきの彼女だ。

「坊や」と言われ、僕はムツとなって押し黙る。

外側から換気窓が外されて、先にニアが捕まった。

「マック！　逃げて！」

彼女にダクトから乱暴に引き摺り出されながらニアが喚いた。でも、僕達子供一人がやつと通れるくらいのダクトを這い摺っていたんだ。どうやって逃げ出せる？

「……いい。出るよ。自分で」

咳き込みながら、僕も後に続いた。もうどうにでもなれだ。

僕達を捕まえたのは彼女一人だった。他には誰も居ない様だ。

「あーあ」

ニアは態とらしく言って、体に付いた埃を乱暴に叩いた。あまりの埃に、三人ともが咳き込む。

「ニアーひどいよお」

咳と涙が止まらない。

「全く。貴方ってば、自分で自分の立場悪くしてるの判っててやっているの？」

彼女も咳き込みながら、恨めしそうにニアを睨み付けた。

「ニアは、アンタ嫌いだもん！」

ニアはぺたんと座り込んで彼女を一睨みすると、ついつとそっぽを向く。

うわあ……ヤバイよ……

僕は髪の毛が逆立った気がした。次に予測できる事を想像して、二人から眼を逸らそうとしたけれど、逆に怖過ぎて出来ない。

「言うわね？ ハッキリと」

彼女の碧い眼が燃えた様に見えた。

次は、平手じゃ済まないよ？ 知らず、僕は退いている。

けれど僕には、彼女が赤く腫れ上がった頬を尚も膨らませているニアを見下ろしているうちに、次第に自分を取り戻しているように見えた。

「……そうね……そうよね。仕方ないか」

彼女はニアの傍に片膝を付いて屈み込んだ。そして、ベルトと一体型のポーチから小さい湿布薬を取り出し、真っ赤な両頬にそっと貼ってやる。

「いっ、痛たた……触ンないでよッ！」

珍しくニアの瞳から大粒の涙がぼろぼろと毀れた。

そんなに滲みるのかなあ？

彼女は序でにニアの両手に掛けてあった電磁手錠を外す。僕の手

錠も外されて、没収されていた携帯も返却された。僕はきよんとして彼女を見上げる。

「今更拘束したって航行している船の中だもの。逃げられやしないでしょう？」

彼女は、肩に掛かった金髪を、片手でさらりと払って立ち上がる。僕の鼻はずっと血の臭いしかしていなかったのに、彼女が立ち上がると、甘い香水が香った。

「あ、あの……」

口元に付いた血をシャツの袖で拭いながら、僕は続けた。

「さっきから気になっていたけど、この船には他に誰も乗っていないの？」

幾らジャミングシールドを遣っていたからと言っても、この船は信じられない程無防備だ。僕は余りのセキュリティの甘さに、却って無人船かと疑ってしまう。

「居るわよ？ 大勢ね。大半がサイバノイドだけれど。でも、この辺りのフロアには私達だけよ」

彼女は部屋の外を気にしながら答えた。

「僕達と一緒にだった……」

「ああ、あの子達なら連邦に保護されて行ったわ。今頃、あっちでは貴方達二人が戻されたメンバーの中に居ないので大騒ぎかもね？ 残念ながら、友達は見付かってしまったけれど、貴方達はまだ彼等には気付かれてはいないと思うわ。多分ね」

「多分って……それって貴方が僕達を庇ってくれてるって事？ でも、どうして？」

彼女はにっこりと余裕で微笑んだ。

「怖い思いをさせてしまったわね？ さっきは悪かったわ。人違いをしていたの」

（人違いって……ン、じゃあ、ニアは殴られ損なの？）

（そうじゃないと思うよ？）

頭の中に、直接ニアの声が聞こえる。

僕はニアの「天然」に苦笑した。

何度も上りのエレベーターを乗り継いで、僕は彼女の控室へと案内された。

「もっと気の利いた物があれば善いんだけど、生憎こんな物しか無いの」

僕はパックのゼリー状サプリメントとクッキーを貰い、僕には錠剤の抗生物質まで用意してくれた。

（こんな事になるとは思っても見なかった。十分だよこれで）
（そーおー？　　ってか、このゼリー……不味）

ニアが変な顔をして僕を見る。甘味が無いと駄目みたいだ。栄養的にはこれで充分なだけだな。

「船員に……あの、僕達の事知らせないんですか？」

僕は遠慮がちにおずおずと訊ねた。彼女はキーボードを叩いていた手を休めて僕の方に向き直る。

「実は、私も同僚と逸れちゃったみたいなの。この船で」

「はア？　逸れた？」

ニアと僕の声がハモった。

「だって、この船広すぎるもの……それに、同じ顔で同じセリフ言わないでくれる？　私は、エルフィン。エルフィン・フィリニツクよ。宜しくね？　双子ちゃん」

彼女はくすくすと笑った。

はあ……何て品良く笑うんだろう。

僕は無条件で彼女に見惚れた。「坊や」と言われてムツとなっていた事なんて一瞬で忘れていた。

やっぱりティファだあ……彼女は本当にティファにそっくりだ。

そう言えばこの船に乗った時、ケインが「可愛ければ何でも許される」って言ってフェイ怒らせたっけ？　あの時に、僕は「何言ってたんだ？」ぐらいにしか思わなかったけど、今なら僕でも解るよ。うな気がする。

「こっ、こちらこそ。あつ、あの……ぼ、僕は、マック・ロディナル。で、こっ、こっちがニアです。あつ、あの、さっ、さっきはニアが失礼しました」

どうしたんだろう？ 彼女の笑顔を見てしまってから、ずっと胸がどきどきする。

「ぬわーに、コチコチになってんのよ？ ぶあーつか！」ついつとそっぽを向いてニアが毒づく。それからちらりと僕の方に視線をくれる。「口元、ほらあ、クッキーのクズが付いてるわよ？ そお、右の頬っぺた」

言われて僕は一層赤面した。慌てて右の頬に手を遣る。

僕達の姓を聞いて、彼女は意外だと言う反応をした。

「社長と同じ姓なのね？」

「社長？」

まともやハモった。

「ええ、ミューズの社長。確か、アレン・D・ロディナル。まあ、偶然でしょうね」

そう言っ、彼女はテーブルの下にあるコスメボックスからミューズの化粧水を取り出し、僕達に見せた。

確かに管理ラベルには、代表取締役として彼の名が記されている。化粧水にはほんの僅かだけれども禍々しさがあ、僕は鋭くそれを感じ取って触れる事を躊躇った。

僕は学校であつた出来事を思い出して鳥肌が立つ。

（何だろう？ この嫌悪感。偶然姓が同じだけなのに。聞いた事の無い人の名前なのに）

「私、今回のキャンペーンで来賓の接待をする為に派遣会社から来たコンパニオンよ。連れの子達三人で来たのだけれど、二人共居なくなっちゃって……で、今夜のパーティが中止になったから、下層部まで彼女達を探しに来ていたの。此処の社員じゃないわ」

それで彼女は船員に、僕達の事を話さなかったんだ。

僕は納得して頷いた。

「中止って？ イベントだった？」

「ええ。表向きは、社長の具合が悪くなったとかで。元々心臓が悪いとは聞いていたのだけれど……いつも私達が会うのはサイバノイドの身代わりなのに。パーティだって、あれだけ大々的に広告していたのに変よね？ サイバノイドでも不具合があるのかしら？ それとも他に何か理由があったのかも知れないわ」

「ニア、何だかとても悪い予感がするよ」

（まさか僕達の密航がばれていて……？）

元々悲観的に考えてしまう癖がある僕は、自分達に関わる最悪の事態を予測して憂鬱になった。

「へえ、そうでしょうね。ニア達が埃塗れになっている間に、フエイ達ってばさっさとニア達置いて帰ってっちゃうんだから」

ニアはソファの上で膝を抱えながらふて腐れた。軽く親指の爪を齧る。

会話が噛合わない。ニアは別の事で頭が一杯の様だ。

「何勘ねてんの？ こうして助けて貰ってるじゃない」

僕は諭すように言ったが、ニアは全然聞こうとはしない。

「……もお、いつまでも勘ねんなよ」

あさっての方を向いてボソツと言ってやった。

「なにィ？」

ニアが身構える。

僕はビクって退いてしまう。自慢じゃないけど、口では負けない自信があっても、腕力でニアに勝った事は一度だって無い。

僕達の遣り取りを、エルフィンは困った顔で見守っている。

唐突にドアが開いた。三人とも驚いて凍り付く。

「いきなり……誰？ このおじさん」

ニアが横柄に言った。

恰幅の良い大柄な男の後ろには、五、六人の警備員らしき人影が

立っていた。各々が銃を構えている。徒事じゃない。

「お取り込の所、申し訳ないが……」

「じゃ……社長」

呻くようにエルフィンが呟く。

（この人がミューズの社長？）

社長はそれ相応の威圧する様な貫禄を持って、僕達三人を見下ろした。

僕達と同じ姓の人。でも僕は、初対面なのに何処かで会った事がある様な妙な錯覚を覚えていた。

「三人共、こちらへ来て貰おう」

銃口が僕達を狙っていた。

第4話 恐怖

追い掛けて来る警備員達を入り組んだ通路で何度も遣り過ごしていたのに、僕達は再び船底部へと追詰められてしまった。

「マック！　しっかり！」

僕はエルフィンの中身に負ぶさって息も絶え々になっている。

何をしたのか自分でも判らない。気が付いたら、社長とその周辺に居た警備員達が血塗れになって事切れていた。そして僕は今まで体験した事も無いくらいの多量の血を吐いた。

「エルフィン……も、もう、いい。いい……から、僕……降ろして」意識が霞む。体が重い。

「何言ってるの！」

「僕は……もう、いいから。置いて……って」

「馬鹿ッ！　そんな事！　出来る訳ないじゃない！　もおおっ、弱音吐かないのッ！」

ニアが涙声で一喝するけど……もう駄目かも知れない……そんな気がした。

「マック！　しっかりしよう！　おうーい！」

擦れて行く僕の意識を引き戻そうと、ニアが容赦なく耳元で怒鳴る。

ごめんニア。僕ってどうしてこう……お荷物なんだろう。

声にならない。全身の倦怠感が口まで重くしているんだ。僕は自由が利かない自分の身体の不甲斐無さを呪った。

「ニアちゃん、ちょっと手を貸して」

エルフィンがニアの手を借りて、僕を降ろした。

そして僕の肋骨の浮いている痩せた胸をはだけると、調合した鎮痛剤らしきものを素早く打つ。即効性の経皮無針注射を循環機能の胸に直接接種したから薬の効果が強い。鼻の奥で薬独特の臭いがしてクラクラする。

エルフィンが僕の処置を終えると、今度は僕達が持っていた携帯から、隔壁操作のプログラムデータに接続し、侵入する。

「あれ？」

ニアが画面を覗いて首を傾げた。

重い音が次々と聞こえ、重厚な隔壁が天井部から降りて来る。

「この辺りのエア・シャッターを作動させたわ。解除コードを壊しておいたから、これで暫くは下層部へは入って来られない……どうしたの？」

エルフィンは画面に釘付けになっているニアを訝った。

「ねえ、マック」

「……何？」

全身が一層もの凄い倦怠感に襲われる。返事をするのも億劫だったけど、黙っていたらニアから無視したと言われて後が怖い。

「来た時にウィルス送らなかった？」

「ウィルス？ ……別にそんな形跡は無いわよ」

エルフィンが首を傾げる。

「だあって、マックしたよね？」

「う……うん」

確かに僕はスターミューズに乗った時、監視モニタと隔壁コード履歴に検索を掛ければウィルスに感染するようにしていた筈だ。エルフィンが遣った様に特定の隔壁を始動させる為には起動コード履歴に一旦介入してコードを読み取らなければならない作業がある。

「ほらア、見てよこれえ」

ニアは僕に向かって画面を見せた。

（……本当だ。きれいに消えちゃってる）

僕は黙って頷いた。

「誰かがワクチンを使用したのね。そこいらの会社じゃないのよ。あらゆる想定でのセキュリティが組み込まれているもの……そんな方法では無駄ね……だとすれば貴方達は既にセキュリティに引っ掛っていた事になるわ。私達はとっくに見付かって泳がされていたっ

て言う事になるわね」

エルフィンが気の毒そうな視線を僕達に送った。

「ふうーん」

ニアが意味ありげな上目遣いでエルフィンを見上げる。

（ね……ニア、もしかして彼女の事疑ってるの？）

息も絶え絶えの僕は、心の中でニアに問い掛ける。

「あのね……」

ニアは呆れて僕を見返した。

（パソコンオタクのマックなら分かるけど、タダの派遣社員が起動コードなんか読み取ったりして……んな事やってのけられるとでも思ってるの？ ニア達に初めて会った時だって拳銃持っていたんだよ？ やっぱこの人怪しいよ。絶対）

（そんな……）

ニアは確信を持って僕に伝えた。エルフィンの事がどうしても信じられないみたいだ。

「さ、早く」

エルフィンが再び僕を背負って走り出す。いくら僕がニアよりも軽いからって、コレは無いよ。何だか自分が情けなくなって来た。だけど、そう気に病む時間は無かったんだ。僕はエルフィンに打たれた薬で、あっという間に深い眠りに引き摺り込まれて行った。

「何？ ここ……水音？」

「実験プラント？ ……何をするラボなのかしら？」

二人の声で眼が覚めた。

「ま……まだ……生きてる……」

僕は小刻みに震えている、自分の骨ばった細い両の掌を見詰めた。

「あ、気が付いたあ？ 大丈夫？」

ニアの悪戯っぽいクリクリした瞳が僕の顔を覗き込む。

「気分はどう？ まだほんの少ししか眠っていないのよ」

二人の言葉が温かい。それに……エルフィンの中にも温かいよ。
(ニアって、本当は優しいんだ)

「な……何うるうるしてんのよォ！」

ニアが、慌ててトゲトゲしく言い放った。

(あれ？ 凶星？)

(あ、あ……あに言っただけだよ！)

ニアは赤くなってそっぽを向く。

普段なら僕に絶対に見せない、優しいところを僕に悟られたのが悔しいのかな？

「だって……」

言いかけて、はっと我に返った。

人の気配がする。それも大勢の。

「囲まれているわ」

エルフィンが焦った。

「やったわねっ！」

ニアはエルフィンの傍から飛び退った。完全に彼女を敵視しちゃってる。

「マックを放して。待ち伏せさせておいて、ここへ連れて来るようにしたんでしょ？ ニア達をどうする心算なのよ？」

大勢の大人達は皆銃を構えていて、僕達を素早く遠巻きに取り囲む。

「な、何よ……う、撃つの？ ニア達を殺すの？ 密航したから？ だから殺すの？」

ニアは顔色を失って、エルフィンに詰め寄った。

ニアが壊れていく。銃を持った何人もの大人達に追い掛け回されるんだもの。徒事じゃ無いなんて事は僕にだって判ってるさ。だけど、エルフィンに訊いたって……

「ニア、ちが……」

「待って！」

幾つもの銃声が、僕とエルフィンの声が無情に掻き消した。

床への着弾が火花を散らしながら、一斉にニアめがけて集中する。彼女の体が撃ち抜かれ、血飛沫と一緒に何度も弾かれた。

目の前の光景に、僕の全身が凍って心臓が今にも停まりそうだと弾の幾つかが跳弾し、数ある大型水槽に当たって罅割れる。

「う……」

ニアは想像を絶する激痛に手足を縮めて丸く蹲った。声にならない呻き声が、乱れた呼吸と一緒に喉から搾り出される。微かにニアの血塗れになった手が震え、何かに縋ろうと動く。

蹲った身体の下から床へ流れ出る血が、彼女の周りを見る々うちに拡がって行く。

「キャアアアア————！」

悲鳴の尾を引きながら、ニアは闇に落ちて行った。

僕はエルフィンの背中に縋り付いて叫んでいた。

唐突にニアの体が消えた。彼女が倒れていた場所には、ぽっかりと大きな暗い穴が開いている。床が抜けたんだ。

「ニアアッ！」

僕は力の限り彼女の名を叫んだ。彼女の断末魔の様な悲鳴がいつまでも耳に残り、全身に震えが奔る。

「ニア……イヤだ……厭だ！ ニア！」

嘘だ！ こんな……こんなこと……僕は何をしていたんだ。自分の事で精一杯で……僕は……

エルフィンがニアが消えて行った穴へ駆け寄ろうとして、踏み止まった。明らかに何かに狼狽している。

僕は自分の眼を疑った。

同じだ。学校でニアから受け取った小壘から出て来たのと同じく、黒くて得体の知れない何かがここにも蠢いていた。しかも、前とは比べ様が無い程大きくて沢山の何かが、割れた水槽の中からゆっくりと溢れ出し、大蛇の様にうねりながらこちらへ迫って来る。

僕は禍々しく蠢くそれらの向こうで、水槽から流れ出して来たモノに眼を向けた。それは多量の水溶液と一緒に幾つもの……人

……間？ 未換装のサイバノイド？ それとも何かの標本だろうか。皆年齢にバラつきはあったが、同じ様な少女の体をしている。

そして……彼女達は皆、見覚えのある同じ顔をしていたんだ。

この顔は、ニア？ それとも僕？ 何で此処に、こんなに……

冷水を頭から掛けられた様だった。

僕達と同じ顔と体をした何体もの人型は、水溶液の流れに従って床に散らばった。そして、ふやけた白い皮膚は空気に触れた所から見るとうちにどす黒く変色して干乾びて行く。

ヒトじゃ……ないの？

僕が見た、蛇の様に蠢く黒いモノは幻覚だったのだろうか？ 干乾びたヒトを残していつの間にか消えていた。

「これ……は、クローン？ なんでこの子達と同じ……なの？」

僕を支えていてくれたエルフィンの腕から力が萎えていく。

僕は激しく咳き込みながら、ずるずると彼女の背から伝い降り、両膝に力が入らなくてそのままへたり込んでしまった。

何、言ってるの？ 僕達のクローンって、どう言う事？

僕は怪訝そうにエルフィンを見上げた。彼女の意図が理解出来ない。

息が苦しい。咳が止まらなくて、考えが纏まらない。なのに、こんな……こんな時に、何冗談言って……

「嫌、少し違うがね」

背後で聞き覚えのある男の人の太い声がした。

僕が咳き込みながらゆっくりと振り向くと、死んだ筈の社長が立っていた。

一瞬慌てるが、外見上社長がサイバノイドだと判ってホッとする。「それは、試作品の失敗作だ。そして、お前の隣に居る子供もそうだ……いや、そいつは自我を持っている個体だな。訂正しよう。そこに転がっているのとは別の物だ」

(え? ……僕? ……何の事?)

「山崎も考えたものだ。自我を確保する為には、手段は選ばん……。か。移植とナノマシンで命を繋いでも、所詮は限界がある。それが理解出来ない奴ではあるまいに……」

「社長、貴方は一体……」

エルフィン社長を見上げて呟る様に呟いた。

「私がこの者達のオリジナルだよ……と言っても語弊があるな。本体は別に在る。見ての通りこの体は造り物だ。サイバノイドとか言われるらしい」社長は大きく腕を広げた。「会社を運営するには、其れなりのこけおどしも必要になるのですね。今の私には必要なのだよ。私は昔、死から逃れたいが為にあらゆる限りを尽くした。勿論手段を問わずだ。其の為に何人もの私が現れた。俗に言うクローンだな。成功した例はごく僅か。遺伝子レベルでの何かが災いしてか因果関係は未だに不明だが、男性形はこいつを除いて以後何度造っても出来なかった。だが、限りなく未完成に近いこの成功例は、自我を持っている。解るか? 姿容は同じ私であっても私ではない。別の固体だ。自分の身体が欲しいばかりに、何年にも亘って多くの生と死に干渉し続けた……が、総ては悪足掻きに過ぎなかったのかも知れんな」

干……渉? ……この人は何を言ってるんだろう?

彼は僕の事を知っているみたいだ。でも、それよりも僕はエルフィンの反応が気になる。彼女も、何か知っているみたいだ。

「貴方の噂は本当だったのね?」

エルフィンは横にゆっくりと頭を振り、溜息混じりにそう言った。そして何だか社長を憐れんでいるように見上げる。

「否定はせん。本当の事だ。生命を扱うには其れなりに莫大な費用と時間が掛かる。研究からの副産物である医薬品から化粧品も利用せん手はなからう? 尤も、今ではその副産物の方が皮肉にも主力として成功してしまっているがね。エアの中央医療局長に修まっている山崎環は、当時私の治療を行っていたスタッフの一人だ。奴

はここにいるそいつを連れて社を離れた……完璧にしてお渡ししますと言ってな」社長は、吐血して蹲っている僕を冷ややかに見下ろした。「だがどうだ。あれから何年にもなるが、こいつは完成品に値するか？」

社長は僕を見て蔑む様に笑った。

僕はカチンと来る。完成……品？ 人を品物か何かのモノでしかこの人は見れないのか？

「マックだったな？ 来い。今更手遅れかも知れん。が、まだ間に合うかも知れん。この私ならば、恐らく今のお前をまだ生かしてやれる事が出来るだろう。可能性はゼロではない」

そう言って、僕の方へと片手を差し伸べた。

「……嫌だ」

僕はなけなしの意地で抵抗する。そうは言ってみたものの、指先一つ満足に動かせない今の僕に、一体何が出来る？

「何故？」

「貴方が治したいのは僕自身じゃない。僕の体。貴方の器になるのが条件でしょ？」

何人もの警備員から、一斉に銃口を突き付けられた。エルフィンが傍で息を呑む。

成す術無し……だ。

「生意気なガキだ！ 社長に何てえ口の利き方だ！」

一際大柄な警備員の一人が、手を伸ばした。

「あうっ！」

僕は、荒っぽく顔を正面から鷲掴みにされて、引き上げられた。僕の両の手足が力無くだらりと下がって、まるでそこに倒れている人形の様だった。尤も、基本は全く同じ顔や作りなのだからそのものかも……

次の瞬間、乱暴に床に放り投げられた。僕は受身さえ出来ずにもんどり打って倒れて、右肩を強打した。呻きながら、身体を丸く屈める。

「察しが良いな？　そうだな。いずれはそうなる予定だ。が、私とて好んで殺生をしておるのではないぞ。生命を知るには、死についても学ばねばならん。太古より偉大な術者が戒められていた禁忌を敢えて犯す様に……」

「私もそうあるのだ。とても言いたい様ね？　詭弁だわ」

演説めいた社長の言葉をエルフィンがぴしゃりと斬った。

「幾ら言い繕っても、貴方が何百、何千人と他人や自らのクローンを犠牲にして来た罪は消えないわ。禁忌って、何度やっても結果としてそうなる事が解っているから戒められているのでしょうか？　他への可能性が見出せないから」

社長はムツとなった。エルフィンの物言いが気に入らなかった様だ。

「罪などではない。粛清だ。人類は無駄に増え過ぎたのだよ。その無駄に増え過ぎたものを効率的に利用して何が悪い？　現に、先日ナバナの首相は難民を受け入れるとして多額の救済金を受理したにも関わらず、事故と見せ掛けて受け入れた二千人も難民を殺害したではないか。彼に比べれば私なぞ……」

「だから、それが間違っているのよ。勘違いしないで。何の権限を以て粛清だなんて言うのよ。自分が神にでもなった心算なの？　それに、事故か故意にかは知らないけれど、他人と自分を比較してどちらがマシかだなんて……大手企業の取締役が口に出して言う言葉じゃ無いわ」

何だか、ニアみたいな言い方するなあ。内容はエルフィンの方がしっかりしてるけど。

僕は床に倒れたまま、じっと二人の遣り取りを聞いていた。

「時に、お前は何処の鼠だ？」

社長の口元が笑う。

一瞬、エルフィンは顔色を変えた。

「バイオ・ケミカル社か、メディカルミッテラン社か……連邦捜査局に、どこぞのテロ組織と言うのもあるな？　選りすぐりのコンパ

ニオンの中でも、お前は私の眼鏡に適っていた上、この者達に早くから接触しておった。泳がせておいたのもその為だ。一緒に来ていた者達はどうに生きてはおらんよ。まあ、今更何処の者だと詮索する心算も無い。残念だったな」

「……最低!」

エルフィン社長を燃えるような碧い瞳で睨み付けた。

「黙れッ。この小娘!」

彼女のすぐ後ろに立っていた護衛が、銃把を振り下ろすのが見えた。

一瞬、エルフィンはかわそうと身構えたが、僕と視線が合って動きが止まった。

そのままあっさりと殴られる。

「エルフィ……」

かわそうと思えばかわせた筈なのに。

でも、すぐに僕には彼女が何故殴られて気を失ったのかが分かったんだ。

エルフィンを殴った護衛は、社長に厳しく咎められた。もしかすると社長はエルフィンを使って僕に脅迫めいた事でもしようとしていたのかも知れない。

僕はエルフィンの倒れている傍の大型水槽の前へ、二人がかりで両腕を抱えられ引き摺る様にして連行された。

淀んだ水槽の前には、白衣を着た医療スタッフらしい人達が五、六人待ち受けている。

これから何をされるんだろう。

治療すると言ったって、僕自身(I・D)は不要なんだ。どんな事をされるのか判ったものじゃない。

医師の一人が、手帳サイズのハードケースを持って近寄って来た。手際良く衣服を脱がされた。全身にシール状のセンサータグをケースから取り出して貼り付けられる。

内心、エルフィンには悪いけど、彼女が気を失っていてくれてこの時ほどホッとした事は無かった。身体の骨という骨が浮き出している貧弱な僕の姿なんて見られたく無いもの。

「！」

声を出す間もなく、あっという間に濃い黄褐色の水溶液の中へ乱暴に投げ込まれた。とても僕を人として扱っている様には思えない。全身に刺す様な強烈な痛みが走る。息も出来ない。けど、僕はもがく事すら出来なかった。

生暖かくて血生臭い液体。

……気持ち悪い。

そう思った時、既にこの液体は僕の肺の中を満たしていた。

（ニア……きつともうすぐ逢えるよ……）

血煙と一緒に、僅かに肺に残っていた空気が水面へと昇って行く。水槽の上から照らしているライトの光が、琥珀色に揺らめいて見えた。

第5話 出逢い

ニアの体は、床と天井とを繋いでいる透明な円筒状の浴槽で、滅菌フィルムに包まれた呼吸可能な水溶液の中に、頭ごと沈められていた。

ミューズ社の商標ラベルが貼ってある特殊な細胞蘇生液を使用しているらしく、辺りには大型の空ボトルが幾つも転がっている。

全身に生命維持を監視するセンサータグが貼り付けられ、浴槽の外に置いてあるパソコンと無線で繋がっていた。画面にはニアの脈拍、心拍数等が規則正しく波打っている状態が記録されている。銃弾を受けていた傷口からは絶えず細かい気泡が立ち、損傷していた細胞が見るうちに再生されて行く。

―「何の用だ？」

画面には『ドクター山崎』と呼ばれている医師の姿が映し出されていた。

「あんたがセンターの医局長さんか？」

二十歳前後に見える赤銅色の肌をした銀髪男は、無愛想に言った。

―「……そうだ」

「お宅等の持っている情報を開示してくれないか？」

彼の要求に納得が行かず、ドクター山崎は怪訝そうに男を見る。

「探しモノ……いや、人が居たよな？」

―「見付かったのか？」

ドクター山崎は身を乗り出し、画面に食入った。

「いや」口元を緩めるが否定し、肩を竦めて惚けて見せる。「まだ、本人だと確認出来ない」

―「……何が望みだ？」

男の次の言葉が明らかに判っている口振りで、軽く首を傾げる。

「二人の経歴を知りたい。あの双子がそこへやって来る前のね」

――「経歴？ ……断る。捜索には何ら関わりが無い」

男の言葉に意外だった様だが、彼は怯む事無く毅然とした態度で撥ね付けた。

「そうか？ なら、良い」

あっさりと男は引いて通信を切った。

見知らぬ男からの通信が途絶えた後、ドクター山崎は肩で一つ大きく息をした。眼鏡を外して右手で軽く目頭を揉む。ニアとマックが行方不明になってからずっと神経を張り詰めたままだった。

心労の為か、ドクター山崎の表情は一段と暗い。青白い顔の頬の肉は削げ落ち、両眼は落ち窪んでいる。単なる心労だけでこれ程までになるとは考えられ難い。

スタッフの誰もが、ドクター山崎が病を患っている事を察していた。しかし、医師である彼への気遣いから決してそれを口にはしなかった。

足元が覚束ない状態で、通信室から出て行こうとしていた所を所員に呼び止められる。

「ドクター山崎、今の通信……」

引き留めた男は、報告を躊躇った。

「うん？」

ドクター山崎は努めて穏やかに応じる。

「すみません。遣られました。一応、通信防壁を張っていたのですが、簡単に破られて……」

彼は申し訳なさそうに状況を伝える。

「あのグレネイチャ、単なる賞金稼ぎかと思っていたが……甘く見過ぎだな。こちらからは？」

「はい。OKです。」

「それを連邦の三島にまわせ。接触して来た人物を洗い出す」
「了解」

＊ ＊

「情報提供拒否られたなら、こっちから調べてやるまでさ」

男は手元の画面を切り替えた。通信の間に素早くセンターの中央管理A・Iに潜入していた。何重にも厳重にロックが掛かっているが、男は意図も簡単にそれらを解除して行く。

男はニアとマックの項目ファイルを見付けた。

モニタは左右に分割されて、一方には全身のシルエット、そしてもう一方には実際に子供の損傷した頭部や人間の器官、そして夥しい幾つもの肉片が、濃い黄褐色の水溶液に漬け込まれている。画面の左上にはつい半年前の日付と経過時間が表示されていた。

「生体実験？ 何だよこれは……たったコレだけの部位で……まさか蘇生？ マジで？」

うわ言の様に呟く男の眼が鋭く光った。その画面が何を意図しているのかを察する。

画面は早送りされており、経過時間の数値が恐ろしい早さで進んで行く。そしてバラバラだった肉片も、恐ろしい速度で一つの人間の身体へと再蘇生されて行った。

「クローン？ いや、違うな。手法がまるで違う……」

男は固唾を吞んで画面に食い入る。

やがて、身体を持ち主が完全に復元された。

水溶液の中には、自分が助けた子供と同一人物と思われる子供が沈んでいた。濃い黄褐色をしていた水溶液は再生時に使用されたのか半分以上水位が減り、すっかり色を失っている。

男はコンソールに頬杖を付いて暫く考え込んでいた。徐にもう一人の男の子のデータに手を伸ばす。

「どう思う？」

画面を見詰めながら、船のA・Iに問い掛けた。

―「コッチガおりじなる……デハナイデス。おりじなるハ別デス」

A・Iは二人の情報を読み取って答える。そして臓器関係の殆どが移植されていた履歴を画面に映した。

「何だ。双子と言ったって、創られた双子じゃないか。何処にでも居る様な子供が何でミューズ社と関係があるんだ？ 人間のクロールや死体蘇生がご法度なのは分かるが、これは……それだけの理由じゃない……のか？」

それまでこちらから密かに繋いでいたモニタが、唐突に切れた。どうやらセンター側に気付かれたらしい。

「ま、アイツが気付けば解るかな」

男はふと気配を感じて手を止める。

―「気が付イタヨウデス」

「ああ」

A・Iの言葉に、男は深く頷いた。

ニアが意識を取り戻した様だ。激しい水音に混じって、彼女が肺にまで入っていた治療液をむせ返りながら戻しているのが聞えた。

「お、気が付いた？」

「いやあーっ！」

ドアを開けて覗き込んだ途端、ニアを監視していたパソコンが凄いい勢いで飛んで来た。

男は慌ててそれを両手で受け止める。

「なっ、ななな……何でハダカなお？ それに、ここ何処おお？」

ニアはもう半狂乱だ。

「くっ！」

ニアは、右腕を後ろ手に振じられ、固められていた。普通ならこれで身動きは取れない。が、強引に彼女は体を無理に振ろうとした。細い腕が折れると危険を感じた男は、ぱっと手を弛めた。

その機をニアは見逃さない。瞬時に男の手から抜け出した。

素早くニアの手が動く。

不用心にも、目の前のテーブルにサバイバルナイフが置いてある。ニアは体を翻すと同時に、眼にも留まらない速さで何度もナイフを薙ぎ払った。男は素早く切っ先をかわすが、ニアには男が動揺しているのが伝わっている。

もう一度、ナイフが大きく空を切った。が、そこに男は居ない。先を読まれて体を一步引かれていた。手首を無造作に掴まれ、斜め下前方に軽く引っ張られる。それだけで十分だった。体勢を大きく崩し、そのまま簡単に投げ飛ばされた。ニアが突っ込んだ勢いを逆に利用されたのだ。

「きゃんっ！」

壁に逆さまの状態で背中から叩き付けられた。容赦無しだ。

すっと目の前が暗くなり、意識が遠ざかったニアの体は、糸の切れたマリオネットの様に崩折れる。

男は肩で息を整えながら、ニアの両手を後ろに廻してガムテープで拘束する。

「何てエ子供だ」

自分の判断の甘さと、ニアの動きに付いて行くのがやっとだった事に苛立ちを覚えた。

――「アーヴィン」

「何だよッ？」

男は忌々しそうに船のA・Iに噛み付いた。

――「三島課長カラノ通信」

「ああ？」

片方の眉が上がる。

腕組みをして、身体を乱暴にシートへ投げ出し胡座を掻いた。

彼――アーヴィンは、荒い息のまま通信回線を開く。

正面の大型モニタに映った白髪交じりの老紳士が、彼を見るなり驚きの表情を浮べて絶句した。

「……で？」

アーヴィンは老紳士を促した。

やや間があつて、老紳士は我を取り戻す。

―「ア、アーヴィン……アーヴィン・オースティン？ 本当……
本当にお前なのか？」

呻く様に声を絞り出す。

「ちゃんと足は付いてますよ？ で、そんな事を言うためにワザワザ連絡を遣したんですか？ 三島課長。いや、もう部長でしたよね？」 苛々しながら三島に喰って掛かる。八つ当たりもいい処だ。「そっちを大分覗かせて貰いましたからね。とっくだと思っていました。遅いくらいだ」

―「もしや、我々が捜している双子と会ったのか？」

「居ますよ。もの凄くイキの良いのが」

アーヴィンは背後に顎を構って見せた。言われるままに三島は彼の背後に視線を遣る。

室内中のあらゆる物が散乱しているその奥に、裸のままで壁に向かって横向きに倒れている子供の後姿があった。華奢な背中からは男の子か女の子かは判断出来ないが、子供は後ろ手にテープで拘束されている。

―「……説明して貰えるかね？」

明らかに、別の意味で三島が狼狽しているのが判り、今度はアーヴィンがうろたえた。あまりにも間が悪い。

「う……？」

ニアは後ろ手に拘束された上から、白い大きなTシャツを着せられていた。襟口から細い肩が片方出ている。その肩には、部活で日焼けした小麦色の肌にくっきりと白くランニングシャツの跡が残っていた。

意識を取り戻したニアは、状況が把握出来ないまま上半身を起ここ

した。ぽやんとしながら、床に正座する。

ニアの表情は先程とは違って精彩さを欠き、妙に不拔けていた。

「お前……大丈夫か？」

アーヴィンは左足を付いて長身を折り曲げた。左手でニアの顎^{あご}を上げて彼女の顔を覗き込む。

「痛い所は無いか？」

自分で投げ飛ばしておいてそれはないかと、訊いた事を後悔した。子供であってもニアは女の子である。特別意識する心算は全く無かったが、それでも彼女を直視することを躊躇^{ちゅうちう}ったアーヴィンは、視線を逸らす。

その視界に、偶然、銃創のあるニアの左腿が映った。銃弾の痕は全身に十数か所にも及んでおり、至近距離から撃たれたと思われるその全てが貫通していた。勿論足も何箇所か射抜かれていた。が、既に再生され、新しい肉芽の痕がほんのりとしたピンク色に残っているだけだ。

「流石はミューズ社の誇る再蘇生液だ。あの短時間で銃創が殆ど目立たな……いい？」

「……」

ニアと視線が合った。

彼女は船室のライトに照らされて、見様によっては瞳が赤く見える。身長百五十弱。体重は目視する限りでも四十は無いだろう。

（まだ小学生じゃないか。こんな子供を……）

アーヴィンはニアを助けた時の事を思い出していた。

『スター・ミューズ』に潜入しようとしたアーヴィンは、船の外壁に取り付いて間も無く、これから乗り込もうとしていた排出口らしいハッチから、宇宙服さえ着用していない無防備の子供が突然放り出されて来たのを見付けて、驚いてしまった。

人命を優先したアーヴィンは、急いで応急処置を施すと、自分の小型宇宙船へとニアを連れて戻って来たのだ。

（何でこんなのが降って来たんだ？ しかも撃たれて……上で一体

何が起こっていたんだ？)

状況から考えても、ニアは文字通りの意味で廃棄処分された事になる。

(ミューズの会社から?)

ニアの虚ろな瞳が微かに反応した。

「……誰？」

ニアは小首を傾げてじっとアーヴィンを見上げている。

女の子から凝視されて、アーヴィンの方が逆に怯む。

「……お前、俺が怖くないのか？」

「どーして？」

寝起きの様なニアの瞳には恐怖心が全く感じられない。むしろ彼の質問の意図する事さえ理解出来てはいない様だ。

(……グレネイチャの俺を見ても全くの無反応か。それとも、単にグレネイチャを見た事がないだけか? ……まさか存在すら知らないって言うんじゃないだろうな?)

グレネイチャ。

宇宙世紀の初頭に一部のセレブ達の間で流行した奴隷難民達のことだ。

赤銅色の肌と銀髪に蒼い眼を持っている。彼等はその目的の為に例外として承認され、人工的に掛け合わせて創られた突然変種の亜人間。彼等には凡そ人権などというものは認められてはいなかった。過酷な条件下での開発・開拓の強制労働に、初めは作業用ロボットと併用してエレメンタルを奴隷として就かせていたが、彼等の持つ特殊能力や異種への畏怖心から雇用者が激減。替わって現れたのがグレネイチャだった。

一説には、稀に見る蒼い瞳を持っていた為に、妬みを買い膚は赤銅色のままにされたとも言われている。彼等の持つ銀髪と蒼い眼はセレブの間で評判になり、開拓労働とは別の目的でも量産され、ペットの様に一時期は市場へと広く行き渡った。

しかし、エレメンタルよりも人間に近い存在であったが為に、好奇心や学習能力が高く、それ故に「人であること」の権利を求めて幾度と無く人間に武力抗争を挑んだ。

彼等は時として宗教や政治にも利用され、弾圧され、殺戮された。常に被害者であったが、世代交代の末、遂には人間としての権利が認められるに至った。

権利を認められたものの、彼等の持つ銀の髪と蒼い眼。そして赤銅色の肌は優性遺伝の為、持て囃された反面忌み嫌われる事となる。何世代も経った今でも争いを好む野蛮な種族と誤解され、見ず知らずの他人から時折理不尽な思いをさせられる。

アーヴィンは「グレネイチャ」と呼ばれて蔑まれて来た人種の末裔だった。

微かにニアの唇が動く。

「え？」

「……だあ。凄い蒼。でも、右と左が違うー」

「はああ？」

アーヴィンは眉を寄せた。

「何言ってる？ 蒼？ 蒼って……ああ、俺の眼の事か？」 食い入る様にじいっと見詰められてしまい、慌てて近付けていた顔を離す。
「あ、ああ、右目は創り物さ……お前、どこか打ち所が悪かったのか？」

アーヴィンの心配を余所に、ニアは額に掛かった前髪を掃おうとして、手が動かない事に気付いた。朦朧としていた意識がハッキリして来る。同時に、自分の於かれている状況が、あまり好ましくないと判断した。

仕方無かった。素肌の上に心許無いTシャツ一枚。しかも後ろ手に拘束されている。

「何？ これ……ニッ、ニアをどうするの？」 怯えた様に肩を竦めて後退る。「へ、変なコトしたら、大声出してやるんだから」

声が微妙に震えた。言っておいて顔が赤くなる。

「はあ？ 今頃何言っているんだか」

（やっと正気に還ったな？）

アーヴィンはウンザリといった様子だ。

「さつきから大騒ぎしている癖に……あのな、一応俺にも選ぶ権利ってモノがあるんだ。小学生相手に何しようっての？」

片手をひらひらさせた。ニアは問題外と言わんばかりだ。

「うーっ。ニアは小学生じゃないもん！」

言われてニアは膨れた。安心はしたものの、それはそれとしてアーヴィンの一言は彼女にとって不本意な言葉だった様だ。

「あ、そう。そりゃ失礼」

（嘔吐け。どっから見ても小学生だ）

アーヴィンはニアの言葉を信じなかった。

「うーっ！ ニアの言ってること信じてない」

彼の態度は見え々だった。適当にあしらわれてニアは一層不機嫌になる。

（気に障ったのか？ 俺、一応謝ったよな？）

ニアの反応に、アーヴィンは理解出来ないでいる。

「ここ何処？」

ムツとしながら、ニアは辺りを見回した。さしあたってクルーザークラスの宇宙船だろうか。

「『スター・ミューズ』の外。折角船内に潜り込んだのに、お前が落っこちて来るんだものな」

ボヤキながら、正面の大型スクリーンを切り替えた。白いファイルが消えて操縦室から外部が見渡せる様にする。

そこには何時間も前にニア達が密航した白い巨大船『スター・ミューズ』の外壁が広がっている。その側面にこの船は取り付いている様だ。恐らく監視レーダーの死角に取り付き、ジャミング・シールドでも張っているのだろう。

「放っとけば良かったじゃない。それに、ニアの事、お前々って言

わないでよッ」

仏頂面でニアは突っ掛かった。アーヴィンの一言々がカンに触る。「はあ？ 放って……って、放って於けるか？ 普通。あのままだと船外へ排出されて死んでいたんだぞ？ それに、手当てが遅れていたら……大体、お前どうしてあんな所から落っこちて……」

聴きたいことがありすぎてアーヴィンは混乱した。

しかし、当のニアは彼の言葉を全く聴いてはいない様だ。首を廻らせて辺りを見渡すと、ダストボックスから見覚えのあるチェックの布がはみ出しているのを見付けた。

「あーっ！ あたしの制服うー」

ニアはアーヴィンの言葉を遮った。

「あ？ あれか……って、聞けよ！ お前、人の言っている事を全く聞いて無いな？」

無視を決め付けたニアにアーヴィンは呆れる。

「あれか。じゃ、ないわよ。ニアの制服どーしてくれんの？ あんなにしちゃってェー。昨日クリーニングから戻って来たばっかなのにイ！」

ニアは涙眼になり、真っ赤になって怒り出す。

無理も無い。介抱するのに緊急を要していた状態だった為、ニアの制服は下着まで総て切り裂かれていた。辺りには、拭き取れていない血溜りの跡が生々しく幾つも残っている。

「お前、それ（血で）汚れているのに」

「この格好で何処行けってゆーのよっ！ 学校の制服なんだよ？ もぉー！」

アーヴィンに噛み付くように言い放つ。

「制服なんか俺が知るかつ！ さっさと学校終わったら着替えろよ」彼は厄介なモノに関わってしまったとばかりに、がつくりと大きく肩を落とすと、別室へ消えて行った。

残ったニアはチャンスを見逃さない。拘束されている両手に足腰を潜らせて、両腕をTシャツの襟から出す。

「んっ」

力一杯手を左右に引くが、テープががちりと貼り付いてびくともしない。バランスを崩してひっくり返る。

暫くの間、足を掛けてみたり、噛み切ろうとしてみたりと、必死にもがいていた。

「ほら、これでも着て……」

戻って来たアーヴィンがニアを見て固まった。

暫らく入り口で吹き出しそうになりながら静観していたが、ニアがテーブルの上に戻しておいたナイフに気付いた処で、彼女を止めた。

ニアの手がナイフに届くより早く、アーヴィンの手が動いていた。ニアが気付き、決まり悪そうにそっぽを向いて膨れっ面になる。

「怪我をするぞ。外してやる。けど、外した途端にまた大暴れはゴメンだ」

そう言って、ナイフをテープに軽く当てた。テープは抵抗も無くスツと切れる。

ニアは黙って膨れたままだ。

「そういや、まだ名前訊いてなかったな？ 俺はアーヴィン・オーSTEIN。アーヴィンだ。報道カメラマンさ。お前、行方不明になっている双子の一人だろう？ 『ニア』って言ったのが名前か？」

「うん」

アーヴィンからテープを剥して貰ったが、自分で力任せに引っ張ったせいで、両手首が真っ赤になってしまい、少し腫れている。ニアは顰めっ面で両手首を擦った。その鼻先にアーヴィンが自分の服を突き出す。

「ちゃんと返せよ？ けどサイズが……まあ、ベルトで締めりゃ何とかなるか」

第6話 死

アーヴィンは自動小銃を取り出した。弾倉を一旦引き出し、銃弾が正確に装填されているのを確認すると、複雑な表情のままそれをニアの目の前に突き出した。

「ニアだったな？ これを渡しておく」

ニアの表情が強張った。

「これ……って、本物？」

問い掛けるニアの視線に答える様に黙って頷くと、彼はもう片方の手で彼女の頭に厳つい暗視ゴーグルを被せようとした。サイズ調節が出来ていないゴーグルは、ニアの頭をするりと通り過ぎて、細い首に落ち着く。

それまで銃に気を取られていたニアは、ゴーグルの重みを感じて我に返って後退った。

小型の拳銃ではあったが、ニアの手にはおよそ似つかわしくないものだ。初めて間近で見る銃に、ニアは手にするのを拒んでなかなか手を出さない。

「ほら」

アーヴィンはニアの手を取ると、無理矢理拳銃を握らせた。背後に廻って一通り基本的な撃ち方を教えてやる。

「や、やだ。止めてよォ」

見た目よりも違う実際の銃の重さに驚きながら、ニアはアーヴィンの強引さに抗った。

「護身用だ。ここから先は自分の事だけを考えろ。場合によっては逃げる事も必要だ」

「あ、あの……今、逃げ出したいんだけど……ダメかな？」

終わりの方は小声だった。アーヴィンの気迫に押されてしまい、つい本音が出る。心なしか体が微妙に震えていた。

既にニアは撃たれているし、今思えば死んでいてもおかしくは無い状態だった。怖くないと言えば、嘘になる。

「俺の船は別用でもう使用出来ない。今頃は『スター・ミューズ』から離脱している。逃げるのなら、この船の脱出用ポッドを使うと良い。無事に脱出出来ればの話だが……けど、兄か弟だか知らないがもう一人、まだこの船に居るんだったよな？」

「……そんなあ」

情けない声で不満を漏らすニアを無視して、彼は腕時計に眼を遣った。

「今、船の各所にセキュリティを散開させている。こっちは時間が無い。悪いが先に行く」

「でっ、でもお……」

恐怖と不安でなかなか決心がつかない。

アーヴィンは黙ってカメラ機材一式のバッグを肩に掛け直すと、ニアに背を向けた。

薄暗がりの中、彼の姿が掻き消されてから間を措かずに銃声が響く。

ニアははっとした。

先程までの銃に対する恐怖と不安は、たちまち独りになった不安へと転嫁される。

「ま……待ってよう」

心細くなったニアは渡された銃をベルトの間に挟み込むと、慌てて彼を追いかけた。

途中、先程アーヴィンに撃たれたのだろう。頭部が消し飛んだセキュリティ・サイバノイドが数体、赤い疑似体液を撒き散らせて転がっていた。

「うえっ」

人体に限りなく近いダミーとは言え、余りにもリアル過ぎて吐き気がする。

(何よ、アイツ……カメラマンじゃなかったの?)

セキュリティを一発で仕留めたアーヴィンの腕は、とても一介のカメラマンとは思えなかった。かなり銃の扱いに慣れているようだ。「わ?」

余所見をしながら薄暗がりを走っていて、不意に大きな障害物に足を攫われた。

転びそうになったが、ニアは器用に体を捻って、猫の様に身体をしならせて足からすんと着地する。

「ツイ、ヒャンホマヘミヘハヒヘヲナ(おい、ちゃんと前見て走れよな)」

「はああ?」

間の抜けた台詞に拍子抜けして、ニアの緊張が緩む。

見ると、アーヴィンが通路の真ん中に座り込んでいた。ペン型ライトを口に咥え、二五〇cc程度のタイヤの無いバイクの内部を弄っている。ライトを口に咥えているので、まともに喋れなかったのだ。

「半重力バイクに乗ったコト……」

アーヴィンは作業を終えて両手を叩きながら立ち上がると、ちらりとニアを窺った。彼女は不安そうに、意味の無い作り笑いを無理に浮かべている。

「無いか。やっぱり……当然だよな」肩を落として、溜息を吐く。

「前に乗れ」

「えー? 後ろじゃないの?」ニアは、ドラマとかでよく見る光景を思い浮かべていた。「普通、彼女が後ろよね」

不満そうに言う。

「良いのか? それで。振り落とされたいのなら、別に構わないが安全の保障は出来ないぞ」

『誰が彼女だあ?』とか言って突っ込んで来るかなと思っていたニアは、当てが外れた。アーヴィンは至って無表情に答えたのだ。

「う、ううん。嫌だ」

慌てて首を横に振る。本気で振り落とされては適わない。

(トホホ……拳銃の次はバイクだってえ？ 校則どころか、法律違反だよ)

ニアは涙眼になった。

(しかも、船スター・ミューズに戻ってから、アーヴィンが怖いよう)

とてつもなく心細い。拳銃を手にした頃から、彼が今までの彼では無くなっていった。表情が硬く、目付きも鋭くなっている。元々無愛想だったが、もはやとても冗談の言える様な雰囲気では無い。

俄かに後方で人のざわめく気配がする。

アーヴィンは素早く暗視ゴーグルを装着する。

「早く乗れ！ ハンドルは常に真っ直ぐに保っている。何があっても絶対に放すな」

「う……うん」

操作ハンドルよりやや中央部を握った。彼から『絶対に放すな』と言われても、ちょっと自信が無い。

「いいっ？」

不安になり戸惑っていたニアが、突然変な声を上げた。

見れば、アーヴィンの手がニアのウエストの辺りを触っているのだ。

「きつ、きゃあああ！ 何すんのよっ！」

ニアの悲鳴と右肘がアーヴィンを狙った。が、簡単にかわされる。これがマックなら完璧に顔面にヒットしている筈だ。

彼は何事も無かった様に、平然としたままニアの着ているシャツの裾を、パンツの中に押し込んだ。

「って……え？」

「裾を出しっぱなしにしていると、豪いコトになる。しかし……細いなお前は。内臓が本当に入っているのか？」

「???」

「そのままだと、風圧でシャツが胸の辺りまで上がって行くんだ。」

それとも、見せたいのか？　ンなモノ、頼まれてもコツチだつて見たくないぞ」

「んん」

ニアは激しく首を横に振る。素が華奢でスリムなニアの体型は男の子と殆ど区別が付かないが、それでも会って間が無いアーヴィンには、恥じらう気持ちくらいは持ち合わせているようだ。

ニアは一旦ハンドルから手を放すと、彼が入れたシャツをもう一度急いで入れ直す。

「良いか？」

「うん！」

アーヴィンは手元のスイッチを入れた。バイクはふわりと十センチ程宙に浮く。

右足でアクセルを踏み込むと、バイクは車体を震わせ急発進した。ニアの悲鳴の尾を引いて、バイクは見る々加速して行く。

耳元で風を切る音が高くなった。ニアは必死にハンドルを握っているが、風圧で首が仰け反り、目の端から涙が止まらない。

前方で火花が散った。

アーヴィンは右手でハンドルを握り、左手で器用にショットガンを操って応戦する。

激しい銃激戦が続いた。

銃声と物が炸裂する音と火花に、ニアは視覚と聴覚。そして感情までが麻痺し始めていた。

何度目かの銃撃戦の最中、すぐ後ろでガラスの割れる鋭い音がした。アーヴィンが短く叫んだきり、動く気配がなくなる。

驚いたニアの肩が、大きく跳ね上がる。

「……アーヴィン？」

「前を見ている！」

気になって振り向こうとしたが、頭の上から怒声が降った。ニアの肩がもう一度びくりと跳ね上がる。

「こっ、怖いよ」

彼に叱られて首を引っ込めたニアだったが、それでも気になってバイクのサイドミラーをそっと覗き、彼の様子を盗み見る。

(アーヴィン！)

ニアの瞳が大きく見開く。

アーヴィンが掛けていた筈のゴーグルが無い。しかも彼は右手で片目を覆ったまま動かない。覆った右の掌からは鮮血が溢れ出し、肘を伝って流れ落ちる。

急にバイクのスピードが落ちた。アクセルを踏んでいた彼の足が自然と緩んでいるのだ。

前方がまた鋭く光った。幾つものエネルギー弾が、光の筋となって二人に集中すると、そのうちの 하나가ニアが覗き込んでいたサイドミラーに着弾し、ミラーごと木っ端微塵に四散した。バイクの車体へも何発か当たり、ハンドルが大きく取られる。

(このままだと、二人共ダメだよ……どうしよう)

「くっ！」

ニアは半ば自棄になって、アクセルを踏んでいるアーヴィンの足の上から裸足で思いつ切り踏んだ。そして、今まで彼が操作していた様に、両膝の内側に力を入れて、足に体重を掛ける。が、思う様にバイクは傾いてくれない。

ニアは前のめりに立ち上がり、腰をシートから浮かせて体全体を遣ってバイクを傾けた。

バイクは急激に加速しながらチューブ型の通路の壁面を、螺旋を描く様に駆け上がり、天井部を通る。パネル型のライトや指示標識、監視カメラ等をお構い無しに蹴散らした。

攻撃して来るポイントがみるみる近付く。

両膝でバイク本体を挟むようにしてバランスを保ちながら、ニアはハンドルから手を離した。渡された拳銃を言われた通りに両手で構える。

薄暗くてよく判らないが、ゴーグルをしている余裕など無い。

相手は人だ……そう思った途端、怖くなって手が固まり、引金が引けなくなった。

「……駄目！ 出来ない！」

今ここで彼等を倒さなければ、自分達が危なくなる。頭では理解していても、ニアはまともに目標を見据える勇氣さえ出て来ない。

「座れッ！」

アーヴィンは右目を庇っていた手でニアの肩を押さえ付けた。そして、間髪を入れず、腰に挿していた自動小銃で応戦する。

ニアは固まったまま、すくと素直に座った。

正面からの銃撃が一時止むが、後方からの追撃との距離が縮まった。

短く舌打ちしたアーヴィンは、手榴弾を取り出しピンを口で引き抜いて転がした。

手榴弾はタイミング良く爆発する。

「前に人が！ 人が居るよ！」

ニアが悲鳴のように叫ぶ。

数人の警備員それぞれが、銃を撃ちながら通路に出て来ている。

装備が底を尽いて来ているのを読まれていた。

「構うな。真っ直ぐに行け」

「ええーっ？」 ニアは耳を疑った。「そんな事したら、あの人達を轢いちゃう！」

「いいから行け！」

アーヴィンは応戦しながら叫んだ。しきりに時間を気にしている。「よくない！」

バイクは相手の顔が判るくらいにまで近付いていた。人間か、サイバノイドかと言った区別は殆どこの状態では判らない。だが、アーヴィンの言った通りにすれば、それは彼等を轢殺し兼ねない事だ。「そんなの、いやっ！ ニアは、人殺しなんかになりたくない！」

ニアはハンドルを切ろうとした。が、その右肩を血の付いた手で強く掴まれた。白いTシャツが彼の血で赤く滲む。

彼の血を見たニアの表情が強張り、凍り付く。

「奴等の換わりに自分が死ぬぞ！」

「そんなっ、でもっ……でもお！」 恐ろしくなって全身が震え、硬直する。「いやぁ！ みんな避けてええ！」

ニアの叫びが悲鳴になる。

警備員達は、真っ直ぐに突っ込んで来るバイクに怯んだ。蜘蛛の子を散らす様に逃げ出したが、何人かが巻き込まれて宙を舞った。スピードが出ている為、僅かに掠っただけでもかなりの衝撃だ。

「！」

微量の血飛沫がニアの白いTシャツに散った。

「これは……本物の、血なの？」

一瞬、息を吞んで放心状態になる。

「違う！」

次々と執拗に追って来る相手に辟易しながら、アーヴィンは敢えて強く否定した。

一番手っ取り早い方法だ。事実、この忙しいのに、これ以上ニアのお守りは願い下げだった。元より、彼には命の重さについて論じる心算も無い。

ニアのハンドルを握る手がまだ震えている。

「人を……人を轢いちゃった。ニアが……」

バイクの車体を通して感じた鈍い感覚が、今も手に生々しく残っている。

ぞっとした。アーヴィンは人では無いと言い切ったが、果してそれが本当なのかどうかニアには判断出来なかった。あの状況下で相手を殺すかも知れないと判っていて躊躇しなかった彼に対して、恐怖は勿論だがそれ以上に怒りすら覚える。尤も、殺意を持って接してくる相手に対して自己防衛するのは当然の事だ。彼の言っている事は正論ではあるし理屈では判るのだが、どうしても感情が伴わない。

アーヴィンは軽く舌打ちをすると、銃を収めてハンドルを握った。自然、彼の体がニアの上へ覆い被さる形になる。アクセルから足を離し、左足元にあるブレーキを掛けた。

強力な制動が掛かり、バイクが悲鳴を上げて軋む。

体が前方へのめり込みそうになるのを抑えて必死でバランスを取った。ニアは投げ出されそうになったが、彼の両腕でしっかりとガードされている。

ニアは固く眼を閉じて頭を伏せた。

アーヴィンは、バイクの前方を軽く左へ向けた。車体は前方にロックが掛かってドリフト状態になり、右側面を進路方向へ向けて停止する。

ニアは恐々頭を上げた。

目の前数メートル先に、それまでは無かった壁が出現してた。隔壁が降りて来たのだ。

彼等のバイクが停まる寸前に、後方から追掛けて来た二台のバイクが、彼等をもの凄いスピードで追い越し、二機とも隔壁に激突して大破し、炎上する。

進路を塞がれた以上、閉じられた隔壁を解除するより他に術がない。

「此処までだ」

肩で荒い息をしながら、アーヴィンはバイクから降りた。ニアも彼に促されて続く。

不用意にニアはアーヴィンと目が合い、悲鳴を上げた。

右の眉辺りから斜め方向にざっくりと切れている。眼球が無事かどうかは確認出来ないくらいだ。尤も、彼の右目は義眼だと聞いているが……。

ニアは慌てて顔を背けた。

「痛い……さっきからキヤーキヤーと……っせえな。恐怖映画でも見た様な顔するなよ。こっちはなりたくてこうなったんじゃないんだ」

右手で傷口を覆い、顰めっ面をしながらそれでも彼は軽口を叩く
余裕さえ窺える。

「痛く……ない？」

「ばーか。痛てーに決まってンだろ？ お前がそんな痛そうな顔してどうすんだよ？」

一瞬だったが、アーヴィンが生意気そうに笑った様な気がした。
が、顔の右半分が血で染まっているので、それも定かではない。

この人は、本当にカメラマンなのだろうか？ 彼には「怖い」とか、「嫌だ」と言う感情が欠如しているのでは無いのか？ 死にそうな目に遭っているのに、何故精神的に余裕が持てるのだろうか？

ニアは理解出来なくて背筋が寒くなった。そして自分の腕を抱くようにして腕を擦る。

（何でニアはこんな目に遭っちゃっているの？ この人だって……これは映画やTVだけの世界じゃなかったの？ 銃で撃ち合って人やサイバノイドを殺して、自分だって怪我して……もしかしたら、此処で二人共死んじゃうのかも。なのに……普通じゃないよ）

膝がガクガクと戦慄いて鳥肌が立った。

もしかしたら、この人は見掛けが人間だけれども人間ではないのかも知れない。能力者と呼ばれて異端視されているエレメンタルなのかも……とも思った。

ニアは怯えた目でアーヴィンを見上げる。実際にエレメンタルに遭遇した記憶は無いし、エレメンタルがどんな形状体なのか、それすらも知らない。

偶然彼と視線が合い、ニアは思わずビク付いた。

「おい」

アーヴィンは態と乱暴にニアを呼んだ。ニアが自分をどう思っているかは知らないが、少なくとも我を失ってソワソワしているのは判っている。

「少しの間なら、フィールド・バリアが発生する。これで囿になれ」
自分のゴツイ腕時計を外して緑のスイッチを指した。

「えっ？　今、何て言ったの？」

「ucciいち煩いな。船内での使用可能な銃は限定される。奴等の使用している口径なら大丈夫だ。少しの間だけでいい。バイクの盾になれ」

アーヴィンは鬱陶しそうに言った。先程とは打って変わって今の彼には余裕など微塵も見られない。

「こ、口径？　フィールド・バリア？」聞き慣れない言葉にニアの顔が引き攣る。やっぱり彼がさっき笑った気がしたのは、本当に気のせいだったのだと思う。「俺の盾になれ。って言わないの？」

（どうせ、あたしの事なんか知った事ちゃ無いんでしょ？）

「ああ？　俺がンな事言うかよっ！」

ニアの言葉が癪に障ったのか、途端にアーヴィンは輪をかけて不機嫌になった。尤も身長百五十足らずの小柄なニアが、細身とはいえ百九十もある彼の盾にどうすればなれるのか疑問だ。

「オトリ……囧だなんて。しかもバイクの……」

追詰めたと確証を持ったのか、警備員達は正確に撃って来る。その度に、二人は体を竦めて身構えた。どうやら連中は即、射殺する心算では無いようだ。足元スレスレや、身体のすぐ傍を狙って何発ものエネルギー弾が擦過し、二人は軽い火傷を負う。

「早くしろっ！」

動かないニアに業を煮やしたアーヴィンが、苛々しながら一喝する。

ニアは彼の剣幕に気圧されて、素直に指示に従った。バイクの前に仁王立ちになり、教えられたスイッチを入れると、不快なノイズと共に腕時計から半球型の傘の様なシールド・バリアが発生して、ニアの身体の前半分をすっぽりと覆った。

立塞がったニアを狙って銃が乱射されるが、シールドに守られている為エネルギー弾は尽く撥ね返される。しかし、受けた時の衝撃は吸収されたり中和されたりはしないようだ。腕から全身に伝わる衝撃は、彼女へのダメージとなる。受け止めるだけで必死だった。

弾かれたエネルギー弾が兆弾となって、眩しい火花を散らしながら後方へと流されて行く。ニアは顔を背けて萎縮した。

「うーっ、持たないよー」

いつまでもは持たない。ニアは足元をふらつかせて、泣きべそを掻いた。

「あと少し」

アーヴィンは素早く粘着テープを引き伸ばすと、慎重に幾つもの手榴弾らしき爆発物をバイクの車体に貼り付けた。そして、もう一度乗ってしっかりと左足でブレーキを踏み込んだ。そして今度は右足側にあるアクセル部分を、上からテープで貼り付けて、しっかりと固定する。

固定されたアクセルのせいで、エンジンの回転数が高くなった。バイクは制御不能寸前になり、車体が震え出す。

アーヴィンは、アクセル部のテープがしっかりと固定して貼り付いているかをもう一度確認すると、飛び降りざまに爆発物の安全装置を引き抜いた。

バイクはもと来た方へと勢い良く飛び出し、ニアを狙っていた彼等に向かって行く。

間髪を容れず、拳銃で一番手前の隔壁スイッチを狙って撃った。一発目は外れたが、勘を取り戻して二発目に当てる。

隔壁が降りて来るのと、バイクが爆発するのがほぼ同時だった。ニアは、隔壁が完全に閉まる刹那、警備員の何人かが爆発に巻き込まれ、彼等の姿が吹飛ばされる瞬間を目撃し、思わず顔を背ける。アーヴィンは、その光景には目もくれず、正面の既に閉まっている隔壁のロック解除に取り掛かっていた。

＊ ＊

エルフィンが目を覚ました。殴られた所が裂けたらしく、首筋の辺りまで流血していた。

尤も、裂けずに頭部に血の塊が出来る方が命取りになる。彼女は痛みに顔を顰めながら、そっと自分の頭を触った。干乾び掛けて硬くなり、違和感を覚える感触が指先に伝わる。どうやら出血は既に止まっているみたいだ。そして、ゆっくりと目を開けて辺りの様子を伺った。

近くに警備員はいない。いるのは数メートル先の濁った水槽に向かって、何やら作業をしている白衣の医師達だけだ。

マックはどうなったのだろうか？ 実験の妨げになるのか、室内の照明は最低限に絞られていて、彼の姿が見当たらない。

エルフィンエルフィンは眼を細め、息を殺して辺りを窺うが、やはりマックの姿は何処にも無い。

急に胸騒ぎがして、エルフィンエルフィンはスタッフの動きが妙に気になり始めた。彼等に気付かれない様に、静かに起上ると、物陰に身を潜める。

靴底ヒールに仕組んでおいた小刀を取り出し、腕輪バングルから細いワイヤを静かに引き出す。

エルフィンエルフィンは室内の照明スイッチ目掛けて小刀を投げた。

一瞬のうちに、電力が落ちて真っ暗になり、白衣を着たスタッフが慌てる。

間も無くして、室内は予備電源に切り替えられて再び明かりが灯った。

「これ……は……」

スタッフの責任者らしき男が辺りの異変に気付き、後退りする。

不意を喰らった医師達が、右往左往しているほんの僅かな間に、エルフィンエルフィンは四人を黙らせていた。誰一人悲鳴も上げずに事切れている。

「だ、誰だ！ 警備……」

「動かないで！」

凜とした声が響いた。エルフィンエルフィンは素早く男の背後に廻り込んでいた。彼の首には、四人の医師の血を吸った細いワイヤが巻き付け

られている。

「きつ、貴様、こんな事をして……」

「お黙り。貴方もあなりたく無かったらおとなしくするのね。男の子は……彼は何処？」

エルフィンには一分の隙も無い。明らかに手慣れている。男は、エルフィンの外見を侮り、一杯喰わされてしまったのだと後悔した。彼女はマックの手掛りを捜そうと、必死に視線を左右に泳がせる。彼女の視線が止まった先には、マックが着ていたシャツが落ちていた。

エルフィンの反応に気付いた男は鼻で笑った。

「私を殺せば奴も戻っては来ないぞ。まあ、無事に戻って来られるとは限らないがな？」

「どういう事？」

エルフィンは眉を顰めた。

男は濁った水槽へと顎を杓った。

「奴はこの中だ」

言われるままに視線を向けて水槽を見詰めた。微かに向こう側が透けて見えるが、その中には人影どころかそれらしい物も無い。

「嘘」

「嘘などではない。これから奴の身体を再構築する所だ。だが、先程の停電で何らかの悪影響が出なければ良いのだがな」

エルフィンは、状況が把握出来ないでいる。

「停電？ ……私が遣った？」

エルフィンの指先の力が緩んだ。

男は彼女の隙を見逃さない。素早く手を伸ばして警備員の招集スイッチに触れた。

気が付いた時既に遅く、エルフィンは責任者の男を盾としていながら、警備員達の銃口に取り囲まれてしまった。

「手を離れたまえ。私は忙しいので失礼するよ」にやりと笑って首のワイヤを解くと、男はエルフィンから離れた。「社長のお目に留

まっていたので生かしておいたが……大切なスタッフを手に掛けてくれるとは。この代償はどうしたものかな？」

半ば諦めて両手を挙げたエルフィンに、警備員の一人が壁際へ行く様にと銃を薙ぎ払った。

エルフィンは唇を噛んだ。ゆっくりと警備員の輪から出て、壁際へ近寄る。

彼等の引金に力が籠った。

「！」

耳を劈く銃声に、エルフィンは眼を硬く閉じて顔を背けた。

止んだ銃声に目を開くと、すぐ傍の壁が数箇所熱を帯びて歪み、蒸気が上がっていた。

「おいおい、ちゃんと狙えよ」

投げ揃った警備員の声がした。

「いやあゝ、こんな美人すぐに殺すのが勿体なくって」

引金を引いた一人がふざけて答える。

彼等から馬鹿にされたのだと思った瞬間、彼女の頭にカッと血が昇り全身が戦慄いた。

「戴いてから、殺ってしまうか？」

薄気味悪い下衆な笑いがエルフィンを取り囲む。

「殺るのなら、一思いに殺れば？ それとも出来ないの？」

エルフィンが噛み付いた。過度の緊張で先に気を失いそうだ。

「言ってくれるな……よおし。次は外さねえ」

舌舐擦りをして、一人が銃を向けた。彼に従い、全員がエルフィンに向かって再び銃を構える。

突然、警備員の背後で医師達が騒ぎ出した。

警備員達は何事かと振り向き、エルフィンから注意が逸れる。

彼女はその隙を見逃さなかった。一番手近に居た警備員の鳩尾みぞおちを蹴り上げ、男の体勢を崩すと、素早く自分の足を一步前に交差させて身体を翻し、顎に強烈な廻し蹴りを一閃させた。

男は白目を剥いて倒れる。

すかさず彼から銃をもぎ取ると、素早く連射モードに切り替えて盲滅法に撃った。悲鳴と血飛沫が上がる。だが、彼等もミューズ社の警備員だ。銃弾を受けていながら、応戦しようとする。

引き金に手応えが無くなって弾切れになった。

「もう、ダメ！」

エルフィン悲鳴が銃声と被った。

彼女は銃を投げ出し、両手で耳を塞いだまま顔を背けて座り込む。彼女を仕留めようと躍起になっていた警備員達の後方で、別の新たな動きがあった。水槽の水面を大きく膨らませて人工重力を無視して出て来たソレは、彼等の銃弾を阻止するように素早くエルフィンの前に廻り込むと、水状のカーテンとなって立ち塞がった。銃弾はその水の壁に尽く喰い止められ、金属特有の乾いた音を立てて不自然に彼女の足元に転がる。

そしてソレは、なおも銃撃して来る警備員達に襲い掛かった。今度は形状を変え、大波となって押し寄せる。

「はっ、所詮水だろう？」

軽口を叩いた一人の上半身がソレに触れた。彼の体は、鋭利な刃物で切られたようにスッパリと両断されていた。ワンテンポ遅れて多量の血飛沫が勢い良く噴出する。

あっという間に警備員達は沈黙した。

何が起こったのか判らなかったエルフィンは、肩で息をしながら訝しみ、恐る々顔を上げた。

目の前に痩せこけた裸の子供の背中が見える。背骨と肋骨が青白い肌から痛々しく浮き出し、乱れがちな呼吸をする度に大きく上下している。両手を広げて立って居るには居るのだが、それでも限界という感じだ。

「ぼっ、馬鹿な！ 早過ぎる！」

水槽の陰に身を潜めて難を逃れていた責任者の男が、目を見張って口走る。

「マック……なの？」

「や、エルフィ……間に合ったみた……うぐっ！」

言い掛けたマックは強烈な吐き気に襲われ、両手で口元を押さえた。苦しさに体が大きく折れ曲がり、辺りの床に鮮血が散った。両膝を突いて崩れ掛かる。耳障りな呼吸音が大きく聞こえ、苦しそうに喘いでいる。

「折角、あと少しで回復させて遣れたと言うのに。愚か者が……お前は力を行使することで、不調になる因果関係がまだ解らんのか？」騒ぎを聞きつけた社長が、何人もの警備員を従えてドアの外に立っていた。そしてフロア内に倒れている警備員や医療スタッフの遺体を見廻した。

社長は至って平静であった。まるで、こうなる事を予測していたかのようだ。

「お前には、元々特殊な能力が備わっていたのだよ。双子の娘との、精神共鳴などという生易しいものではない力が。医局長の山崎に処分せずに預けたのもその為だ」

エルフィンは、自分の腕でマックをしっかりと抱き留めた。そして、多量の吐血で顔面蒼白になっている彼を気遣い視線を落とす。

マックの表情を窺ったエルフィンが息を呑んだ。

顔色とは対照的に、社長を見据えている彼の眼には、獣の様な一種狂気に似た光を放っていたからだ。

＊ ＊

僕は、あの液体の中で、何人もの僕やニアと出会っていた。それは怨念と言うか、残留思念の様なものだと思う。

《戻ッテ来イ！　オ前モコノ中ニ来ルンダ》

《還ッテ来イ！》

《此処ガ、オ前ノ戻ルベキ処ダ》

何処からか、何人もの僕の声が聞こえた。その声は生きている者

の総てを妬み、憎んでいる様に思えた。

『誰?』

《僕ハ僕ダヨ》

クスクスと何人もの僕と同じ声が笑う。

『……嘘だ!』

此処には僕だけしか居ないのに。そう思った瞬間、腐敗した何本もの手が現れて、僕の身体や手足を捕まえ、深い闇に引き摺り込もうとする。在る筈の無いイメージが、恐怖に捕らえられている僕には現実であるかのような錯覚を起こす。

『君達は……?』

過剰の遺伝子操作や、何らかのミスによって植物状態になった彼等は、そのまま何年もかけて体を培養されていた。自分の為ではなく、一人の男の為に。でも、ともに育つことは叶わない。彼等は本来あった姿を失い、エレメンタルと呼ばれている「ヒトではないモノ」に変貌して行く。それでも猶、亡骸になっても別の目的で新しい実験体となって……

《タスケテ……》

《コンナニナツテマデ生キタクハ無イ》

《何故才前ハ生キテイル?》

《タスケテ……》

『嫌だ!』

彼等の叫びが頭の中で何度も響いた。僕は耳を塞いで硬く眼を閉じ、何度も何度も頭を振った。それでも声が聞こえて来る。

『何故こんな実験を? ……こんな事って……』

(許セ……ナイ……)

全身が軽く麻痺した。

僕を抱き留めるエルフィンの力が強くなる。

「ううう……」

荒い息をして唸りながら、僕はエルフィンの腕を振り解こうとも

がいた。

『気』が昂った。駄目だ。この感覚には覚えがある。

僕は自分を抑えようとして頭を抱えた。

幻覚が見える。夢の中で見た何人ものエレメンタル達が、いつの間にか僕を取り囲んでいる。そして、彼等の顔が恐怖に歪む。

《化物ハオ前ダ!》

口々にそう言って、僕を指差す。

(違う! 違う! チガウ!)

「チガウ!」

僕はエルフィン腕から逃れようと暴れだした。

「どうしたの? マック?」

驚いたエルフィンが、髪を振り乱して僕をきつく抱締める。けれど、僕は彼女の想像していた以上の力で大声で喚きながら必死にもがいた。まるで錯乱状態だ。

社長の目が細くなった。手には拳銃が握られている。

「気でも触れて言葉を忘れたか? どうした、私が憎いのではないのか」

「きゃっ!」

エルフィンが僕に突き飛ばされた。力で振り解かれた訳じゃない。

『気』によって撥ね飛ばされたんだ。

実験プラントを制御していたコントロールパネルが、僕の『気』に反応してショートした。あちこちで火花が激しく飛散する。傍にいた医療スタッフが、慌てて避難した。

彼等が避難するのを待ち受けて居たかのように強度の弱い水槽から、片っ端に亀裂が入って壊れて行く。

「何? どうしたの?」

頭を抱えたまま蹲って動かなくなった僕と、次々に壊れて行く水槽を交互に見て、エルフィンは動揺を隠せない。

僕が顔を上げて社長を見詰めた途端、社長の指が動いた。

「!」

僕の体が一瞬、感電したように仰け反る。

「マック!」

崩れ掛かった僕の体を支えようとしたエルフィンの顔に僕の血が散り、彼女が悲鳴を上げる。

僕は最期の力で目の前にいるサイバノイドの社長の『気』をトレースした。

幾らサイバノイドだって、I・Dをダビングしなければこの短時間で此処に遣って来られる筈は無い。この船の何処かに、I・Dの持ち主が居るんだ。
オリジナル

(……居る。この船の中に、彼のオリジナルが)
(ヤバイ、ヤメロ。ヤツニ喰ワレル)

気のせいかもしれないけれど、頭の何処かでもう一人の僕の声が聞こえた。深追いするのがとても危険だという事くらい、何となく解る。でも構うもんか。僕にはもう与えられた時間は残っていないんだ。

社長はしまったという表情で僕を見た。僕が何か危害を加えるかも知れないと、咄嗟に危険を感じたからだろう。

「社長、本社から……」

彼の背後から、秘書らしき女性が小声で耳元へ囁いた。報告を聞くと、再び忌々しそうに僕達を見下ろす。

「私はそいつを評価していた心算だった。が、言いなりにならぬと言うのなら止むを得ん。能力は惜しいが、利用価値が無い。諦めよう。そいつの意識があるうちに別れを惜しんでおくのだな」

そう言い棄てると、フロアを見廻して声を張り上げた。

「生き残った者は、各自退出だ。フロアR・3Cは、準備が整い次第廃棄する」

室内は僕とエルフィンの二人つきり。そして、既に廃棄されるこ

のフロアは、総ての電源が落されて真っ暗だった。

「エル……フィン……」

僕は倒れ伏したまま力無く彼女の名を呼んだ。暗闇の中、手探りで彼女の気配を辿って見る。もう、僕には体を起こす余裕さえ残っていないかった。

床が一面に濡れて生暖かった。それが僕自身の血で出来ている事ぐらい判っている。

「……寒い」

体温の低下と一緒に、血圧もどんどん下がって行くのが自分でも解る。撃たれた痛みや手足の感覚はもうとつくに感じられなくなっていた。

「マック、マック？」

エルフィンも、僕の気配を捜している。

お互いの指先が触れ、エルフィンは僕の腕を手繰り寄せる。

エルフィンが手探りで僕を抱き起こし、ヘアピンに内蔵されていた小型灯を点けた。真っ暗だった辺りがほんのりと色を取り戻す。

僕の血を浴びた彼女の顔が目の前にある。それでも彼女は綺麗だと思った。

「良かった……無事、だった……ね」

「黙って。貴方撃たれて……」

エルフィンが言葉を吞んだ。そして僕から視線を外す。

「う……」

彼女の微かな啜り泣きが耳に届いた。

「泣、いて……いる、の？」

「ち、違うわ。な、何言ってるのよ。そんなのじゃ……うっ……」

気遣って必死に涙を堪えている彼女の姿に、僕は呑気に心を奪われてしまった。僕はもうすぐ死んでしまうし、此処は間も無く船から切り離される。一刻でも早く彼女を此処から脱出させないと……彼女を僕と一緒に死なせる訳にはいかない。

生きていて欲しい。

そう思った時、それまで重く苦しかった身体が嘘の様にすうっと楽になった。

「今度こそ……ダメ……かな？　でも中々、死ねない……ものだね」
軽口を叩いてみたけれど、それが空元気だって事くらいお互いに解っている。「ちえ……ちつとも、カッコ……つか、ない……や」

少しでも彼女を安心させようと作り笑いを試みるけど、顔の筋肉が全く言う事を聞いてくれない。

「何言ってるの。此処から出て行くの。一緒に……行くのよ」

エルフィンは、僕の血で染まった震える両手で、僕の手をしっかりと握った。異様に冷たくなった僕の手に、驚きを隠せないでいる。

「早……く、此処から、逃げて……ニア、生きてた。生きて……るよ。解るんだ……双子、だ……から。エルフィ、ニア……お願い……」
僕は彼女に出逢えて嬉しかった。そして同じくらいに悔しかった。こんな……こんな処でエルフィンを残したまま別れるだなんて……それに……脳裏に今までのクラスメイトや葵さん。ニア……そしてエルフィンの顔が次々と浮かんだ。

（……もっと皆の優しさに触れていたかったよ）

急速に視界が狭くなる。

不意にエルフィンの手から、僕の手が滑り落ちた。

＊ ＊

「？」

アーヴィンの後姿を追い駆けながら、ニアは何かを感じて振り返り、足を止めた。

ニアの様子にアーヴィンは気付いて振り返る。

彼の右目はバンダナで覆われていた。ニアの強い要望だったからだ。

アーヴィンは立ち止まって時計を見た。頻繁に見る回数が多くなったのは、潜入してからの時間が予定よりも長くなってしまったか

らだ。そして、通信機機能も付いているらしい腕時計に、首を傾げて耳を寄せている。

「どうした？ ニア？」

「う……ん」上の空の生返事。 「何だろう？ 胸がドキドキする……」

それが悪い予感なのだから、猶のこと気に掛かった。

第7話 能力

連邦の駆逐艦主砲が一斉に火を噴いた。目標は、大型宇宙船スター・ミューズ。勿論威嚇射撃ではあるが、初期停止警告を無視したスター・ミューズに対して、軽度の被弾が科せられる。

連邦第二十五巡洋艦雷轟らいこうは、二隻の駆逐艦を伴ってスター・ミューズを包围していた。

幾ら相手が大手企業の大船とはいえ、戦艦一隻で通常ならば事足りていた。が、問題は彼等の航行している宇宙域にあった。この辺りの宙域は、頻繁に海賊が出現する危険区域だったからだ。

スターミューズの船体へ、H・Dで逃走しないように牽引ビームが掛けられる。

「艦長」

その声に、二隻の駆逐艦へそれぞれ指示を出していた艦長が振り返る。

「マスコミの船です」

「来るのが早過ぎる。この宇宙域を何処だと思っとなんだ。報道管制はどうした？」

「M・780実行中です。が、間に合いません」

艦長は、低く唸った。

「連中を退らせろ」

「はっ」

突然、艦内に異常を知らせる警報が割れ鐘のように鳴り響いた。

「艦長！ 本艦の第五砲塔が勝手に……誤作動しています。このままでは報道陣に……」

状況を報告する声が、悲鳴になる。

「第五砲塔のエネルギー遮断！ 報告！」

「解析中！ ……解除コードが艦外部からロックされています」

「外部からのロックだと？ 馬鹿な、軍のコードをか？」

艦長は信じられないという表情で唸った。

「駄目です」

「間に合いません！」

「艦長！ 左舷より多数の機影確認……海賊船です！」

「何だと？」

艦内が混乱している最中、非情にも誤作動した第五砲塔は、まるで狙った様に報道関係者達の乗っている何隻もの船に向かって放たれた。

連邦軍の誇る強力なエネルギー波が、その中の一隻を呑み込み、クルーザーが四散する。付近にいた何隻かが巻き添えを喰らって誘爆し、被害は更に拡大した。

「な……何と言う事だ……」

艦橋に居る誰もがメインスクリーンに映った光景を、固唾を呑んで見守った。

「海賊船！ 本艦射程距離に到達！」

「駆逐艦タテマは、そのままスター・ミューズに。本艦と駆逐艦ハリアは、迎撃体勢！」

＊ ＊

船内の照明が一斉に消えた。足元から突き上げられる様な強い振動がニア達を襲う。

船体が大きく右手方向へ傾いた。

重力制御装置に異常が発生したらしい。二人は急にふわりと身体が浮いて、体の自由が利かなくなる。

左右の床の非常灯が灯り、船内はひっそりと沈黙する。

「きゃ？」

ニアは体の何処かで重力を捜そうと、全身に力を籠めて必死になって手足をばたつかせた。

アーヴィンは無重力に慣れているのか、少しも驚かなかった。初めての無重力にパニックを起こしているニアを見兼ね、彼は通路の壁を軽く蹴ってニアの手を引いて遣るが、ニアは自分の身体の上下感覚が保てずに猶も必死にもがいた。

「飛んで火に入る……か？ 威嚇にしたって、荒いなあ」

アーヴィンは落ち着いて他人事の様にした。彼は既に、連邦軍の戦艦にスター・ミューズが拿捕されている事を承知している様子だ。

「どういう事？」

ニアがアーヴィンの右腕にしがみ付いて小首を傾げる。

「ああ？ 大方、消したい奴等がこの船の中に居るってコトかな？」
通路の手摺にニアを掴まらせるようとニアを引き離しながら、鬱陶しそうに言った。

「誰が？」

「さあな。お前達じゃねーのか？ オイ、ひつつくなよ」
にべも無く言い放つ。

「何で？」

ニアは不安を隠し切れない。彼の腕を抱え込んだまま動けないでいる。

「俺もだろうけど……ま、ミューズ社もかな」ニアの様子に慌てて付け加えた。「……いや、ミューズは別格か」

やや、間があって訂正する。

「どー言う事？」

「無いと困るからさ。社長が居なくても」

「……？」

「お前の傷、もう完治しているだろ？ 他の企業が開発している治療薬にはこれ程の効果は無い。そういうコトさ……解んないのか？」

「？」

「子供にはまだ解らなくて良いさ」

そう小さく呟いた。ニアの表情を読み取って、アーヴィンは続け

るのを止めにする。

(マック、何処だろう?)

今まで、何度も心の中で呼び掛けているのに、全く反応が無い。こんな事は初めてだった。

「……今のうちだ。行こう」

アーヴィンは、銃の弾倉カートリッジを交換した。

船内は、先程の連邦からの砲撃を受けてから、ひっそりと沈黙している。

低いモーター音が幾重にも唸って聞こえている。船内での停電は依然続いていたが、この区域だけは意図的に管理されていて無事の様だ。重力もある。それでも、異様な程に薄暗い。ニアがマック達と離れ離れになったラボと同じく、必要以上の光源は施されていないみたいだ。

そこにマックが居るとは断言出来なかったが、既に生命反応が確認出来ていた。二人は念の為に潜入する事で意見が一致していたのだ。

「寒〜い。まるで、冷蔵庫の中みたい」

船内の設定温度も他と全く違っている。薄着姿のニアは両腕を組んで大袈裟に足踏みした。アーヴィンから借りているシャツに、ベルトで不自然にギャザーが撚った短パンツ。――これは裾が長いからと、彼が止めるのも聞かずに切ってしまいひと悶着あったワケアリの代物だ。そして足元に至っては素足だった。

「ふうーん、冷蔵庫……ねえ。俺には遺体安置所に思えるけどな」
何気無く言った言葉に、ニアの髪が逆立った。

「いっ? 今、何て言ったの?」

「あ、いや……何でも無い。気にするな」

アーヴィンは慌てた。

「気にするよお!」

ニアは、涙眼になって怒り出す。

アーヴィンは銃を片手に、こっちだと手招きした。
「っ！」

ニアが傍に来るのを確認すると、アーヴィンは眼を細めて顔を顰め、まるで何かの痛みを逃がす様にゆっくりと深く息を吐く。

「どしたの？」

「べ、別に。ただ、昔の古傷が痛む」

そう言って、右肘を左手で庇う。

ニアは不思議そうにアーヴィンを見上げた。

彼女の視線に気付いたアーヴィンは、ふと表情を和らげる。

「見た目には傷が治っても、深い傷だと傷口が痛みを覚えてる。

当の本人が怪我をした事さえ忘れていても、ちよつとした環境の変化に反応するんだ。この腕の痛みは、もう何年も前に受けた傷だ。

適切な今時の処置とやらをしていればこんな厭な思いをしなくて済んだのにな」

そう言って、疼く痛みに再び顔を顰めた。

「ふうん」

「あれ？」

アーヴィンは首を傾げた。

「『年寄りっぽい』とか言って、茶化さないんだな？ お前なら言うと思ったのに」

予測^{あて}が外れて調子が狂う。

「痛いんでしょ？ 顔の傷も、その腕も」

「あ？ ああ」

「アーヴィンここに来る前に言ったよね。『場合によっては引き返す事も必要だ』って。そんな怪我してるのに、どおしてニアに付き合うのよ」

「あのな」アーヴィンは努めて穏やかに言った。「そりゃ、お前に関しての事だ。俺には当て嵌まらねーよ」

「何で？」

ムツとなる。

「お前はまだ子供だろ？　ンな危ない橋を亘る必要なんて……」

ニアの平手が飛んだ。アーヴィンの左頬が赤くなる。

「子供、子供って……」

言って欲しくなかった。

ニアは彼を殴っておいて、泣きべそを掻いた。そして、アーヴィンが殴り返すか怒鳴って来るだろうと思って、堅く眼を瞑り身構える。

「……？」

ふわりとニアの頭に暖かいものが乗った。一瞬、びくっとニアの身体が反応する。

それがアーヴィンの左手であることに気付くのに、さほど時間は掛からなかった。

ニアの頭に手を載せたアーヴィンは、軽くくしゃっとニアの髪を握る。

「それがお前達の特権。だろ？　第一、俺は仕事で来ている」

「アーヴィン……」

ニアは彼を見上げた。

彼の蒼い瞳には怒気は全く窺えない。むしろ、今迄で一番穏やかだとニアは思った。

「……ごめん」

ニアは気不味そうに視線を逸らすと、今にも消え入りそうな小声で言った。

「ああ？　何か言ったか？」

耳に手を当てて首を傾げる。彼が態と聞こえない振りをしているのが見え々だ。ニアは頬を膨らませて涙ぐむ。

Ⅱ「アーヴィンは……意地悪だ」

ニアは小声で呟いた。

「あの奥だ」

小型のセンサーで生命反応を調べていたアーヴィンは、そう言つて顎を杓つた。

仄暗い通路の様な所は、十数メートル先の袋小路で行き止まりになつている。通路の幅も五、六メートル程しかない。

アーヴィンは、センサーのスイッチを入れた時から妙な表示が出ているのに気付いていた。そして、胡散臭そうな顔をして眉を顰める。

正面奥から強い反応が出ているのは納得出来る。だが、そこへ行くための通路の両脇からも微弱ではあるが生体反応が認められた。薄暗い通路脇へ目を凝らしてよく見ると、子供一人が身体を屈めて入れる位のボックスらしき物が、左右に整然と並んでいる。これが何を意味するのか、薄々彼には判っていた。

アーヴィンはその事をニアに告げずに黙ってセンサーのスイッチを切ると、代わつて精度の高そうな小型カメラを廻し始めた。

「ふうーん」

「何だよ？」

口を尖らして、突っ掛かった。

「ホントに仕事やってんだ」

「あら……」

アーヴィンはコケた。

アーヴィンがカメラを廻し始めてから間も無く、二人は何かの気配を感じて後退った。

正面の巨大な生命維持装置から繋がっている幾つもの配線の隙間から、ちらちらと青白く発光しているモノが、見え隠れしていたからだ。

息を詰めて凝視する。

それが誰なのか、二人はすぐに判った。

「マック！」

ニアは叫んで駆け寄ろうとした。その腕をアーヴィンがしっかりと掴まえる。

「待て！」

「あにすんのよ！ 離して！」

「よく見てみる！ あれが人か？」

アーヴィンは、廻っていたカメラの画像をリプレイで拡大し、ニアの目の前に突き出した。

彼の姿は実体ではなく、薄く透き通って見えていた。

「あれはマックよ！」

「落ち着け。バーチャル映像かも知れないし、罠って事も……」

ニアは、アーヴィンが制するのも聞かずに彼の手を振り解いた。そして、マックの元へ 駆け寄ろうと、室内に走り込む。

途端、室内のセキュリティが作動した。恐らく、このシステムも他のシステムとは独立しているのだろう。

室内上部壁面よりせり出して来たレーザーが、一斉にニアを襲った。

「ニア！」

アーヴィンの見守る中、ニアは信じられない速さで反応した。

身体を前方へと投げ出しながら、借りていた拳銃を素早く両手で構えて撃つ。

何が起こったのか判らないまま、アーヴィンも援護する。

レーザーは簡単に沈黙した。

「……嘘だろう？」

改めて、ニアの並外れた反射神経と、目標を正確に捉えていた能力の高さに驚いた。ニアと初めて会った時もある素早い身のこなしに翻弄された。正直、これが人間なのかと自分の目を疑いたくなった程だ。

ニアが起き上がって、再び駆け出した。

「あんの馬鹿！ ……戻れッ！」

何が仕組まれているか判らない。それよりも、オープンスペース
になっているここでは、身を隠す事が出来ない。

けれどニアはアーヴィンの呼掛けにも耳を貸そうとはしなかった。
「きゃん！」

一瞬にして、ニアの身体が床に叩き付けられた。
フィールド
「力場？」

アーヴィンは鋭く舌打ちした。銃を力場の発生装置に向けて連射
フィールド
するが、発生装置は力場の向こう側にあり、銃弾は総て手前で弾か
れて届かない。それよりも、このセキュリティ全体を解除した方が
ニアを早く助けられると思った。

ニアは、物凄い力で床に押し付けられている。

全身に力を込めて必死にもがくが、みしみしと不快な音を立てて
身体が軋み始める。肺が押え付けられて息が出来ない。不穏要因を
排除する目的のセキュリティに手加減は皆無だ。

「ニア！」

（あああ、……ク、マック！）

潰されそうになる。ニアは、動けないまま心の中でマックを呼ん
だ。

「何処だ？ セキュリティ解除は何処にある？」

アーヴィンは慌てて室内に視線を走らせた。その視界に、あの発
光体が飛込む。

マックだと思われる発光体は無表情のまま、ゆっくりとこちらを
振り返った。その彼の眼には、既に生氣は感じられない。

アーヴィンの喉が鳴った。一瞬で彼に惹き付けられ、思考を絡め
取られて行く気がする。

発光するマックの背後から、生物の様な黒い触手が現れた。幾千
ものソレは、禍々しさを放ちながら彼の体にゆっくりと撒き付いて
行く。まるで、彼を摂り込んで行くみたいだ。

アーヴィンは、その光景に釘付けになった。カメラの微調節をし
ながら、夢中になって撮影する。

（マック……）

辛うじてニアの頭が動いた。

激しい頭痛と耳鳴り。眼の前が霞んで揺らめいているのに、マックがどうなっているのかが不思議とニアには見えていた。

（イヤだ！）

ニアの身体が軋む音とは別に、パチ、パチという乾いた音が鳴り始める。ニアの身体の所々に青白い閃光の様なもの走り始める。

マックの身体が完全に摂り込まれる刹那、我を取り戻したのか、彼は一瞬抗った様に見えた。しかし、マックの姿はもうそこには無い。

（イヤだよう……）

涙でぐちゃぐちゃになったまま、なす術も無くニアはマックを見送った。彼女の視界からマックの姿が消えてしまった。

（イヤだよう。マック、あたしを置いて行かないで！）

たった一人の身内が居なくなってしまった。失意に打ちひしがれたニアは、力場から逃げ出す事さえ叶わずに大粒の涙を流して泣き出した。

ニアが消え入りそうな意識の中で、はっと我に返った。

アーヴィンがマックを撮影しているのを知り、かっと頭に血が昇る。

（止めて！ マックを撮らないで！）

限界が来たのだろうか、身体が熱い。

ニアの身体に異変が起こった。

マックの同様、ニアの身体も発光し始める。しかし、彼の身体を取り巻いていたような、穏やかなものではない。直視出来ない程の突き刺すような強烈な光だ。

ニアから離れた光の一部は、まるで地上から放たれた雷のように室内上部へと駆け上がり、幾つも設置されていた力場発生装置を一瞬にして焼き尽くした。

アーヴィンの手にしていたカメラも光に包まれ、慌ててカメラを

放り投げる。

カメラは間髪いれずに爆発した。

「止せっ！」

ニアの身体から放たれた光は、眩い強烈な閃光となって、辺り一面に襲い掛かった。

第8話 過去

ニアは意識を失ったまま、医療機器に囲まれて眠っていた。

アーヴィンは黙って銃口をニアに向ける。鈍く重い光を放っている銃口にはサイレンサが予め装着されている。

（本気なのか？ なら、何故助けた？ 一度までならまだしも……放っておけば確実に手を汚さずに殺せたのに……）

自問する。

（何故、助けた？）

安全装置をゆっくりと外す。そのまま引金を引けば簡単な事だった。

しかし、躊躇いが引金に掛けた手を張り付かせて、動けない。

次第に銃口が小刻みに震え出す。

（ゲームのキャラクターなんかじゃ無い。リセットすれば大丈夫だとも思っているのか？ ニアをまたあの溶液に漬ければ元に戻るとでも、俺は……俺は本気で信じているのか？）

彼の調査が事実ならば、ニアはセンター医療局で実験動物の様に幾度と無く殺害され、蘇生されていた事になる。それとも記憶をダビングされて「ニア」を引継いだ別の「ニア」なのかも知れない。まるでゲームの世界だ。

（馬鹿な……そんな事は無い）

無意識に首を振る。額に汗が吹き出した。

（ニアを殺して終わりにするのか？ 不穏要因は何でも消してお終いか？ 俺が今まで遣って来た様に、同じ事を繰り返すのか？）

「……違う」

呻く様な声が小さく漏れた。

（俺の手でニアの悪しき連鎖を絶ち切ってやるのか？ ニアがそれをいつ願った？）

アーヴィンは首を振った。もう一人の自分に苛まれる。

（自分はどんなんだ？ 『グレネイチャ』と呼ばれ蔑まれ続ける自分分は？）

（そうさ……こんな思いは俺達だけで十分さ。だから……）
（だから殺す……のか？）

不意に眠っている筈のニアの眼から、涙が溢れた。

アーヴィンの緊張していた何かが切れた。ゆっくりと肩が落ち、銃口がニアから逸れる。

「……ん？」

乱暴に目元を拭かれてニアは眼を覚ました。

「よお、お目覚め？」

「……アーヴィン？」

日焼けした様な赤銅色の肌に短い銀髪。吸い込まれそうな蒼い眼の持ち主に見覚えがあった。

そこにはニアが見る事の無かった、ニュートラル状態の彼の姿があった。

尤も、顔の右半分は包帯で覆われていてあまり表情は窺えないものの、外見さえ除けば何処にでも居そうな普通のお兄さんといった雰囲気だ。ニアが気を失う前までの、銃を持って殺気立っていた彼と同一人物だとは到底思えない。

「ニアは……あにゃ？」

起き上がろうとして、起き上がれなかった。よく見ると自分の身体はあちこち包帯でぐるぐる巻きだ。左足に至っては固定され、吊り下げられている。どこも痛くは無かったが、感覚も無い。

「どおして？」

ニアは訳を求める様にアーヴィンを見た。

彼の顔半分は勿論、右腕を首から吊っており、全身至る所を包帯とガーゼで処置されていた。アーヴィンの方がニアよりも悲惨な状態だ。

「此処か？ 此処は軍の病院船。」

「病……院？」

ニアは混乱した。必死で何があったのかを思い出そうと記憶の糸を手繰り寄せる。

ショックによる、一時的な記憶喪失だろうか？

アーヴィンは、事の顛末を言おうか言うまいかと迷っていた。

＊ ＊

『止せっ！』

アーヴィンの制する声も、ニアの許へは届かなかった。

ニアが放った強烈な閃光は、容赦無く辺り一面に襲い掛かり、飛び散った火花で誘爆を引き起こす。

腹部に響く様な鈍く重々しい音がして、通路脇にあるボックスのロックが解除されて、扉が次々と跳ね上がった。もう片方の下部の扉から、大量の水溶液に交じって人の形をした幾つものモノが流出し、見るうちに通路を埋め尽くす。

『な……？』

アーヴィンは息を呑んだ。

一面の炎に照らし出されながら流出して来たモノは、年齢こそ様々だが、皆一様にニアの容姿を兼ね備えていた子供達だった。しかも、通路の奥へ行くに従って人型はその姿を失い、異形のモノになっている。

『エレメンタル』頭の中で、この言葉が浮かんだ。

代表取締役アレン・D・ロディナル。彼は最後まで自分の本当の体（ノーマルである事）を諦める事が出来なかったのだろうか？

ノーマルに固執する余りの結果がこれなのか？

ノーマルとエレメンタル、サイバノイドといった人種差別が過激化して行く一方の背景を考えれば、彼がノーマルに拘っていた気持ちも強ち解らないでもない。

もしかしたら、オリジナルの彼はノーマルでは無かったのかも知

れない。オリジナルがエレメンタルだったとしたら……そんな疑問すら今のアーヴィンには容易に思いつく。

自分であれば、被験体は御免だと思った。実験の結果、何十、何百人と同じ自分が現れる事を想像するだけでおぞましくなる。しかも自分自身が実験材料なのだ。

どういう神経をしているのだから気が知れない。

尤も、自身の一部を提供しての臨床実験に、法規制だの被験者に対する人権などと言うものは皆無だ。訴訟を起こす者が不在なのだから、研究はずっと効率良く進んでいた事だろう。恐らく、あの状態ではかなり危険な処まで来ていた筈だ。その位はアーヴィンにも想像出来る。

* *

「どーしたの？ アーヴィン？」

急に押し黙ってしまった彼の顔を、ニアが無邪気に覗き込んだ。

「え……っ？ うわっ？」

すぐ目の前に、ニアの顔のアップがあった。今にもキス出来るくらいに超至近距離にアーヴィンは慌てて顔を引き、赤くなる。

普段の彼なら、相手がこんなに接近していたのにも関わらず、気付かなかった等と言う事は在り得なかった。全くの不覚だ。

「やだなあ、アーヴィンったら、照れちゃってえ」

「はあ？ 誰が照れるって？」

どうやらニアは、アーヴィンが自分の事を意識して赤くなったのだと勘違いしたようだ。

「だからさ……」

「オースティンさん、貴方に面会の方が来ておられますよ」

看護師の声に、ニアの誤解を解こうとして言い掛けたアーヴィンは、はっとして振り返った。

入口に立っている彼女の後ろに、白髪交じりの小柄な老紳士が控

えている。

「……はい」

アーヴィンが抑揚の無い返事をするのを見届けると、老紳士は部屋を出るようにと眼で合図を送って来た。彼は黙って頷き、素直に従う。

「まずは、その物騒なものを此方に渡して貰えんか？」

穏やかだが、毅然とした物言いだ。

ベンチに腰掛けたまま、アーヴィンは黙って後ろに隠し持っていた銃を取り出した。銃口を相手に向けないよう、慣れた手つきで持ち換えて差し出す。

アーヴィンは妙に大人しい。それどころか、彼はこの老紳士に対し、ある意味萎縮している風にも見える。

老紳士は銃を受け取ると、自分の背広の内側に隠した。そして、何事も無かったかのように自動販売機の前に立つ。

「コーヒーはブラックで良かったかな？」

アーヴィンは俯いたまま頷いた。

老紳士は、アーヴィンに紙コップに入ったコーヒーを手渡すと、一人分程少し空けて彼の隣に座った。

「病院船の展望室なら人気はあるものだが、流石に軍の船だとそうはいかんようだな？」

そう言って微笑しながら、目の前のガラスに映っているアーヴィンを見た。

俯いたまま、その彼の表情は見取れないが、コップを持つ手が微かに震えている。

「あれから四年……か。また、豪く派手に遣ってくれたな？」

「……」

『自分ではありません』と、喉元まで出掛かった言葉を呑み下した。ニアの存在はアーヴィンの意図していた結末とは大きく違っていた

からだ。

「自分が生きていた事を本当にご存知なかったのですか？　自分は

あの時、岬さんに……」

タカジヨウ

「高城は『既に手遅れだった』との報告をわしに遣しおった。万が一、お前が生存していたと発覚し、最悪の事態になった場合を想定しての、わしへの配慮だろうが……知らなかったとはいえ部下にそこまでフォローさせていたとはな……上司としては失格だ。いや、それよりも委員会の採決を承諾してしまった時点でわしは最低の失格者だ」

老紳士は大きく溜め息を吐くと、視線を落して自嘲する。

「そんな……岬さんを遣したのは貴方だ。あの人が出来なかったら自分とはとっくに……」

「身元が判るような事を何故遣った？　いや、何故ここに居る？

以前のお前ならこんな事は無かった筈だ」

「……以前の自分……ですか……もう時効って事にはならないですかね？」

軽口を叩いて横目で老紳士の出方を窺ったが、彼は小首を傾げて片方の眉を少し上げただけだ。

アーヴィンは顔を上げて、目前に広がる宇宙空間を見据えた。そして、ゆっくりと瞼を閉じる。

「お前には捜査妨害、機密事項のハッキング等の容疑が掛かっておるぞ？」

血の気が失せていたアーヴィンの顔に緊張が走る。

「上層部はカンカンだ。極秘裏の内に事態を収拾する心算だったのに。一体、何処の誰がこんな事をしでかしたのか……とな？」

「！」三島の言葉に、アーヴィンは眼を見開いた。「み、三島さん、それって……」

声を上擦る。

「一度死亡した筈の者が生き還って、もう一度死んでおるのだ。わしの手には負えんよ」

三島は頭を廻らせて壁に埋め込まれているモニタを見た。センサーが彼の視線を感知して、スイッチが入る。

どの局でもミューズ社所有の大型船スター・ミューズが、連邦の検問中に現れた海賊船と交戦中、巻き添えに遭って爆発したと報道されていた。事実と若干違っているのは、連邦軍の報道規制に因るものだ。

「この件で、連邦はかなり世論の矢面に立たされた。予測可能な危険宇宙域での検問の必要性。民間船への配慮の無さ。艦の制御機器管理の問題……どれを取っても落度ばかりが露呈した」

三島はそう言って大きな溜息を吐く。

「報道カメラマン、アーヴィン・オースティン所有のクルーザーが、軍の誤作動による事故で被弾。本人死亡との記事もあるが？」ちらりと上目遣いにアーヴィンの様子を窺う。「お陰でマスコミから豪く叩かれたよ。皆、明日は我が身だからな」三島は少し緊張していた表情を綻ばせてアーヴィンを見た。「実は、わしはセンターの山崎医師とは古くからの付き合いでな。偶然、奴からお前のデータが送り付けられて来た時は正直言って驚いたよ。俄には信じられなくてな」

アーヴィンは三島の言葉を黙殺した。

三島は彼の反応に肩を落とした。アーヴィンが自分との接触を嫌っているのだと察したからだ。

「生存者のリストに、彼女達の名がありませんが？」

「そうだ。」

三島はあっさりと肯定した。が、その理由は喋る心算は無いらしい。尤も、アーヴィンにはおおよその見当は付いている。

「……ところで」

彼は気を取り直して、徐にベンチから立ち上がった。

「わざわざ此処まで足を運んだわしの意を汲み取って欲しいものだが？」

「仰っている意味が解りません」

アーヴィンは惚けた。が、三島には見抜かれている。

「……三島さん」

数年間、聞けなかった事にアーヴィンは触れた。

「あの時、最後まで委員会の判断に、自らのリスクを負ってでもずっと反対して下さっていた事は知っています。でも、委員会は可決され、自分達の抹殺は断行された。しかも、反対していた貴方の立場は、危うくなる処か……こうしてここに居る」

アーヴィンは顔を背けた。三島を直視出来ないでいたからだ。彼の握った拳が白くなる。

三島には『何故です?』と問い掛ける彼の言葉が聞こえた気がした。

「尤もだな」彼の様子を窺っていた三島は、一呼吸於いてゆっくりと話し始めた。「わしは……いっそ、あの時更迭されていれば良かったのかも知れんな」

「……」

アーヴィンは言葉に詰まった。

「その後、委員会は事実上解散。長官も責任を負って任期を待たずに職を辞した。ただ、解せんのは、ここ数ヵ月前から元委員長を含め、この件に関しての一連の主要な人物が次々と消息不明や変死……との報告が入って来ている事だ。表向きには、定年退職や持病を理由に第一線を退いていた上に、マスコミ等の介入があつてなかなか正確な情報が得られなかった。個人情報となるのでな。開示手続きに手間取ったよ。調査委員会は当人の不慮の事故、他殺、あらゆる方面からの想定を考慮。彼等の共通した経歴関連事項から、お前達との関係を導き出して指摘した者もおったが……当時点では容疑者全員が死亡しておったのでな」三島は、振り返ってアーヴィンを見た。その視線は彼を探っている様だった。「知っておったかね?」

「いいえ」

アーヴィンは感情が全く読み取れないよう無表情で答えたが、三島の答えから、やはり思った通りだったのだと思った。三島から訊

かなくても、報道関係者であるアーヴィンがこの事実を知らない筈は無かった。が、彼は敢えて否定する。

「そうか」

微かに三島が安堵の息を吐いた。

「……三島さん」

「うん？」

「疑っているのですか？ 自分を」

「さあてね。どうやらわしは藪から蛇を出すのが苦手だね」

さらりとかわした心算だったようだ。

Ⅱ「つて、疑ってるじゃねーかよ」

三島の言い様にアーヴィンは小声で誰にともなく呟き、ムツとなる。

「余計な事を言ってしまったかな？ まあ、聞かなかった事にしてくれ」曖昧な笑みを浮かべて、三島は尚も続けた。「本題に戻るが、良いかな？」

アーヴィンは軽く顎を引く。

「軍は、今回の件でミューズケミカル社と事実上手を切りたがっている。連邦ではもう対応出来ない程の力を持ってしまった」

アーヴィンは苦笑した。

「また同じですか？ 単なるトカゲの尻尾切だ。長官が代わっても、体質は何ら以前と変わらない。で、此処で貴方の申し出なり条件なりを呑むことを拒否すれば、自分はもう一度？」

吐き捨てるように言い放ち、『もう一度『抹殺』……ですか？』

とその後を続けてしまいそうになったアーヴィンは、慌てて口を閉ざす。

「いや」

「……え？」

三島は穏やかに否定した。

意外だった。何かに騙されている様な気がして、アーヴィンは自分の耳を疑う。

「今回の件に関して、お前は何ら関わってはおらん。いいな？」三島は強引に言い切った。「でなければ、残念だがわしが創ったシナリオは書き換えなければならん」

アーヴィンの蒼い眼が、スッと細くなった。

「それは取引ですか？」

三島は悪戯っぽく笑った。

アーヴィンは適当にあしらわれた様な気がして不機嫌になる。尤も、アーヴィンにとって、昔から三島は喰えない人物であった。相変わらず『老獪なオヤジ』は健在のようだ。

「ニア・ロディナルの外傷はいずれ消える。大した事はない。が、二人共当分カウンセリングが必要だな」

「二人？」

「そうだ。彼女達と唯一接触していたノースグラントのエイジェントだ……表向きにはな？」

そう言って、三島は意味深にアーヴィンを見上げた。

「表向きは……ですか？ 一体、何処から何処までが本当なのだから……煙に巻いてしまう心算ですか？」

（これだから、管理職ってのは……）

三島の引っ掛る言い様に慥然となる。

「ニアの双子の弟は？」

その問い掛けに、沈痛な面持ちになった三島は、黙って首を横に振った。

＊ ＊

アーヴィンはいつの間にかニアの居る個室の前に来ていた。余程彼女の事が気懸かりだったのだろう。無意識とはいえ、自分の取った行動に半ば呆れてしまう。

扉の前に立った途端、タイミング良く目の前のドアが開いた。

アーヴィンは反射的に半身を引いて立ち位置を変える。

「あ、オースティンさん」

担当の看護師数人が出て来る。

声を掛けられ、アーヴィンは軽く会釈をして、彼女達の後ろ……部屋に居る筈のニアを気に掛ける。

「今、鎮静剤を使用した所です」

それぞれが、髪の乱れや服装の乱れを整えながら、彼に一礼して出て行った。彼女達の様子から、容易にニアの状態が見て取れる。

アーヴィンは躊躇いながら部屋に入った。

ニアは、ベッドの上で両腕を力無く差し伸べ、まるで何かを捕まえようとしている様な動作をしていた。その瞳に生氣は無く、うわ言まで呟いている。

どうやら彼女達からマックの事を聞いてしまったらしい。ニアにとって、唯一身内であった弟が亡くなったのだ。幾ら気丈なニアでも、ショックは如何許りだったろう。

アーヴィンはその場に居た堪れなくなり、ニアに背を向けて出て行こうとした。

「？」

不意に、アーヴィンは背後から何かが近付いてくる気配を察して我に返った。

踵を返しながら、左手でいつも右脇に携帯している拳銃を握ろうとして、手を滑らせて空を掴んだ。残念ながら銃は三島に押収されている。今は自分も怪我人だ。

それは、宇宙船の外から来た。小さな発光体の集まりは、壁一面が強化ガラスで出来ているこの部屋に向かって、どんどん近付いて来る。

アーヴィンは思わず後退った。

不思議と、ソレには邪気は感じられない。それどころか、この小さな発光体の集まりが、何処かで感じた事がある気配と同じものような気がしてならなかった。

「……まさか？」

その発光体は遂に外部を遮断している筈のガラスをも通り抜けた。光は猶も不自然な動きを見せながら、ふよふよとニアの周りを暫くの間漂っていたが、やがてアーヴィンが見守る中、光は唐突に消えた。

まるで、ニアの身体に吸収されたように。

＊ ＊

僕は、目の前で広げた両の掌をじっと見詰めた。どうしたんだろう。自分の身体が消え掛かっている。

そうか、僕は死んだんだ……そう言えばちっとも苦しくないや。死に対する恐怖とか、自分の不自由な体への未練なんて、全然無かった。きつと、エルフィンに僕の最期を看取って貰えたからなのかも知れない。

僕の身体が悪くなる度に、何度もニアの泣き叫んでいる声を聞いていた。彼女は、何人もの医師に押え付けられて別室へ……そこから先は二人共何一つ覚えてはいない。でも、僕はいつの間にか気付いていた。眼が覚めた僕の前に居るニアは、以前のニアじゃないって事。

見た目は同じ。仕草や、口の悪さも同じ。なのに何かが違う。

彼女は本当にニアで、僕の双子の片割れなのだろうか……って、僕はニアの存在を疑いさえするようになっていた。

前に見た見た嫌な夢も、本当は夢じゃ無かったんだ。僕がただ現実を夢だと思い込んでいただけ。僕は半年前のあの時、ニアと二人で本当に何人ものエレメンタルに襲われて……僕がニアをあいつ等と一緒に消したんだ！ このコントロール出来ないへんてこな力を遣って。

この力はエレメンタルのモノじゃないの？ 人間が本来持つべき力じゃない。僕は、僕は本当は……解からない。自分が何者だか、本当に『マック・ロディナル』と呼ばれていた人間なのかさえ解か

らなくなってしまう。

『マック……返シテ。アタシノ身体ヲ返シテ』

移植されたニアの肺が、心臓がニアの声で囁く。

「止めてよッ！」

悪寒が走る。僕はいつだって消えたかったよ。でも、その度に消えたのは僕じゃなくてニアだ……どうして？

『彼女はお前のスペア（取換え部品）なのさ』

まだ、僕の元のカタチを保っている頭の中から声がした。僕と同じ声のもう一人。でも、何て冷たくて嫌な感じの声なんだ。

『だから同じ。だから双子。彼女は僕のパーツだから』

「違う！ 違う！ 違う！ 僕は僕。ニアはニアだ！ 彼女の命を断ち続けてまで生きたくないか……」

『そうかな？ 本当は誰よりも強く「生きたい」と願っていたのは、他でもない自分じゃないのか？』

「そ……そんな……」

『健康なニアを病室や車椅子から眺める度に、此処に座っているのは自分ではなくて、本当はニアだったらと考えた事は無かったか？ 同じ双子なのに自分だけがどうしてなのだと妬んだ事は無かったのか？ 消えたいだなんて嘘だ。本当はもっと生きていたいんだろう？ 綺麗事は止めろよ』

また頭の中から声がする。必死に抗おうとするけれど、心の奥の本性を見破られている。僕自身だもの……当たり前だ。

「……そうさ。本当は……本当は、僕はまだ死にたくはなかったんだ」

堪らない嫌悪感。生きられない事を知っていながら、それでも生きたいと願っていた。あのミューズの社長と一緒に……僕は。

でも、僕の体はもう何処にも無い。ニアやエルフィンに逢いたくても、もう二度と逢えないんだと思うと、切なくなる。

――「マック……」

ニアの声がする。気のせいかな？ 呼んでいるの？ 僕を？

第9部 再生

ニアが再び目を覚ましたのは、あれから三十七時間後だった。

アーヴィンがニアに使用したミューズ社製の細胞再生液程の効果は無いが、それでも治療の甲斐あって、傷は外見上殆ど完治していた。

アーヴィンも、傷の痛みこそまだ取れてはいなかったが、外見上元通りになっている。

ニアの意識が戻って来ている事に気付いたアーヴィンは、パソコンの画面から眼を離して椅子から立ち上がった。ずっとニアの傍で彼女の様子を診ながら、失ったクルーザーのA・Iチップを修復していた処だった。

ふと、ニアが目を覚ます気配を感じ、アーヴィンは手を止めて立ち上がる。

ベッドの脇に立ち、ぐっとニアの顔を覗き込む。

「おいニア、涎出てるぞ」

その声に、ニアの意識よりも早く右手が反応した。が、そこにはアーヴィンの顔は無い。

「なっ、またアンタなの？」

ニアの声は、初めて会った時と同じく、毅然としたものだった。寝顔を見られて、ニアは赤くなって怒り出す。

「……？ 涎なんか出てイナイじゃん」

慌てて口元を拭くと、口を尖らせてアーヴィンを睨んだ。

「冗談だよ。残念だったな、俺で」

心配してずっと付き添っていたのに、ニアからつれない態度を取られてしまい、心配して損をしてしまったような気がする。

ムッとなったアーヴィンを余所に、ニアは病室内を珍しそうに見

廻すと、頭上にある自分の患者名のカードを見付けた。

「何コレ？ タニア・オースティン？ ニアが？ ニアこんな名前じゃな！うぐぐ……」

大声で騒ぎ立てるニアの口を、堪り兼ねて手で塞ぐ。

「勘弁してくれよー。事情があつての事だから」

「んぐぐ？」

アーヴィンの大接近で、ニアは一層真っ赤になって手足をばたつかせた。自分から寄って行った分には構わないが、相手から近寄られると妙に彼を意識してしまい、胸の動悸が止まらなくなる。

騒ぎに気付いた看護師がやって来た。

「まああ、タニアさん！ 気が付かれたのね？ 良かったわあ。お兄さんもご安心されたでしょう？ 待っていてね。今、ドクター呼んで来るから」

「へっ？ お兄さん？」

きよんとする。

「ニアがなかなか起きなかったからさ。投薬ミスだって大騒ぎになった」

「ふーん。で、どうして此処にずうつと居る訳？ お兄様。って、どうして兄妹なのよう」

ニアは不満そうにアーヴィンを睨み付ける。

「別に。文句を言わない。お前には俺の大あくい切な商売道具をダメにして貰ったからな。いやあ、眼が覚めてくれて良かったあ。起きてくれなきゃどうしようかと思ったよ。はい、これ請求書」

アーヴィンにはっこりと作り笑いをして、ニアの目の前にカードを差し出す。

今度はニアがムツとなった。

「こうゆーのって、架空請求とかってゆーモンじゃないの？」

「冗談言わないでくれ。こっちはボランティアじゃないんだ」

暫くの間、お互いが譲らずの状態になるが、言い合いはドクターが来た事で中断された。

処置後、先に口を割ったのはニアだった。

「えーっと、アーヴィンだったっけ？ ニアの事助けてくれたみたいだからお礼は言っておくね」

「って、タメ口かよ？ それに、「みたい」って何なんだよ？」

アーヴィンがげんなりして、揚足を取る。

「で、この請求書渡すただけに、ずっとここに居たの？」

「あ？ ……ああ」

軽く咳払いをして、視線をニアから外す。

「あ、今間があった」

ニアは上目遣いでアーヴィンを指差した。

「茶化すな」

彼は背を向けた。そして、躊躇いながら言葉を選ぶ。

「お前、今迄の事覚えていないのか？ その……もう一人の事も？」

「……うん。覚えているよ。ちゃんとね」

部屋の隅に置かれたサーバーから、コーヒーを淹れようとしていたアーヴィンの手が止まる。

「だって、あのままでもマックはきつと助からなかったよ」

ニアの口調は穏やかなものだった。

別れる間際まで苦しそうにしていたマックの表情が脳裏を過る。

ニアは思い通りにならない身体に顔を顰めながら、ベッドから降りた。足を軽く引き摺り、壁伝いに窓際へ寄って行く。

アーヴィンはその場に佇んだまま、黙ってニアを見守った。

「それに……それにね、戻って来たよ。ニアの所へ」

窓の外は漆黒の宇宙空間が広がっている。室内の照明を反射して、ガラスは丁度鏡と同じ原理になり、左右対称のもう一人のニアが、ガラスの向こう側に映って居る。

ニアはガラスに映った自分の顔をじっと見詰めた。そして、ガラスにこつんと額を寄せる。

「……」

アーヴィンには、彼女へ掛けて遣るべき言葉が見付から無かった。実際にマックと会った事は無かったが、バーチャル映像で見た二人の姿は、男女の区別すら他人には困難な程、余りにも似過ぎていたのだ。その為ガラスに映ったニアと、本物のニア。一瞬、どちらかがマックであつても不思議ではない錯覚に囚われてしまい、アーヴィンは困惑した。

注いでいたコーヒーが、カップから溢れる。

「あちっ！」

慌てて手を引っ込めた。

「ま……まあな。それで自分に区切りがつけられるのなら、それもありか？」

毀れたコーヒーを拭取りながら振り返ったアーヴィンは、そこで釘付けになった。

ニアの肩が震えている。

「って……区切りって、どういう事？ ……マックの事、忘れろって言うの？ ムリだよ。そんなのムリ……忘れようと思って、こうやってニアの姿が映っちゃうとその度に思い出しちゃう。ニアの顔を見る度に思い出しちゃうよ！ ……うううっ」

「ニア……」

気不味くなった。が、すぐに入口の外に現れた新しい気配に氣を取られる。

「あー！ 泣かしてる。いけないんだ！」

いきなり入って来た一五、六歳の金髪の少女に指を指されて、アーヴィンは一瞬うろたえた。

緩く波打った長い金髪と、パツチリとした碧い瞳に長い睫。均整のとれた体型に洗練されている立ち居振る舞い。アーヴィンは彼女に見覚えがあった。

彼女がティファだと理解したアーヴィンは驚いた。

自分を見詰めて立ち竦むアーヴィンにチラリと視線を投掛けると、彼女は形の良い眉を顰めた。

「あ？ 貴方、グレネイチャ……なの？」

グレネイチャがどうして此処に居るのだと言わんばかりに不思議そうな顔をする。どうやら彼女にはアーヴィンとの面識は無いようだ。

それは、アーヴィンが過去に幾度となく他人から投掛けられて来た視線だった。彼はやんわりと、彼女の蔑むようなきつい視線を受け止める。

彼の様子を知ってか知らずか、彼女はアシスト・ロボットに体を支えられながら、ニアの傍へとぎこちなく歩を進めた。どうやら、今回の事故に巻き込まれて両の手足をバイオノイド化したばかりらしい。

「ニアちゃん私よ。エルフィン」

そう言って彼女はニアの肩をそっと抱き寄せた。

「ごめん……ごめんね。護ってあげられなかった。ずっと傍に居たのに……」

長い金髪がさらりと音を立てる。

看護師から既に聞いてはいたが、ニアにはどうしても信じられなかった。寧ろ、皆の言葉を信じてマックを自分の中から消してしまふのが怖かった。

エルフィンの優しい温もりがニアに伝わって来る。

「……どおして？ ニア、さっきまでマックと話していたんだよね？」

「何で？ 皆はマックが死んじやったって……どおしてそんなヒドイコト言うの？」

エルフィンに抱き留められて、今まで張り詰めていたニアの何か切れた。

ニアは大声で激しく泣きじゃくる。

「……」

アーヴィンとエルフィンは思わず互いに顔を見合わせた。

「シヨックの余り混乱して事実を認めないでいるのね」

「多分な」

彼の相槌にエルフィンのはつと我に返り、慌ててそっぽを向く。
アーヴィンは席を外そうとして踵を返したが、歩み出すことは無かった。ドアの向こうで、三島が眼を細めて立っている。

「まだここに居たのか？ お前の事だ。もうとっくに居なくなっているものだと思っとったよ」

「そうしようと思いましたが……いえ、今でもそう思ってますよ」

アーヴィンは両手を組んで思いつ切り伸びをする。

「だが、お前は此処に居る。もう逃げんという事か？」

三島は一層眼を細めて誰にとも無く頷いた。

「チョツと話が違ってはいませんか？」

アーヴィンは咎めるような眼で三島を睨み付けた。

「何が？」

「惚けないで下さい。彼女はノースグラントのエアージェントなんかじゃない。表向きだと仰っていたのは此の事ですか？」

「知っていたのかね」

「知っていた……って、何言っているんです？ 彼女は軍の人間とは似て非なる人物だ。水と油関係の連邦にどうして彼女が……一体何を考えているんです？」

三島は穏やかに笑った。

「テロリストのティファがミューズの船に乗っていたんですよ？ 自分達と一緒に！」

「そうだ」

あっさりと認める。

「事を起こさなくて良かった……知らなかったとはいえ、一歩間違えれば自分も巻き添えですからね」

無意識にシャツの袖口で汗を拭うアーヴィンの喉が鳴った。

「彼女は既にミューズからマークされていた。要注意人物ではなく、別の目的でな」

「アレだけの容姿だ。逆に目立つでしょう？ ……今思えば理由は
どうであれ、マークしてくれていたミューズに感謝すべきですね」
「そうかも知れんな。だが、今は違う。彼女がそうであったのは事
情があつての事だ」

「判っています。しかしそれとこれとは……」

「アーヴィン」

三島は食い下がるアーヴィンを嗜めた。

「……そうですね。自分がどう言える立場ではありませんね」
『俺も似た様な者か……』と、アーヴィンは深い息を吐いて前髪を
掻き上げる。

「彼女、規格外の軍専用バイオノイド処置をしていますよね？ 可
哀想に。標準仕様なら、もうとっくに歩けているでしょう？ どう
するんです？ 彼女達を。まだ、答えを貰っていませんよ？」

よく、細身のエルフィンとつり合う規格があつたなと感心する。

「両名とも身柄を一任されておる。ニア・ロディナルに関して言え
ば、わしよりもお前の方が詳しいのではないかね？ 事情はある程
度、センターの山崎から聞いておる。お前の事だ。ニアの能力には
もう気付いているだろう？」

「通常の何倍もの反射速度。ですか？ 軍の幹部が知ったら、先ず
野放しはしないでしょうね。一生ラボ送りとか……全く、獣並だ」

そう言つてアーヴィンは不用意に口走ってしまった事を後悔した。
自分の目の前に居る三島も軍の幹部の一人なのだから。

「どうした？」

「い、いえ、何でも……」

アーヴィンは三島から顔を逸らせるように振り返ると、抱き合つ
て泣いている二人に視線を向けた。

「彼女達を放つては於けんよ。わしの方で善処する心算だ。一つわ
しに任せては貰えんか？」

「……はあ。別に自分が彼女の保護者って訳ではありませんから」
アーヴィンは気抜けした。自分はニアの事で、何をムキになつて

いたのだろうか。

そして、今度はもの言いたげに三島に視線を投げ掛ける。

「何かね？」

「三島さん、良いのですか？ その……」

アーヴィンは口籠った。後を三島が引き継ぐ。

「わしが越権行為ではないかと？」

三島は鷹揚に構えている。アーヴィンは黙って顎を引いた。

「お前が心配する事ではない。但し、彼女達が不利になるような取材は差し控えて貰おうか」

「……まさか」

アーヴィンは暗に否定する。

「お前には……」

「つと、待って下さい」

アーヴィンは、尚も話を続けようとした三島に片手を上げて遮った。また『あの時の気配』がしたからだ。

彼はもう一度ニア達へと振り返った。ゆっくりと部屋の中を見回して気配を確認する。さして広くない病室だ。アーヴィンなら、人の気配くらい隠れていてもすぐに分かる。

互いに抱き合って泣いている二人。ドアの前で立っている三島と自分。アシスト・ロボットは機能性重視の為、人型ではない。なら、この『人の気配』は一体誰なのか？

アーヴィンの視線は、一面を外壁と併用している硬化ガラスの所で止まった。

「ニアが二人居る……」

声の上擦った。

＊ ＊

（マック、ごめん。ニアはもっと優しくしてあげてたら良かった）
ニアは、マックへの想いが知らず々のうちに懺悔に変わって行った

事に気付かないでいた。

（いつも宿題手伝わせてごめん。先週の掃除当番入れ替わってニアの分もさせちゃってごめん。学校行く時、起こしてあげなくてごめん。それから、葵さんから貰ったお菓子、全部食べちゃったの）

―（それから？）

（えーと、理紗がこの前マツクの事が好きだって告ってたのに、黙っててごめん）

―（理紗って、隣のクラスの？）

（うん）

―（……）

「だから、ごめんって」

マツクの声に責められた気がして、つい言葉が口を突いて出た。

突然、大きな声で喋ったニアに、その場に居た三人が意表を突かれて注目した。

「ニアちゃん、誰と話しているの？」

エルフィンが不思議そうに小首を傾げる。

「えっ？」

ニアははっと我に返った。

自分のすぐ後ろに誰か居る気配がしていた。すぐ後ろと言っても、ガラス窓があるだけで、人が入れるほどの隙間は無い。

恐る々振り返る。

ガラスには怯えた表情の自分と、エルフィン。そして、居る筈の無いもう一人のニアが居た。自分では無いもう一人のニアの目元が引き攣っている。

「だ、誰？ ……マツク……なの？」

（うわっ、怒ってる。ニアが思い出した事、もしかして解った？）

ニアは心の中で問い掛けた。

（うん）

もう一人のニアが、ガラスの中で大きく頷いた。

ニアは驚いてエルフィンに縋り付いたまま凍り付く。

＊ ＊

僕は外壁ガラスに映ったニアの姿と重なり、生前の僕の姿に変化する……と言っても、外見上髪が少し短くなっただけで殆ど変わらない。そして、丁度水面から出て来るように、ガラスの中から出て来た。

怒っていた顔が急に緩む。

「ニア、ありがと……僕、還って来れたよ」

僕は、ニアを抱き締めた。ニアは訳が判らずにそのまま固まっている。

「……マックうう」

じわりとニアの瞳が潤んだ。

第10話 罌

「何が入っているって？ これに」

赤毛の男は、金属で出来た黒い箱の様な物を乱暴に足で蹴った。見た目よりも重かったらしく、男は顔を顰めながら蹴った足を庇って飛び跳ねる。

「さあな？ 一応、鑑識に出すんだと。何でもスター・ミューズから出て来た物なんだと。おい、乱暴に扱うな。一応、生命反応が確認されているんだぞ」

もう一人の男が嗜める。

「へっ、生命反応？ こんな箱にどうやったら収まるってんだよ？」
男は馬鹿にした様に笑った。

その箱は、縦横三十センチ四方の立方体だった。せいぜい人の頭部が収まる程度の大きさでしかない。

「小人族でも入っているってか？」

肩を竦める。

「確かに。だが、上からの命令だ。聞かない訳にはいかんだろ」
そう言って煙草に火を点ける。

「あと二日もすれば、ステーションに到着だ。俺達はそこでコレを引き渡してお終いさ。お前にはくれぐれも言っておくが、面倒な事は御免だからな」

彼は相方に釘を刺す。青白い煙草の煙が彼の身体に纏わり付く。

「おい、お前こそ火気厳禁じゃないのか？」

「ああ？ 良いの良いのコレ位」

彼はしたり顔で煙を吐いた。

「可燃物の検査済み。引火性は無いんだと」

「本当に入っているのかよ？」

赤毛の男が、今度は箱を揺すった。

「ん？」

「どうした？」

「水みたいな反応がある」

「水？ 水に生命反応か……多分培養液が何かに浸かっているんだろうな」

「ああ、たぶたぷいってるぜ……ん？ ここに繫目があるぞ」

男は繫目にナイフを宛がった。

「おいバード、止せよ。何が入っているのか判らないんだぞ。勝手に……」

「……開いた」

「え？」

バードと呼ばれた男が抱えていた箱から、水のような液体が流れ出して彼の膝を濡らした。

「うわー、気持ち悪い！ 何だよ、二重包装じゃないのかよ？」

バードは悪態を吐きながら箱を乱暴に放り投げ、濡れた膝を手で擦った。

「おい！」

もう一人が慌てて箱の行方を目で追った。

箱は決じ開けられた所を下にして庫内の隅に転がったが、中には何も入っていない様だ。別段、変わった様子は認められない。

「何てエ事してくれたんだ！」

嗜めようとバードに向直った。

「え？」

視線が泳いだ。

たった今までそこに居て、自分と話をしていたバードの姿が何処にもない。

「おい、バード？ 揶揄るのは止めにしようや。何処に行った？ バード？」 必死になって辺りを見回すが、彼の姿は忽然と消えている。

「……おかしい……」

彼は上着に手を滑り込ませて銃を取り出すと、慎重にバードが座って居た小型のコンテナに近寄った。バードを汚した水の様なもの

の形跡も無い。

彼は訝りながらもコンテナに触れてみた。

まだ暖かい。確かにバードは此処に座っていたのだ。

暫くの間、息を殺して様子をうかがうが、依然彼からの返答は無かった。

「バード！ 押揃るのは止せって言ってるんだ！」

もう一度庫内に響き渡る声で怒鳴った。バードの気配が忽然と消えている。

耳が痛くなる程の静寂が彼を襲った。心臓の鼓動が早くなる。

「……」

はっとした。不気味な殺気が自分の頭上に突然現われる。

＊ ＊

三島とアーヴィンは、揃ってニアの部屋を後にした。

『オースティンさん、ニアを護ってくれた事は感謝しています。でも、僕は貴方を許せない』トゲのあるマツクの言葉が、未だに耳に残っている。ニアに随分酷な事したのは百も承知だ。だが、言葉の真意が読み取れないでいた。

「……気になるかね？ 彼の言葉が」

アーヴィンの表情を読んだ三島は、穏やかに言った。

「あ？ ……え、ええ」

「凶星の様だな？ 顔を見れば解る。心当たりがあるのではないのかね？」

「それが、ありすぎて……」

アーヴィンは自嘲気味に笑った。

「アーヴィン」

「はい？」

「このわしが、今更こんな事を言うのは何なんだが……」

三島は改まって軽く咳払いをした。

「アーヴィン、どんな事にも関連して来る事だが、止めようと思っ
てそれを実行するのは一分、一秒でも事足りる。簡単な事だ。が、
反対に諦めずに問題をどう乗り越えて行くか、どう継続していくか
が大切なのではないかな？ 否定的に捉えず、もっと現実に正面か
ら向き合わなければな。否定し続け、逃げているばかりでは行くま
い。何の解決にもならんぞ」

三島はそう言って、アーヴィンから受け取った銃にスーツの上か
ら手を当てる。

自分がその銃で何を遣ろうとしていたか、三島にはお見通しだっ
たのだ。

昔と同様、言葉を遣わずに黙って諭す三島に、アーヴィンはきま
りが悪くなって眼を逸らした。

「解っています。いえ、解っている心算です。ただ……それを、四
年前に委員会の連中が解ってくれていれば……」

「……すまん」

不意に三島はそう言って、彼に頭を下げた。三島もアーヴィンと
思う処は同じのようだ。

「止して……下さい」アーヴィンは顔を背けて首を振った。「貴方
のせいじゃない。違うんだ。でも……」

今ここで視線を合わせたら、今までの恨み辛みを全部彼にぶちま
けてしまいたいそうだった。そして、そんな脆い自分が許せなかった。

「間もなく、月のステーションに到着する。どうだ、肴の旨い処を
知っておるのだが寄って行かんか？」

三島には、アーヴィンの張り詰めていた気が緩んで行くように感
じられる。

「機会があればまた今度。仕事の片付けがありますから」

「……そうか」

お決まりの社交辞令で断られてしまい、三島は歩を止めて彼を見
上げた。身長差で自然とそうなる。大きくなったな。いや、大きく

なり過ぎるぞと思った。四年前に別れた時の視線は、確かもった低かった筈だ。

「何か？」

アーヴィンの澄んだ蒼い瞳が真っ直ぐに三島を見詰める。

「わしの旧コードは抹消せずに残しておこう」

その言葉が何を意味しているのか、アーヴィンはすぐに理解する。

「三島さん……」

アーヴィンは三島に敬礼をしようと、背筋を伸ばした。そして、右手を挙げる……が、その手は彼の胸の前で止まった。一瞬、躊躇ったが思い直して深々と頭を下げる。

自分はもう既に軍の人間では無い。尤も、アーヴィンは軍の一員だとして認めて貰った事さえ無かった為、正式な敬礼は見よう見真似でしか知らないのだ。

三島は軽く頷くと、アーヴィンの前を通り過ぎた。そして徐に軽く右手を挙げる。

アーヴィンは彼の背を見送った。

「おお、そうだった」

たった今、別れた筈の三島が、慌てて戻って来た。

アーヴィンの左肩が、かくつと下がる。

「どうしたんです？」

苦笑しながら尋ねた。何だか憎めない。お茶目な三島は健在のようだ。

「これをお前に返すのを忘れておったよ」

三島はスーツの懷から彼の銃を取り出した。

「本部に持って帰る処だった。わしが持っていたても使い物にはならん」

不意にアーヴィンは異常な気配を察知して、視線を銃から外した。三島も間接的に、彼の様子から啻ならぬ気配に気付く。

二人とも身構えて辺りを見回した。アーヴィンは素早く銃を驚握

みにして受け取ると、周囲に気を配りながら安全装置を外す。

絶妙のタイミングで三島の携帯が鳴った。

「どうした？ 何があった？」

珍しく、ノイズが多くて聞き取り辛い。

「何？ 聞き取れんぞ！ おい？ ……あつ、ええい切れたか」

三島は渋々携帯を切った。

アーヴィンは神経を尖らせて、辺りを一層警戒する。

「何だ？ この感じは……」

神経を逆撫でされるような嫌な予感がした。何かを素早く引き摺っている音が、次第に近付いて来る。

「後ろか？ ……いや、前？」

通路で反響音が廻っていて、位置の特定が困難だ。

「！」

ソイツは、通路天井部に設置されている排気ダクトの側面を伝って、素早く移動していた。

反射的に身体が動いた。立て続けに引金を引く。ダクトが破損して、そこから蒸気が噴出した。

「なっ、外した？ 馬鹿な……」

動きを予測して撃ってみるが、尽くかわされる。

ソイツは、黒っぽい金属のような光沢を帯びていた。形は不定形。流動体の物質ではあるが、厄介な事に、自らの意思を持って動いているようにしか見えない。前進するのに、左右へと廻り込み無駄な動きが多い癖に、動きが速い。しかもその動きには規則性が見出せないのだ。

「本当に生物なのか？」

動き回っている以上、認めざるを得なかった。

アーヴィンよりも遥かに動体視力が劣っている三島が目視で確認出来た時、ソイツは既に彼の背後から覆い被さるうとして、大きく空間に拡がっていた。

「三島さん！」

アーヴィンは咄嗟に三島に体当たりをして、彼を通路脇に突き飛ばす。アーヴィンは三島の代わりに身体を包み込まれた。

「アーヴィン！」

「逃げてください！　今のうちに！　……早く！」

「しかし……」

三島は躊躇する。

「行って下さい！　俺の代わりは在っても、貴方の代わりはいない」
アーヴィンは掴み処の無い生物に巻きつかれる。

「早く！」

三島はアーヴィンの声に追い立てられる様にその場を離れた。背後で非常警報装置のハードカバーが割れて、警報装置が作動する。

狙って引金を引くが、至近距離だというのに外される。

引金に手応えが無くなった。弾切れだ。アーヴィンは舌打ちした。

「何度撃ッテモ同ジ事ダ……ぐれねいちゃカ？　エエイ汚ラワシイ。
耳元で耳障りな声がした。視覚器官も聴覚器官も到底備えていそうに無いモノが喋っている。

（こいつ、喋れるのか？）

「嫌、才前ノ頭ニ直接話掛ケテイル。

ソイツがにやりと笑った様な気がした。

「ホウ、才前すたー・みゅーずニ居タノカ。

（が、どうした？）

アーヴィンはもがいた。記憶を探られている。

「アノ小娘、生キテハオルマイト思ッテイタガ……ソウカ。アノ小娘……何処ニ居ル？」

「知るかよッ！」

「他ノ奴等ハ殺ッテシマッタガ、才前ニハモウ少シ付合ッテ貰オウ……面白い。ナカナカノ経歴デハナイカ。

ソイツはクククと笑った。何もかもお見通しだと言わんばかりだ。ニアのか細い幼児体形が目の前に浮かんだ。背筋に冷たいものを感じた。ある程度なら、ソイツの考えている事がアーヴィンにも伝

わって来る。

「ニアは生殖年齢には達していない。残念だったな」

アーヴィンは鼻で笑った。ソイツは器となる人物を探している。ニアが危険な目に遭うのは、簡単に予測が付いた。

Ⅱ 遺伝子操作が出来ナイトデモ？

ソイツが馬鹿にした様に嘲笑った。

あと八時間弱で月のステーションに到着する予定だった船内に、非常事態を告げる警報が鳴り響いた。簡単な身支度をしていたニア達は、驚いて飛び上がる。

左足を軽く引き摺ってニアは通路を覗き込んだ。突然の警報に、外は騒然としている。

エルフィンは、部屋に常備されていたハードケースのパックから、慣れない手つきで銃を取り出した。

「タニアさん！」

乗員達の流れに逆らって、担当の看護師が血相を変えて来るのが見えた。

「だから、タニアじゃないってば」

勝手に偽名を使われたニアが不満そうに口を尖らせる。

「至急、上の第五セクションに移動して下さい」

看護師は慌ててニアの手を引こうとした。

「何かあったのですか？」

エルフィンが銃を後ろに隠し持ち、ニアの頭越しに訊ねる。

「詳しい事は知らないの。ただ、最下層の格納庫で異変が起きたみたい。何かが此方へ来ているの。船内セキュリティも故障しているし」

「故障？ 状況が判らないと、対処出来ないわ。上階へ逃げ込んでどうなる訳でもないでしょう。」

冷静なエルフィンに看護師は戸惑った。

「まさかこの船を見捨てる心算？ そんなに危険な事が起きているの？」

「上からの指示です。貴方も従って下さい」

お決まりの台詞だ。

「格納庫って、言ったわよね」

エルフィンとはパソコンに向かうと、不自由な手付きで船内セキュリティに接続する。思う様に動かない自分の新しい手が腹立たしかった。

素早く庫内の移動履歴を調べた。格納庫は六つあり、第一から第四は物資の移動は無い。

「ねえ」

エルフィンは振り向いて看護師を見上げた。

「この、第六格納庫にだけ人が配置されていた様だけど、どうして？」

「それは……機密事項に触れる事なので」

看護師の視線が逸れる。

「知っているのね？」

エルフィンは険しい顔で看護師を見詰めた。そして、片手で前髪を掻き揚げる。

「言ってあげましょうか？ 貴方達、もしかしてスター・ミューズに乗船していた生存者全員。いえ、外観はともかく、まさか生体反応が認められたモノ総てをこの船に乗せているのじゃないでしょうね？」

エルフィンは眼を細めた。彼女の心の内まで見透かしている様な眼だ。その視線から逃れる様に看護師が顔を逸らす。

「私の口からは……」

「流石ね。大した忠誠心ですこと。この非常事態でも口を割らないのなもの。良い心掛けね。」

何度も頷き、皮肉たっぷりに言ってやった。

ミューズ社が何を遣っていたのか、軍は既に黙認し、それどころ

か容認していたらしい。

「ニアちゃん、彼女と先に避難していて」

「エルフィン？」

「いいのよ」

エルフィンはニアに精一杯の余裕を持って微笑んだ。

＊ ＊

（ニア）

僕はポツリと話し掛ける。

（あに？）

ニアは看護師に急かされて先を急いでいた。

（いいの？ 本当に）

（だから、あにが？）

（何かがこっちへ来てんだよ？ エルフィンそのままにしちゃっていいの？）

僕は不満そうに話掛ける。

（だって、ニアが残って何が出来るのよお）

（彼女、サイバー処置受けたばっかなんだよ？ ニアだって、不自由そうにしてたのを見てたじゃないか）

（……うん……）

ニアは手を引いている看護師を止めた。丁度上りのエレベーターが目の前で停まる。

「あ、あの、やっぱり行かない。ニアはエルフィンの所に戻るよ」

「タニアさんまで、何を言っているの？ 皆非難したのよ？ 早く指示通りに行って下さい。上部フロアに行けば、脱出用ポッドがあります」

看護師は先にエレベーターに乗り、強くニアの手を引いた。

（！ やっぱりこの船を出るんだ）

「あっ！ タニアさん待って！」

ニアは、看護師の手を振り払って、引き返そうとした。

「ここは、指示通りにして下さい。貴方まで危険な目に遭うかも知れないのよ。子供の貴方が行ってどうなる事じゃないわ。聴きなさい」

看護師は尚もニアの手を引こうとして揉み合った。

「タニアさん！」

ニアも必死に抵抗する。看護師はやむを得ずスタンガンを取り出したが、悲鳴を上げて倒れたのは看護師だった。ニアの右手には、彼女から素早くもぎ取ったスタンガンが握られている。

「ごめんね」

ニアを残してエレベーターのドアが閉まった。

戻って来たニアを、エルフィンが叱った。

「何故言われた通りに出来ないの？」

軽い眩暈がする。まさかとは思っていたが、本当に戻って来るなんて思っても見なかった事だ。少なくともエルフィンの知っている子供の中には、ニアの様な無謀としか言い様の無い子は居なかった。「だって、エルフィンも此処に居るじゃない」

「私はいいの。まだ間に合うわ、行きなさい。早く！」

ニアは怖くはないのだろうか？

エルフィンは頬を紅潮させて言った。

「やだ！」

暫く二人で睨み合う。

エルフィンが操作していたパソコンからかわいい電子音が鳴った。彼女が電子音に反応する。

もしかして、自分の事を心配して戻って来たと言うのだろうか？ほんの少し、心がくすぐったくなる。

「もお、知らないから」気持ちとは裏腹に、つい投遣りな言葉が口を突いて出る。「戻って来なくても大丈夫なのに……」

そうは言ったものの、簡単なキー操作が思う様に出来ない。エルフィンには身体に馴染まない両腕に、内心では不安と苛立ちを募らせてる。

「僕が遣るよ」

見兼ねてマックがニアを映していたガラスから出て来た。左右対象になっている双子がエルフィンの傍に立つ。

「……お願い」

エルフィンがほっとした表情を見せて席を譲った。本当は助けが必要だったらしい。

（ウソつきい）

素直じゃない、彼女を見ていたニアが不満そうに膨れた。尤も、彼女は誰が頼りになるのかぐらい解っている。

マックはニアと協力し、彼女に手を貸してベッドに座らせた。

「ん？」

（何だか、エルフィン熱いよ？）

ニアも気が付いたみたいだ。

（術後なんだから熱も出るさ。気付かないフリしてしよう。彼女、僕達にあまり弱みを見せたく無いみたいだよ）

（……うん）

「もうこの階にまで来ているわ」

「今からトラップ創ってる暇ないかな？」

「出来ないことも無いわ。付け焼刃だけどね」

「これ？」

マックは身体を振ってエルフィンに画面を見て貰う。

「そう」

「……」

二人の遣り取りを聞いていたニアだが、内容の方はさっぱりだった。

（あによ。マックってば、エルフィンを助けたいの、自分じゃないのよお）

軽く嫉妬してしまう。自分の居場所が見付からないニアは、すぐそこまで来ているらしい危険物に対して俄かに好奇心が頭を擡げた。

船内の警報はまだ鳴り響いている。ニアはひっそりとして人気の無くなった通路に出た。

照明が非常灯に切り替えられて薄暗くなっている。所々で異常を示す赤色警告灯だけが賑やかに点滅していた。その通路のずっと奥に、誰かがまだ残って居る気配がしている。

「？」

ニアは息を詰めて、気配のする方へ用心深く小走りに近寄った。足音を忍ばせてそっと近寄り、息を殺してじっと見詰める。

背の高い男が、通路脇の手摺に寄り掛かっていた。片手で顔を覆っていたが、それが誰なのかニアにはすぐに判った。

「何ぁーんだ。アーヴィンじゃない」ほっとして、ニアは彼の方へと駆け寄った。「どしたの？ まだ此処に……」

アーヴィンが顔を上げ、二人の視線が合った。

『居たの？』と言い掛けて、ニアの表情が強張った。

顔色を変えて、二、三步思わず後退る。

アーヴィンは全くの無表情だった。しかもニアが見惚れた蒼い瞳は何だか淀んで生気が感じられない。驚いたニアはアーヴィンから離れようとした。

「きゃん！」

いきなり彼の右手がニアを捉えた。瞬時に逃げる方向を切り替えたが、彼の腕は不自然に伸びた様に見えた。

（そんな……？）

ニアは持ち前の反射神経で誰にも捕まらない自信があった。なのに簡単に正面から首を乱暴に掴まれ、締上げられている。幾ら相手がアーヴィンでも俄かには信じられなかった。

そのまま片手で通路脇の壁へと物凄い力で押し付けられた。ニアは宙に浮いた両足をバタつかせる。

「見ツケタ」

「！」

ニアの髪が逆立ち、鳥肌が立った。

ぞっとする様な耳障りな声でアーヴィンが喋った。彼の声ではない。何処かで聞いた事があった様な気がするが、今のニアにはそれが誰だか思い出せない。

（アーヴィンじゃ……ないの？）

ニアは両手で彼の手首に掴まった。姿はアーヴィンなのだが今は全く違う気配がしている。

「だ……れ？」

（く、苦しい……）

息が詰まって意識が薄らいだ。

「俺さ。判らないのか？」

アーヴィンにはやりと笑った。彼の腕が奇妙な動きをしていた。皮膚の下で何か別の生物が居る様に見える。

いきなり彼の腕の皮膚を突き破って、幾つもの黒っぽい筋状のモノがニアの首に襲い掛かった。掴まれている首の周りに、刺す様な強い痛みが奔る。

「ああ！」

それは、ニアの首の皮膚を切り裂き、頸動脈から容赦なく彼女の頭部へと侵入して行く。

全身に痛みが奔った。内出血した血が口や鼻、耳からも溢れ出す。視界も例外では無かった。目の前が真っ赤になり、血の涙が溢れる。

堪らずに悲鳴を上げた。

「アーヴィ……止め……！」

唇を塞がれた。必死になってもがくが、力づくで押え付けられる。彼の事は嫌いではなかった。少し怖い時もあるけれど、何処かで彼に惹かれていた。

本人の意思は完璧に無視して、ステーションに着いたら、別れ際

にキスして貰おうかな。なんて一人で勝手に想像して赤面していたのも事実だった。

けれど、今の彼は別人の様だ。

（イヤだ！　こんなの！）

彼に唇を重ねられても赤い涙が止まらない。悲しくて胸が張り裂けそう。

ニアの体に異変が起こった。

急速に体が成長して行く。瞬間に手足が伸び、髪や爪が物凄い勢いで伸びて行った。ニア自身、コンプレックスだった幼児体型から思春期の第二次性徴期へと一気に変化して行く。

背が伸びても、足はまだ床には届いていなかった。逆に、体が大きくなった分首への負担が大きくなる。

彼の片手がニアの襟に掛かり、シャツが力任せに引裂かれる。細い右肩から胸元が露わになった。小麦色の肌にランニングシャツのラインがくっきりと白く浮かび上がる。

ニアの胸元に四本の赤い擦り傷が付いた。

「やだぁ！」

ニアは必死に抵抗しながら隠し持っていたスタンガンをアーヴィンに押し付けようとした。だが、簡単に払い落とされその手首を掴まれて締め上げられる。

「あうっ！」

肘から電気が流れた様な痛みが奔った。

「ニア、そんなに俺が嫌いかな？」

アーヴィンの声が耳元で囁いた。締め付けている首筋にぐっと力が籠められる。

気が遠くなる。

（イヤだ！　マック……助け……）

第11話 バイオハザード

「ニア？」

エルフィンが補佐をしていた僕は、急に眩暈を覚えて椅子から転げ落ちた。彼女が驚いてベッドから腰を浮かす。

僕の視界が真っ赤に染まった。これは何？ 血……なの？

「ニア、ニアが……」

エルフィンが僕の声にはっとして辺りを見回した。傍に居る筈のニアが何処にも居ない。

「ニアちゃんがどうし……？」

僕の方を振り返ったエルフィンの視線がそこで停まった。

血の涙を流している僕の……いや、ニアの体が急速に成長している。床にぺたんと座り込んだ彼女の手足が伸び、栗色の髪がサアツと床一面に広がった。

「あ……あ……一体、どうしちゃったんだよ？」

胸の鼓動が速くなる。僕は強い息苦しさを感じて、首に手を当てた。ぬるりとした妙な違和感を覚える手を目の前でゆっくりと広げた。

震えている掌が真っ赤だ。

「マック、マック、落着いて。ニアちゃんは無事なの？」

「わ……判らない。でも、今は無事だろうけど、危険なのは確かだよ」

彼女から両肩を凄い力で掴まれ、激しく揺さぶられたお陰で僕は我に返った。

エルフィンの左腕から軽い電子音が鳴った。腕に内蔵された通信装置だ。

「……はい？」

エルフィンの視線は僕の姿に釘付けになったままだ。

「エルフィン。一体、君は何処に居るのかね？」

三島さんの声だ。エルフィン是我に返って手早く状況を説明する。
―「もしやと思ってみれば……ええい、指示があったと言うのに全くお前達は……」

僕達には、三島さんの戸惑った様子が伺えた。

―「いいか？ 落ち着いてよく聞くんた。今度指示に従わなければ命の保障は出来ない……その船はもう月のステーションには戻らん」
僕とエルフィンは驚いてお互いの顔を見合わせる。

―「遠隔操作で恒星へH・Dする。非常事態に於けるD・35を発令。マニュアルに従って廃棄する。大至急脱出用ポッドに行け。時間が無い」

「待って下さい。D・35……廃棄って……バイオハザードでもあったのですか？」

余りにも急な展開に、エルフィンは困惑の色を隠せない。

―「そうだ。いずれにせよ、乗員七名が船内で行方不明になっておる。目撃者が居なかった事と、原因が判明しなかった事が災いして対応が遅れた」

そうやって間が開く。

―「とにかく……急げ」

「でも……」

―「H・Dに入れば、此方……手の下し様が……」

通信にノイズが掛かった。たちまち三島さんの声が遠くなる。

エルフィンは通信が切れた腕をじっと見詰めていた。

その瞳はなんだか哀しそうだ。身体を失った僕には、彼女の気持ちに痛いほど判る。いや、病気で弱っていて、ある程度の覚悟をしていた僕とは違う。エルフィンは突然の事故で両の手足を失ったんだ。きっと僕なんかよりずっと……

「エルフィン……」

僕は言葉に詰まった。彼女に声を掛けたものの、何て言ったら良いのか判らない。

「……大丈夫。少し、驚いただけだよ」

僕を気遣う様にエルフィン は軽く頷いて表情を和らげた。

「マックはそのまま続けて。私はニアちゃんを捜すわ」

「うん。此処の通路の奥に誰かと居る筈だよ」

覚束ない足取りで必死になって立ち上がり、椅子に座り直した。

僕の息苦しさはまだ続いている……って事は、まだニアが危険な状態だからだ。

「誰か……って？」

「待って……」

僕はニアの視覚に意識をリンクさせてみる。

「……駄目だ。どうしたんだろう。視覚障害でも起こしたのかな。ハッキリ見えない。この人って、あのオースティンさん……なのかなあ？」

ニアの視界には薄暗いフィルターのような靄が掛かっているみたいだった。ニアの目の前には銀髪のグレネイチャらしい人が居る。でも、ニアの目線の前に居るって事は、ニアと同じ背丈の人って事？ けど、あの人はもっとずっと背が高いし……？？？

「行くわ！」

エルフィンはニアが身の危険に晒されているのを感じ、急いで銃の安全装置を外すと覚束ない足取りで壁伝いに外へ出た。

＊ ＊

「動かないで！」

エルフィンの視界には、マックと同じ姿のニアが、アーヴィンに首を締め上げられて宙吊りにされた姿が映っていた。ニアは既に意識が無いのかぐったりとしている。

「彼女を離して！ ニアちゃん！ 返事をして！」

エルフィンは銃を構えて男を狙ったが、腕が震えて思うように照準が合わない。それは恐怖心などからではなかった。熱のせいで焦点が思う様に定まらないのと、術後の新しい腕が馴染んでくれな

ったからだった。

彼はニアを片手で乱暴に放り投げた。彼女の身体が反対側の壁に叩き付けられて、人形の様に崩折れる。

「あッ！ ニア！」

反応があつた。ニアは首を押えて呼吸を乱し、激しく咳き込む。ほっとした。そして、今度は目の前に立塞がる背の高いグレネイチャを見上げた。

彼は連邦軍の三島と面会していた男だ。一方的かも知れないが、ニアに懷かれていた様子だったのに、今は人が変わったように、彼女を乱暴に扱っているのが理解出来ない。

俯いていた彼女が彼女をキッと見据える。

彼の眼に生氣は無かった。エルフィンに氣味悪さを隠せない。

「……生キテイタノカ？」

耳障りな声でした。

『生きていたのか』とは自分の事だろうか？ どうしてこの男がそんな事を言い出すのか判らない。

「うっ、動かないで！」

エルフィンの警告を無視して、彼はふらふらと漂う様な足取りで近寄って来る。その姿が異様で、彼女は恐怖心を煽られた。

アーヴィンの事はあの後で三島からある程度は聞いていた。グレネイチャであるというだけの事で、一瞬でも彼を見下した自分を恥じていた。正直、その事で謝ろうとも思っていた。

彼を撃ちたくは無いと思う。

彼との距離が詰まり、間合いギリギリになった。牽制の心算で足を狙って撃つ。それでも尚怯んだ様子は無く近付いて来る。彼の虚ろな瞳は何者かに操られている様にも見える。

「こ、来ないで！」

強く眼を閉じて引金を引いた。彼との距離があまりにも接近し過ぎていて外し様が無い。

弾は彼の右胸を貫通した。

彼は胸を庇って二、三步後退さり、気味の悪い叫び声とも、唸り声ともつかない声を雄叫びを上げた。すると背中の銃創から、黒い流動体がのたうちながら流れ出る。

アーヴィンの両膝が折れ、ゆっくりとスローモーションを見ている様にエルフィンの上に崩れる。

エルフィンが怯えて悲鳴を上げた。

今度は彼の背後から、ソイツがアーヴィンごとエルフィンを呑み込もうとして襲い掛かった。

＊ ＊

「エルフィン！」

彼女が、得体の知れない奴に襲われる光景が鮮明に見えて、借りていたニアの身体が霧のようにフツと消えた。

マックは意識を飛ばして瞬間にニアの中に戻っていた。

先にマックが動いたのか、ニアが反応したのかは覚えていないようだ。気が付いた時には、ニアが落としたスタンガン拾って、アーヴィンの身体から出て来た奴へ最大出力で押し当てていた。

青白い火花が盛大に散った。

（間に……合った……？）

大きな誤算は、奴と一緒にアーヴィンを巻き込んでいた事だった。マックは、アーヴィンと一緒にエルフィンまで巻き込んだのかと思ったが、偶然か、それとも故意にだろうか？ 一瞬早く、アーヴィンの左腕がエルフィンを突き放し、彼女は事無きを得る。

倒れたアーヴィンの身体から白煙が昇り、炭化して焼け焦げた臭いが辺りに立ち込める。

「きゃああ、アーヴィン！」

我に返って悲鳴を上げたニアの手から、スタンガンが落ちた。

＊ ＊

三島は、ニア達の居る病院船と並んで航行している軍の巡視船に乗っていた。

「部長、間もなく病院船の遠隔操作に取り掛かります」
背後で乗員の声がしたが、三島は動けないでいた。

『行って下さい！ 貴方の代わりはいない』

（……アーヴィン）

頭の中で、彼の声が何度も繰り返して聞こえる。

（わしはお前に謝らねばならん。お前こそ……お前こそ代わりは居らんのだ）

何度悔んでも悔み切れない。自責の念に駆られた。

（わしは……わしはお前を一度ならず二度までも見捨ててしまわねばならんのか……？）

硬く目を閉じる。真一文字に結ばれた口元は微かに震え、悲痛な表情を浮かべた顔は蒼白だった。

「……長」

「部長」

何人かの乗員に呼び止められて、我に返った。

「あ、ああ……」

「本船も回避行動に移行して宜しいでしょうか？」

離脱者を受け入れていた船が、次々と月のステーションへと進路を変更している。

「……いや、もう少し待ってくれ」

三島はそう言って片手を軽く挙げる。

乗員達はざわめいた。

「まだ、脱出して来る者がいる」

「お言葉ですが、病院船は予定通り間も無くH・Dを行います。安全距離を保つ為には、早急の回避行動が必要かと思われます」

「……解っている」

三島は穏やかに言った。

(エルフィン……まだか?)

言葉とは裏腹に、三島の心中は穏やかではなかった。

一分、一秒がとても早く感じられた。このまま、時間が止まってくれればと願ってしまう。

「船内で何者かが航行システムに介入しようとしています。此方からロックしているので変更は無理だと思いますが……」

「船内モニタはどうなっておる？」

「……駄目ですね。捕捉出来ません。完全に沈黙しています」

幾つものモニタに切り替えるが、どれも既に機能を落している。

(確認不能か……)

「部長」

「……解った」

三島はがっくりと肩を落とし、断腸の思いで静かに眼を閉じた。

「進路変更。本船は直ちに当宇宙域より離脱」

「了解！ 進路変更！」

乗員が復唱をして、いよいよ進路を変更する間際に、通信が入った。

――「部長……島……」

ノイズが多くて聞き取り辛い。が、三島にはそれが誰の声であるのかすぐに判った。

「エルフィンか？」

三島は素早く通信マイクに向かう。

「至急、医師の招集を頼む！」

負傷者が居る事を受け、三島は艦内の医師の召集をした。

＊ ＊

ニアはアーヴィンに縋り付く。

「アーヴィン！ やだ、起きてよお！」

何度も揺り動かす。

「ニアちゃん……」

エルフィン は眼を逸らした。

「ねえ……ねえってばあ」

ぽたっ、ぽたっ、と大粒の涙が毀れ、アーヴィンの頬を濡らす。

「ねえ……返事、してよう。う、うつ……」

肩を落として座り込んでいるニアの頭に、そっと何かが触れる。

それは、アーヴィンの左手だった。

「……頼む、から、耳元で……怒鳴るな」

消え入りそうな声がした。眼を閉じたまま、喋るのも億劫そうだ。

「アーヴィン！」

ニアは、アーヴィンの左手を、そっと両手で包んだ。

エルフィン もほっとする。が、油断は出来ない。緊急処置が必要だ。

「エルフィン、もう時間が無い」

マックはニアの身体が映っている、割れたガラス片から出て来た。

「ええ。何とかH・Dを止めるか、一時的に停止させることは出来ないかしら」

エルフィン も頷く。

「早くここから脱出をしないと、彼も、私達も……」

「あのシステムで何とかやってみる。」

「お願い」

ニアの姿をしたマックは、彼女の言葉に強く頷き、さっきまで居たニアの病室へと踵を返す。

とにかく、一刻も早くこの船から脱出しなければ、誰一人として助からないのだ。エルフィンは、アーヴィンの左腕を支えて立ち上がった。ニアも彼の右側で支える。

「ニアちゃん、手を貸して。まだ未使用のポッドが残っているわ」

「……待テ！」

その声に二人は振り返った。

身の毛がよだった。ソイツがまだ生きている。

ニアはアーヴィンの身体から離れた。エルフィンとアーヴィンの体重総てを支える事になってよろめいた。

「エルフィン、アーヴィンを……早く！」

ニアは自分でも良く判らなかつたが、無性に苛々していた。元々、気が短くて負けず嫌いの方だつたが、ここの所アーヴィンと知り合つてから調子が狂いつ放しだつただけだ。

向き合つたソイツがほくそ笑み、自分を馬鹿にした様に思えたせいもある。尤も顔が無いので判断が厳しいところだ。

「ニアちゃん、これを！」

エルフィンが三十センチ程度の筒状の金属を投げて遣した。素早く受け取る。

筒の端にスイッチがあつた。ニアは筒を覗き込みながらスイッチを入れる。

「覗いちゃダメ！」

エルフィンが金切り声で叫ぶ。

ニアの目の前で、筒の中からジーという不快な音と共に糸状の赤い光が伸びた。

「わ？」

慌ててかわす。

左頬に軽い熱気を感じ、髪の毛が一束ぱさりと焼け落ちた。

エルフィンは生きた心地がしない。

「だ、大丈夫……なの？」

「うん。早く、先に行つて」

ニアは平気な顔で小さく手を振つた。そして、ソイツに向き直る。

「良イノカ？ 後悔スル事ニナルゾ」

「何が……？」

言い掛けて、ニアは立ち竦んだ。

ソイツはニアの目の前まで素早く床を伝つて来ると、人の姿を取り始める。

ニアは息を呑んだ。

「何コイツ。ニアに化けてるの？」

ソイツは瞬く間にニアの姿を模倣した。

「ドウカネ、自分ト同じ姿ノ私ガ倒セルノカ？」

自信ありげに言い放った。

しかし、ソイツの姿は一定の状態を保つことが出来無い様だ。ニアを模倣した姿もすぐに輪郭が歪んで溶けてしまう。

ニアの手が震えた。

「くっくっ……ぶあっはっはっ！」

いきなりニアが笑い出す。

「何いゝそれ、ニアなのお？ キモイゝ」

同じ顔ならマックもそうだ。だが表情が全く無い。そしてそれがニア自身の顔。気味が悪かったが、それ以上に、崩れて行く顔を見ていて可笑しかった。

「黙レ！」

ソイツの一部分が、ニアの首に向かって素早く伸びる。

一瞬でニアの表情が真顔になった。

「同じ手は効かないよ」

予備動作無しにかわしてレーザー・ソードを薙ぎ払ったが、ソイツもほぼ同時に反応した。

直感的に、ソイツに触れれば無事では済まされないと悟る。取り込まれれば終わりだ。事の重大さがニアにも把握出来る。

ニアの額から、珠のような汗が噴き出し、心拍数が上がった。

「落ち着かなきゃ。落ち着いて……」自分でそう言い聞かせながら、間合いを計る。「ここから先へは行かせないよ」

＊ ＊

僕はニアの居た病室に戻っていた。

そして、再びパソコンに向かう。遠隔操作でのH・Dを止める為に。いや、止める事が出来なくても、少しでも時間稼ぎが出来れば

脱出の可能性はぐっと上がる。

システムに侵入した。緊張でマウスを持つ手が震えている。僕の額に汗が滲んだ。

「……ダメだ。どのシステムも外部操作でロックが掛かっている」
一つずつ解除していけない事もないけれど、これでは時間が掛かってしまう。

何か方法がある筈なんだ。方法が……

気持ちばかりが先走る。

瞬く間に画面全体が赤くなり、エラーの文字が点滅して完全に操作不能になった。

ダメか……

僕は強制操作で画面を切り替えて、今度はエルフィンと創りかけていたトラップを開いた。

ニアは、自分と直角の反射神経を持ったソイツに手を焼いていた。肩で大きく息をしながら、何とかソイツから逃れる手立てを巡らせている。

一瞬でも触れれば取り込まれてしまうから分が悪い。

「わ？」

突然、ニア達の居る通路のスプリンクラーが一斉に作動した。同時に、エア・シャッターが唸りながら閉じてゆく。

閉じ込められてずぶ濡れになったニアとソイツは一瞬、怯んだ。

「ええーっ？ あ、あに？ ちょっとお！ ニアまで閉じ込められちゃったじゃないよー！」

ニアは焦って大声で怒鳴った。

（ニア、ニア）

僕はニアの心の中へ呼び掛ける。

（え？）

（僕の声が聞こえる？ 今から、一、二の三で飛んで。いいかい？

出来るだけ高く飛ぶんだ)

(う……うん……?)

(行くよ? 一、二の三!)

僕は実行キーを叩いた。

ニアは訳も解らずに指示された通りに思いっきり飛んだ。滞空時間が出来るだけ長く取れるように、体を丸めて膝を抱える。

床一面に強烈な閃光が奔った。通路の照明器具やパネル等が火花を散らし、音を立てて破裂する。

ニアの姿をしたソイツが閃光に包まれて悲鳴を上げた。光は尚も輝き、辺りの床一面を真っ白に呑み込んだ。

ニアは、あまりの眩しさに直視出来なくて、両腕で眼を覆う。一気に集束した閃光は掻き消され、その床にニアが身軽に着地する。

(早く! 今のうちに!)

僕はニアの後ろのエア・シャッターを開けて促した。

すぐ横の壁面に、ジェット式のストレッチチャー(担架)が設置されている。二つ在ったらしいが、一つはエルフィンが使って行った様だ。

ニアは急いでストレッチチャーを取り出して拵げた。そして、サーフィンの要領で素早く飛び乗ると、スイッチを足で踏み込む。

ストレッチチャーは、一定の高度を保ちながら、風を切って滑る様に進む。ニアは腰を低く落すと、レベルを最大値に切り替えた。巧に左右に拵げた手でバランスを取り、体重を移動させながらコーナーを曲がる。

ニアのいた個室からもう一人のニアが顔を出す。

「マック!」

「後ろ!」

僕の声に、ニアは一瞬だけ振り返った。

目の隅で、ソイツが元の流動体に戻って、追い掛けて来るのが見

える。よく見ると少し遅れて同じモノが幾つも群れの様になって集まって来ている。

「うあー！ 増えてる！」

ニアはレーザー・ソードのスイッチを入れて逆手に持つと、槍投げの要領で投げつけた。

ソイツが避けようとして、動きが鈍る。

「マック跳んで！」

ニアは右手を一杯に差し出した。

スピードを緩めずにこのまま掠める様にして僕を連れて行く心算だ。一瞬怯んだけれど、状況が僕を許さなかった。

「わ？」

ジャンプした僕は思わず声が出た。

身体が軽い。何でこんなに軽いんだ？

僕は、今まで僕の身体では味わえなかった心地好さを感じ取っていた。普段の生活でさえ思う様に儘ならなかった僕の身体とは大違いだ。

けれど、そう手放しで喜んでも居られなかった。

追って来たソイツが、僕の足に触れそうになる。

「ニア、ごめん」

僕はそう言って直接ニアの中に戻り、ニアの姿をした僕は唐突に消えた。

ニアが一瞬不思議そうな顔をしたのが見えた。

「きやう！」

激しい頭痛に襲われ、ニアが頭を抱えて悲鳴を上げる。一瞬、バランスを崩しそうになったが、辛うじて体勢を立て直した。

（だから、ごめんって）

前にエルフィンが襲われた時にも直接ニアの中に戻った事がある。でもあの時は僕もニアも夢中だったから、集中し過ぎて頭痛の感覚が麻痺していたんだ。

重さが半分になったストレッチャーはたちまち加速する。だが、

ソイツ達も一層ムキになって追い掛けて来た。

「ニアちゃん！ こっちよ！」

エルフィンの声が聞こえた。

見ると、ポッドの前に出て来てニアを待っていた。

「早く入って扉を閉めて！ 早く！」

「ええっ、そんな事したらニアちゃんが！」

ニアとエルフィンの距離はまだ優に三百メートル以上ある。

「いいから、閉めて！」

ニアは叫ぶと、ストレッチャーから伸び上がった。脱出ポッドの扉が急速に閉まりかけている。

ストレッチャーに急ブレーキを掛け、ニアは扉に向かってジャンプした。

扉は船の外壁部側面に少し引っ込んだ場所にある。通路から直線的には進入出来ないが、ニアは一旦外壁部の窪んだ所を強く蹴り、ワンクッション置いて飛び込んで来た。

ストレッチャーが操縦者を失って失速し、派手に左右の壁にぶつかりながら大破して辺りに破片を撒き散らした。

ニアがポッドに飛び込むのと、扉が閉まるのがほぼ同時だった。

第12話 デリート

ニアとエルフィンが船底の格納庫から、意識不明のまま医療セクションに搬送されて行ったアーヴィンを心配しながら見送っていた。「出来る限りの応急処置はしたの。でも、設備も無い所での処置なんて無理よ」

エルフィンが俯き両手で顔を覆う。

ストレッチャーに乗せられていた時、アーヴィンは意識が朦朧としたままで多量の吐血をしていた。肺を撃たれた為に呼吸も浅く、誰が見ても危険な状態だと判断出来た。

「だ、大丈夫……よ」

ニアは虚勢を張ってみたが、思いつ切りその虚勢は空振りした。

「ニアちゃん、私の事恨んでないの？」

顔を上げたエルフィンと眼が合った。碧い瞳が潤んで、白目が真っ赤に充血している。

ニアの眼を通して映ったエルフィンに、僕はどきりとさせられた。「私が……私が彼を撃ったのよ？ 彼にもしもの事があれば……私のせいだわ」

ニアは何も言えなかった。

ニアはエルフィンがオースティンさんを撃ったのを目撃していた。でもあの時の彼はアイツに操られていた。多分ニアがエルフィンの立場でも、同じ結果になっていたかも知れない。

（……ごめんよ、エルフィン……）

僕もニアと同じだった。気の利いた言葉の一つさえ浮かんで来ない。生前、学校ではあれほど先生方に高い評価を受け、他の生徒からもそれなりの評価をされていた気になっていたこの僕が……こんな時に役に立てない……

（勉強ばかりじゃ駄目なんだ……ごめん……）

僕はニアの中で何度も彼女に謝っていた。こんな事、ただ思っているだけでいても、彼女に届く筈が無いのを判っているのに。

「？」

船員達が遠巻きにして取囲み、厳しい眼が向けられている事にニアは気付いた。

振り向いたニアと視線が合った何人かが、後ろめたそうに眼を逸らした。逆に睨み返して来る者もいる。ニアは困惑した。

「おい、お前があの船を襲ったんだろう？」

一人の船員が堰を切った。一同から、「そうだ、そうだ」とどよめきが沸き起こる。

訳が解らずに立ち尽くしたニアの後ろで、突然どさりと何かが倒れた。

「エルフィン！」

慌てて振り返り、彼女の傍に寄ろうとする。

「動くな！彼女に触るんじゃない！」

「手を上げろ！」

何人かの銃口が一斉にニアに向けられた。

「くっ……」

ニアは仕方なく俯き、唇を噛締めてゆっくりと両手を上げる。

「ひどい熱だ」

エルフィンの傍に来た一人が、彼女の額に手を当てて言った。

「俺が医務室へ連れて行く」

一人がエルフィンを抱き上げ、格納庫から急いで出て行く。ニアとニアの中に戻った僕は、黙ってそれを見送るより他に無かった。

「大体、お前一人が無事だったあ、どういう事だ？ お前、本当はエレメンタルだろう！」

「そうだ。大方、乗っ取った船が破棄されると知って、怪我人を助けたフリでもして自分も助かった心算でいるんじゃないのか？」

「どうなんだよ？」

「ちが……違う！ニアはエレメンタルなんかじゃ……」

俄かに格納庫内が殺気立つ。彼等に気圧されてニアは言葉を詰まらせる。

（ニア、この人達の挑発に乗っちゃ駄目だよ）

僕はニアに釘を刺した。今、ニアが何を考えているかって事ぐらいいはお見通しだ。

（人一倍速い反射能力を見せちゃ駄目だ。絶対に。皆銃を携帯している。それこそ今のこの人達を刺激すれば、幾らニアだって殺され兼ねないよ）

（だって……だってコイツ等ニアの事をエレメンタルだって……）それは僕にも当て嵌まる。悔しかった。泣き出したくなる程悔しかった。

周りを取り囲んでいた船員達が一斉にニアに詰め寄って来る。疑心暗鬼になった彼等に、今は何を言っても無駄だ。

「本当に人間かどうか俺が確かめてやろうか？」

「きや？」

ニアのすぐ後ろに居た一人の手が、ニアの長い髪を鷲掴みにして引っ張った。ニアは乱暴に引き摺り倒されて悲鳴を上げる。

下品な笑い声がした。卑猥なヤジがそこら中で飛ぶ。

「本性を現せ！」

ニアの顔が恐怖に慄く。

「何をやっておる！」その一喝で、一同はしいんと静かになった。

「これが、この船のやり方か？」

小柄な老紳士……確か、オースティンさんが『三島さん』って呼んでいた人だ。何処かの偉い人なのか、凜とした声は威厳を持っている。

声を荒らげた三島さんは、格納庫の中につかつかと入って来た。そして船員達に押え付けられているニアを発見した。

一瞬、間があった。『見知らぬ少女がいる……』三島さんはそんな表情を浮かべている。

「おじ……さん？」

ニアは起き上がり、自分の両肩を掻き寄せてしゃくりあげながら震えている。

「ニ……ニア……ニアなのか？」

その女の子に、ニアの面影があった事に気付いてくれたみたいだ。でも、別れてから何年もの時が過ぎたのならいざ知らず、ほんの数時間しか経っていないのに、このニアの変わり様をどう説明すれば良いんだろう。ニアだって僕と同じだった。

僕以上に口下手なニアが、この状況を彼に伝えられる筈も無く、ニアは涙ぐんだままじっと物言いたげに三島さんを見上げている。

三島さんは、目のやり場に困った様子だった。ニアは服の上からずぶ濡れでシャツが透けて肌に密着している。襟も引裂かれていて胸元が大きくはだけていた。船員がおかしくなるのも判る気がする。三島さんは自分の上着を脱いで、ニアに掛けて遣った。

「部長、まさかこのエレメンタルを野放しにしておく心算じゃないでしょうね」

格納庫内が再びざわめいた。

「彼女はエレメンタルなどではない。私が一切の責任を負う」

「責任問題がどうこうと言っているではありません！」

「事が起こってからでは済まされませんよ！」

船員達銘々が不満を漏らす。

「ニア、堪えてくれ」

三島さんは辛そうな表情をして、ニアを隔離部屋へと閉じ込めた。

「このままでは船内がパニックになる。何よりお前が危険だ。皆、殺気立っておる。落ち着くまでの辛抱だ」

そう言いながら、三島さんは慣れた手付きでニアの首に包帯を巻いてくれた。

ニアの首にはクッキリと手形の痣が残り、数箇所の刺し傷が痛々しく残っていた。致命傷になる筈だった動脈部にも傷があったけれど、何故かそれらの傷だけは既に塞がっている。通常では有り得な

い現象だ。

「致命傷にならんで良かったな？ 誰が遣ったのかねこの傷は？」

ニアはずっと怯えて押し黙り、震えている。

済んだ事だけれど、今頃になって恐怖心が湧き上がって来たみたいだ。

僕だってショックだった。見ず知らずの他人からのあからさまな拒否。憎悪。それは今まで僕やニアが感じた事の無かった『殺意』と言っても構わない。

その総てがニアに（僕に）向けられたんだ。

正直、僕もニアと同様に、少しおかしくなっていたのかも知れない。もしも三島さんが来てくれなかったらと思うとぞっとする。

（ココニ居テハイケナイノ？ にあハ、アノ船ト一緒ニ消エテシマエバ良カッタノ？）

（そんな……そんなコト無い！ ニアは居ていいんだ）だけど、その判断は誰がするの？ 偽者の僕が、ニアに居て良いだなんて……荒唐無稽だ。（それでも僕はニアに居て欲しいよ。消えるだなんて、そんな事思ったりしないですよ！）

お互いに心が張り裂けそうになる。

「……おじさん」

消え入りそうな声がニアの口から漏れた。

三島さんの手が止まる。

「ニアが怖くないの？ あのおじさん達が言ってた通り、ニアはエレメンタルかも知れないんだよ？」

投げ遣りに言った。今のニアは自分の周りだけで無く、自分まで信じられなくなっているの？

（ニア、何てこと言うんだよ！）

僕はニアの言葉に戸惑った。

「もしかしたら……ここでおじさんが危険な目に遭うかも知れないんだよ？」

「ほう、それは困ったね。どうしようかな？」三島さんは他人事の様
様に言うと、にっこりと優しく笑った。そして、休めていた手を動
かして包帯を巻き終える。「そうだな。ここで私もお終いかな？」
言っている事と、彼の表情が余りにもちぐはぐで、ニアは哑然と
する。

三島さんはニアの反応を確かめるようにして続けた。

「……なんてな。大丈夫、ニアはエレメンタルなんかじゃ無いぞ」

「おじ……うっ……」

目頭が熱くなり、ニアの頬に涙が毀れた。

「辛い思いをさせてしまったな」

三島さんは泣き出したニアの頭を優しく撫でた。

言い方といい、リアクションといい、僕は三島さんがオースティン
さんに似ていると思った……と、言うより彼が三島さんと似てい
るんだ。

「アーヴィンとエルフィン……助かるよね？」

二人とも失いたくない。僕にはニアの気持ちが痛い程解る。

「あ、ああ……」

あやふやな生返事。それだけで僕とニアは彼が未だに危険な状態
であることを覚った。

「心配する事は無い。アーヴィンは今、優秀なスタッフが看護して
いる。きっと大丈夫だ」

＊ ＊

三島の言葉は、ニアを落ち着かせる為に言った嘘だった。実際に
は、彼はまともな処置さえ施されずに放置されていたのだ。

昇圧剤と抗生剤の投与だけでは助からない。その事が判っている
だけに、三島は内心焦っていた。

アーヴィンに十分な治療が施されていないのにはもう一つの理由
があった。彼がグレネイチャだという理由で、一部の医師が治療を

拒否していたからだ。尤も、彼に必要な血液の適合する型が船内に無かった事も災いしていた。

「嘘！ おじさん、ニアに嘔吐してる！」

急に押し黙ってしまった三島に、ニアは敏感に真実を見抜いてしまった。

「エルフィンは、術後の無理が堪えておるのだろう。彼女は熱が下がれば大丈夫だ。お前も良く知っているだろうが、センターの山崎を呼び寄せた。間も無く着く頃だ」

そう言って三島は再び黙り込んだ。

「……おじさん、アーヴィンに会わせて」

ニアは三島を見上げた。

「何を言っている。彼は昏睡状態だ。意識が無いんだぞ？」

自分の言う心算の無かった言葉を口にしてしまい、三島ははっと我に返った。

「それでもいい……いいから」

三島はニアの直向ひたむきな眼に心を打たれる。

「判った。但し、これをさせてはくれまいか？」

三島は電磁手錠を取り出した。ニアは一瞬身じろいだが気を取り直し、黙って頷くと、両手を三島に差し出す。

アーヴィンは幾つもの医療機材に囲まれていた。しかし、彼の居る処置室には看護師さえ居ない。

モニターに、彼の生命反応が波形となって表示されているが、その波形に力強さは見られない。しかも、時々波形が乱れている。

三島とニアは、その光景を二階の視察室から覗いていた。

三島の権限を遣い、彼の銃創の手術は何とか終了させたのだが、自発呼吸が出来ず、今は補助機器に頼っている。外傷性のショックだろうが、それだけでこんなになるものなのだろうか？

三島は黙ってアーヴィンを見詰めた。

「おじさんの嘔吐き！ 誰も……誰もアーヴィンの処に居ないじゃ

ない！ お医者さん一人も居ないじゃない！ 誰かアーヴィンを…
…アーヴィンを助けてよう！」

ニアの目の前がぼやけた。電磁手錠をした手が、貼り着いたガラスから力無く滑り落ちる。

極度の緊張から、ニアの手形状にガラスが曇った。

「…ニア、ニア」

三島の呼掛けに、ニアはゆっくりと反応した。

「山崎が着いた」

三島は、座り込んでしまったニアの肩をそっと包んだ。ニアはゆっくりと振り返る。

開いたドアから、見慣れた何人ものスタッフが現われた。弾かれた様に駆け寄ると、ニアは葵に縋り付く。

「ええっ？ ニア？ ……貴方ニアなの？」

彼女達もまた、変わってしまったニアの姿に戸惑い、三島と同じ反応を見せる。

「すまん山崎。ここ最近、お前の具合が悪いと知っておったのだが……他に頼る者が居なくてな」

「構わんよ。お前の頼みだ」

三島の声にドクターは軽く顎を引いて応えた。三島の言う通り、ドクターの青ざめた顔色は以前とは随分人相が違っている。それが単なる疲労から来たものが原因では無いと容易に見当が付く。

ドクターはニアの変貌に戸惑いながら、アーヴィンの症状を詳しく記録している電子カルテに眼を通した。

「状況ははかばかしく無い様だな？ すぐに降りよう。ニアも来…

…？ おい三島、ニアの手に在るのは何だ？」

ドクターは、ニアの電磁手錠を見て、露骨に顔を顰めた。

「どうした？ まるで犯罪者扱いだ」

「ああ、ちょっと事情があつてな」

「外せんのか？」

「今はな」

＊ ＊

オースティンさんの居るフロアに、葵さん達と一緒に降りて来たニアは、何故か術衣に着替えさせられていた。

ニアの不安が僕に伝わる。けど、僕には薄々判っていた。僕が生前受けていた処置。きっとドクターは彼にもその処置を試みようとしているんだ。

でも、それを遣るには……

ドクターが手早くオースティンさんを診察した後、ニアに近付いた。そしてニアの両手を取る。

「ニア、彼を助けたいか？」

ニアは黙って頷いた。ドクターはニアの反応を確かめるように大きく頷く。

「彼は、今、ウイルスに感染しているのだよ」

「ウイルス？」

「ああ。インフルエンザによく似た、呼吸器系に摂り付くウイルスに感染している。このウイルスは、私が昔知っている人物が感染していたウイルスと、とてもよく似ているものだ。普通の人を持ち合わせている免疫システムなどは、意図も簡単にすり抜けてしまう。それだけ強い毒性を持っているのだよ。HIVの様に、感染しても陰性であれば問題は別だ。が、陽性になって一度発症すれば……残念だが、このウイルスに効果的に効くワクチンは無いだ」

ニアは、ドクターの言っている事が解っているのだろうか？

僕の不安はどんどん拡がって行く。

「どう、どうすれば良い？」

ニアは縋る様にしてドクターを見上げる。

「毒性は若干弱まってはいたが、これに良く似たウイルスに感染していた者がついこの間まで居た……マックだ」

僕？　僕が……感染……者？

ショックだった。急に喀血したり、体調が極端に悪くなったのはそのせいだったのか。だったら、ドクターがこれからしようとしている処置は……僕は確信を持った。

（ニア、断るんだ）

（？）

（今からでも遅くない。ドクターの遣ろうとしている処置を断るんだ！）

僕は、懸命になってニアを踏み止まらせようとした。

そう。ニアだけが生まれつき持っていたんだ。この特殊なウィルスに対抗出来る抗体を。だから、僕にはニアの輸血が必要だったんだ。あの時オースティンさんに摂り憑いていた奴がニアを襲っても、ニアは感染しないで無事だった理由が、今なら納得出来る。

ドクターは尚も続けた。

「彼を治療するには、抗体を持ったお前の血清が必要だ。今から培養している猶予は無い。直接投与するしか無い。解るね？　だが、それともかなりの量が必要になる」

「助かるの？」

たった一パーセントしか無かったニアの希望が、ドクターの言葉で半分に膨れ上がった。

ドクターの掌の中で、ニアは手をぎゅっと握る。

「だが、必ずしも彼が助かるという保障は無い。仮に助かったとしても既にかんりの意識障害だ。ニアの事を覚えてはいないかも知れないよ？」

「いいよ。それでアーヴィンが助かるかも知れないなら……」

ニアは穏やかに言った。

（ニア、駄目だ。止める！）

ニアの中で、僕は必死に反対する。けれども、僕の声はニアの心には届かなかったみたいだ。まるで貸す耳を持たないニアの様子に、僕は焦った。

「それだけではない。簡単に了解をしてくれるな」

ドクターは余りにも淡々としたニアの態度に戸惑った。

「ニア自身も危険な状態になるのだぞ？ 処置後、記憶の欠如も考えられる。彼の事を忘れているかも知れないのだ……マックはもう居ない。お前はあの子に対して十分過ぎるほど役目を果たした。もうお前は自由だ……私もどうかしている。ニアにまた術衣など着せて……」眼を閉じて後悔する様に首を横に振った。ドクターは、暗にニアが協力しても無駄だと解っている様な口振りだ。「……やはり駄目だ。私には……今更、お前が命の切り売りを他人にすることは無い。義務だと考えるのは止しなさい。ましてや、彼はグレネイチャだ。お前がそこまでして助ける必要は無いんだよ」

「厭ッ！ ドクターまで……どうして？ 皆どうしてそんな見捨てる様な事を言うの？ アーヴィンがグレネイチャだからって……酷いよ！ そんなのヘンだよ！ アーヴィンはいつだって……いつだって、何度もニアの事助けてくれたよ！」

泣きながらニアはドクターを睨んだ。

「だからこそだ」

ドクターはニアが人種差別の偏見を全く意識していない事に気付いて話し方を変えた。

「……？」

「彼が助けてくれたお前自身だからだ。危険な賭けをして……そうまでして彼が喜ぶとも思うのかね？」

「そんな……そんなコト解かないよ……」

ニアはドクターの諭す口振りに怯み、弱気になって何度も頭を振った。

（受けちゃ駄目だ！）

僕は、強く拒否する。

（……何で？）

ニアが応えた。聞こえてたの？ 僕の声が。

（ニアの身体だよ？）

ニアの言葉が突き刺さった。

(そ……うだよ。ムキになって……ごめん)

僕は自分を恥じた。本当にニアの事を心配していたんだろうか。ニアが危険な目に遭うって事は、詰まりは僕も危険になるって事だ。でも……そんな心算でニアを引き止めようとしたんじゃない……と思う……多分。

「ドクター！」

スタッフの一人が駆け寄った。

「昇圧剤に反応しなくなりました。急速に心音が下がって来ています。」

「このままでは危険です」

オースティンさんの状態がいよいよ厳しくなっている。迷っている時間は無い。

「やっぱり駄目。無駄だって、迷惑だって言われてもいい。ニアは……ニアはアーヴィンを助けたいよ……お願い！ ドクター……」

大粒の涙がはらはらとニアの頬に毀れる。

「……解った」

ドクターは静かに頷いた。

＊ ＊

誰かの視線を感じて、ニアは目を覚ました。目の前に緩やかに波打った金髪の美人が居る。

「やっと気が付いた。大丈夫？ 気分はどう？」

彼女はニアの長い髪を三つ編みにしていた。何処からか、紺色のサテンで出来たりボンを持って来て、きゅっと結ぶ。

そして、ニアの枕元に顔を近付けて頬杖をしたまま、にっこりと微笑んだ。

「……エ……ルフィン……？」

「そうだよ。覚えていた？ 良かったあ。ドクターから、記憶の欠如は無いよって聞いていたけど、ちょっと心配していたのよ」

「エルフィン、熱、下がったんだ」

ニアは彼女が傍に居てくれた事で表情を緩める。

「……？」

ニアはゆっくりと起き上がった。

彼女が居てくれて安心して居る筈なのに、急に何だか落ち着かなくなつた。何故こんなにも落ち着かないのか、解らない自分が腹立たしくなる。

「気になるのね？」

「え？」

ニアはうろたえた。

「……何の事？」

「あら、覚えてないの？」

ニアはエルフィンに釣られて曖昧に笑つた。

笑いながら、何故か涙が毀れる。

（ドウシテ？）

「んもー、駄目ね。ドクターもいい加減なんだから」

「ごめん……どうしてなのかなあ」

立ち上がったエルフィンは暫らくニアの様子を窺っていたが、やがて腰に手を当てて肩で息を一つ吐いた。

「……まだ、地下の展望室に居るんじゃないの？ 行つて来れば？」

「地下？ 展望室？」

ニアは混乱した。

「確か、ニア達宇宙船の中じゃなかった？」

「ううん。月の病院よ。あの後搬送されたの。地下には、地形を利用して海中展望室があるのよ。多分そこにまだ居ると思うけど？」

「居るって……誰が？」

（今、ニアが一番逢いたい人じゃないの？）

ニアの中に居るマックが少しだけ意地悪そうに言う。

戸惑っているニアを見て、エルフィンは片手で額を押えた。

「肝心なコト覚えていないなんて……もお、行つて来なさいよ。ほ

ら、早く!」

半身バイオノイドになったエルフィンの凄い力で追い立てられて、ニアは病室からひよいと放り出された。

気を利かせたマックが席を外そうと、ニアの姿が映った鏡から出て来て、エルフィンと二人でニアを見送った。

＊ ＊

ニアはエルフィンの言っている意味が解らないまま、移動通路に乗った。

途中、何人もの病人や怪我人の人間やサイバノイドと擦れ違う。見たことも無い広い病院内に、ニアは自分の事さえ解らなくなり、精神的に不安定な状態に陥った。

やっと地下へ辿り着き、エレベーターの扉が開く。

「わ?」

ニアの視界一杯に、誰かの胸元があった。

ニアが降りようとして扉のすぐ前に出て来ていたのと、相手が急いで乗ろうとしていたのでぶつかりそうになったのだが、ギリギリの所でお互いにかわす。

「失礼」

男はそう言った後、ニアを見て立ち止まった。

|| 「……似ている?」

|| 「わ、蒼い眼……?」

お互いが誰にともなく呟いた。

ニアは怪訝そうに男を見上げた。きゅんと胸が締め付けられる様な甘い感覚がする。

男は短い銀髪に日焼けした様な赤銅色の肌、そして吸い込まれるような蒼い瞳を持った細身の背の高い男だった。

(『グレネイチャ』……? あれ? この言葉って何だっけ?)

ニアの頭の中でこの言葉が浮かんた。何処かで聞いた事がある様

な気がする言葉だけれど、その言葉が何を意味しているのだからニアにはさっぱり解らない。

（ニアにそっくりだが……誰だ？ この娘は？）

（誰なの？ この人……）

蒼い眼がニアの心を捉え、二人の視線が絡み合う。

暫く、お互いが無言で見詰め合った。

「あの……何処かで会った？」

先に声を掛けたのは男の方からだった。

「それって誘ってるの？」

不躰な男の言葉に、ニアは少々無然となる。

「あっ、いや、ゴメン。そう言うのじゃなくて……その、君が余りにも知っている女の子とよく似ていたものだから」人違いだと思つて、男は慌てて謝った。「その子には、大切な借りがあるんだ……つて、あれ？ 俺どうしてこんな事、見ず知らずの女の子に喋っているんだ？」

男はそう言ってしまったから、左手の甲で口元を押える仕草をした。

エレベーターの扉が閉まり掛ける。

「じゃ」

男は優しく微笑すると、擦れ違いざまに無意識にニアの頭に軽く左手を乗せた。

「えっ？」

一瞬、ニアは感電した様な感覚を覚えた。そして放心状態になる。「……？」

ニアは呆然として立ち尽くした。その後ろでエレベーターのドアが静かに閉まる。

不思議な感覚に顔が次第に赤くなり、恥ずかしくなって俯いた。徐に触れられた頭に右手を持って行く。

（な、何て失礼なの？ 逢った事なんて、事なんて無い……のに？）
赤面して戸惑いながらも、男が消えて行った扉を振り返って見詰

めた。

(……何だろう？ この気持ちは……？)

思い出しそうで思い出せないもどかしさ。何かが心の中で引っ掛かる。

気を取り直して、水中展望台のフロアに視線を戻した。

フロア内は全体が硬化総ガラス貼りで、水面下より五、六メートルの中に建てられていた。

人工海水ではあるが、地球の穏やかな南の海を模して造られている。その中で本物の色とりどりの魚の群れが泳いでいた。

「やあ、気が付いたのだね？」

一人の老紳士がニアに気が付き、ソファから腰を浮かした。両手を軽く広げてにこやかに微笑みながらニアを迎える。

「もう大丈夫かね？」

「三島のおじさん……」

(でも、おじさんじゃない)

自分の事を気遣ってくれる言葉が嬉しかった。しかし、ニアは自分が逢いに来た人ではないと悟ってがっかりと肩を落とす。

その様子に気付いた三島が後を続けた。

「今迄わしと一緒に居たのだからね。此処へ来る途中で逢わなかったかね？ 彼に」

「……彼？」

真っ先に蒼い瞳をした男の顔が浮かんだ。

(！もしかして、さっきの……なのかなあ？)

ニアは振り返り、男が消えて行ったエレベーターを見詰めた。

＊ ＊

「今頃、ニアちゃんは彼に出会えているかしらね？」

エルフィンに僕は紅茶を淹れながらにっこりと微笑んだ。まるで

自分の事の様に嬉しそうだ。

僕もニアの事が気になって仕方が無い。で、マナー違反は十分承知でニアに意識を同調させて、彼女の記憶を探ってみた。

……ちよつと、これは……

僕はニアに遇った出来事をエルフィンに伝えた。

「ええ〜っ？ 会えなかったあ？ どう言う事よそれ」

テーブルの向かい側からエルフィンが身を乗り出して僕に顔を近付ける。

どきっ！

目の前十数センチにエルフィンの顔があった。その奥に白い谷間が覗いている。

（うわ！）

僕は瞬間全身を強張らせて身構えた。あっという間に全身が火照って真っ赤になる。

「せつ、正確には、ちゃんと彼に出会っていたんだ。けど、ニアが成長してしまつて彼に気付いて貰えなかったのと、ニアの記憶の混乱と欠如でお互いに気付かなかったんだよ。」

「あーあ、ツイてないわね」

エルフィンはがっかりして椅子に座り直した。そして、テーブルに置いてあった新聞に眼を通す。

「それはどうかな？」

僕は首を傾げてチョツと偉そうに腕組みした。

「どうして？」

「だって、ニアが好くっても、彼にとっては迷惑なのかもしれないでしょ？」

「何偉そーな事言ってるのよ。マックってば、精神年齢高いわよ」

「？ それって、褒め言葉？」

僕はきょとんとしてエルフィンを見た。彼女は視線を僕から逸らせて新聞に戻す。

「いやあ〜ね。その逆よ」

「うつ……」

痛い所を突かれて僕は天井を仰いだ。

葵さんからもよく、『ご年配の思考だ』とか言われてた。僕には何事に関してもすぐに否定的に捉えてしまう処があって、とても十二歳の少年の言う事じゃないって。けど、そんな考え方をしてしまうのは僕の置かれていた状況がそうさせているからだとも言っていたっけ。

「何事も実際にチャレンジしなくっちゃ。彼が迷惑だってハッキリ言ってるワケじゃないでしょ？」

「そりゃあ……そうだけど」

って、んな事言えるものかなあ？ 少しでも気があれば僕なら却って言えないけれど。

僕はエルフィン横顔を眺めた。彼女は僕の視線に全く気付いていない。

（……やっぱ、綺麗だ）

彼女の整った横顔は、僕が初めてときめいたモデルのティファ・フィニによく似ている。彼女が生きていればエルフィンと同じ歳なんだよな……

僕は無条件でエルフィンに見惚れていた。

「ええっ？」

新聞に眼を通していたエルフィンが、ページを捲った途端に驚いて声を上げた。

「？」

「ちよっ、コレ、マズくない？」

彼女が指した社会面には、紙面半分を大きく占拠したミューズ社の船内写真が掲載されていた。

僕には、それを撮影したのが誰であるのかすぐに判った。でも、あの時三島が一切の情報を処分するようにと彼に釘を刺していたのに……

（それをやっちゃったんだ……あの人は）

写真には、辺り一面に真紅の炎が上がり、船室の床一面におびただしい人数の子供が倒れている。記事には『遺体』として扱われていた。

エルフィンはその子達が僕達の姉妹になっていたかも知れない被験体である事には気付いていない。

「これだけの写真をよく撮れたわねえ。この船って私達が乗っていた船よね？ 爆発した筈でしょ？ 覚えていないけれど」

そこまで言って、エルフィンは思いついた様だった。

「……居たわ。乗船していたカメラマンが……彼が遣ったのね？」

「みたいだね」

僕はあっさりと肯定する。

「ミューズ社もかなり危なくなっただね。『開発商品に扱ぎ付けるまでに繰り返される非合法な実験』ですって。『人体の成分をそのまま抽出』とも書かれているわ。本当かしら？ もしそれが本当なら、効果が絶大であったとしても次に消費者が購入するかしらね？」

「気持ち悪くて買う気になれない？」

「ええ」

エルフィンは迷う事無く即答した。

「けど、もの凄い効き目なんですよ？ それ。美容目的で使用している程度ならともかく、医療用にも使われているんだよね？ キモいとか言っている次元の問題じゃない、本当にそれを必要としている人達にとってはどんなに高価な物であっても……じゃない？」

「……そっかあ。でもねえ、これって倫理の問題よね」

「実際、連邦軍のご用達になっていたでしょ？ 軍はミューズ社との癒着を暴かれて痛手を受けたんだよね？ けど結局は必要とされている以上、警察からの嚴重注意と監督で終わるのじゃないかな？ で、登録社名を変更してでもこのまま存続。ひょっとしたら、次は厚生技術省とかからお誘いが来るなんて事も有得たりするかもね？」

「なあーんだ。じゃあさ、この記事に掲載しても意味が……」

「無い訳じゃないよ」そして、僕はエルフィンには判らない様に呟いた。Ⅱ「少なくともこの僕やニアにとっては……ね」

彼が遣った事に対して賛同は出来ても、どうしてか未だに彼の事が好ましく思えないはまだ。

「マックウ、エルフィン」

振り返るとニアが、ドアに力無く寄り掛かって立っていた。

彼女の背後に何かドロドロとしたモノが憑いている様に見える程、ニアの表情は暗い。

「あ、会えなかったよお。もう、二度と会えないかもって。三島のおじさんがそう言ってたよお。くすん……」

ニアは肩を落として涙ぐんだ。

「ごめんね、ニアちゃん。私達、知っていたの」

「あっ！　もお、エルフィン。言っちゃ駄目だよ」慌てて言ったが、もう遅い。ニアが僕を恨めしそうに睨み付けていた。「後が怖いから」

言い終わらない内にニアの拳骨が僕の左右のこめかみを強く挟んだ。

僕はギャーと叫んでのたうち回る。

……二度と会えない……って、それはどうかな？

僕は断言こそ出来なかったけれど、彼にはまたいつか会えると直感的に思った。

それも、そんなに遠くない日に。

第1章 完

第12話 デリート（後書き）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2985c/>

デリート

2011年10月2日03時33分発行